
コードギアス 本編派生短編集

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 本編派生短編集

【著者名】

Nコード

月城十夜

【あらすじ】
コードギアス反逆のルルーシュの本編から派生したお話の短編集です。

STAGE 1・999 「未知との遭遇」（前書き）

STAGE・1「魔神が生まれた日」で死んだはずのC・C・が復活した後の独白+です。

STAGE 1・999 「未知との遭遇」

「ああ、どうにか無事に力は戻ったさ」

「氣だるげに咳きながら、地面に直接身体を横たえていた少女はムクリと上半身を起こした。

無意識の仕草で長い緑の髪をかき上げると、後頭部を探った手のひらにべつとり血痕が付着したのに気づいて、少女は不快そうに金の瞳を鋭く細めた。

その血痕の始末をしばらく逡巡した後に適当に服の袖で拭うといかにも面倒臭そうに吐息しながら独白を続けた。

「 効果？ さアな、そんなものは私の知ったことではない。本体の私は完全に死んでいたんだからな」

否。

感覚的な部分で、少女はその感覚を知悉していた。

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる。おまえ達は 死ね。

少年がそう命令を発すると、周りを取り囲んでいた軍人達が嬉々として自らを死に導いた。

その亡骸が無造作に転がっている倉庫内。

むせ返るような血の匂いが周囲に濃厚に充満していて、人間の死には関わり慣れている少女ですら、しばしの間不快の色を示して、金の瞳を細めながらその光景を見つめていた。

が、それもつかの間、じきに少し怒っているような口調で独善的な告白を続けた。

「 はア？ ギアスの委譲に関して以外は、私の知ったことではない。それくらい承知の上で、私にあいつの存在を おい、それよりおまえ、本当に構わないのか？ 仮にも自分の息子を はあ？ だから、どうしてそういう話になる？ ギアスを与えた以上、私はアレの成長を待ち、願いを叶えて貰うまでだ」

矢継ぎ早に独白を発しながら、ややあつて少女は疲れたような表情で立てた膝を腕の中に抱き寄せる、その上に、つい先ほど銃弾で打ち抜かれたばかりのひたいをギュッと無造作に押し当てる。

クツリと空気が洩れる音が聞こえたのは、少女が喉の奥から乾いた笑い声を発したからだ。

「 ああ、いかにもおまえ達の息子らしいと思つたぞ。大した執着心だなア、アレは。アレなら十一分に私の望みに耐えられるかもしないぞ？ 自分が生き長らえることを何より優先的に、何だって犠牲に出来るタイプさ。よっぽど私なんかより、不老不死の人生にふさわしい男かもしけないな」

淡々と言葉を発するその響きとは全く以つて反比例して、自分の膝をきつく抱擁している腕の力が次第に増していき、決して高価とは言ひがたい拘束衣の布地が引き連れるような軋み音を上げていた。少女はそれにも構うことなく、クツクツと喉の奥で笑い声を発し続けている。

「自分の息子が、ひょっとすると地獄に陥るかもしないのに、よくもまあそうやって呑気に笑つていられるな。ひょっとして私がまた断念するでも軽視しているのか？」
「いや、今の私以上に絶望を抱えた奴など居ないさ。こうなつたら、あの男の生に対する執着を、心ゆくまで利用させてもらうだけさ。あの男の魂を一片たりとも逃すことなく、魔女の執念で生き地獄へと送り出してやる。結果的に私のコードが手に入るなら、おまえ達だつて形式は別に構いはしないんだろう？」

ついには縫製の甘い部分がビリリと裂ける音が辺りに響くが、少女はそれでも渾身の力で掴んだ指の力を緩めようとしなかつた。
むしろ纖細な少女の爪の先が過剰な圧力に耐え切れず、中指と薬指の爪の先が横から裂けるように割れてしまふが、少女はそれすら意に介した様子もなく、無気力な独白を続けている。

「まあ、いずれにせよ、後は結果を御覧じりや。そろそろ私も逃げるぞ。そうそう何度も撃ち殺されてたまるものか。私にだつて痛覚はあるんだからな。アッシュフォード？　ああ、アイツの住まいには、悪いがすぐには向かわない。おまえの言葉を信用しないわけではないんだが、しばらくの間は私だってあの男の適正を見極めるための時間をするさ。そのうち、な。……まあ、適当に何とかする」

言いながら少女は立ち上がり、面倒臭そうに服に纏い付いていた土ぼこりを払った。

傷を負つてから、まださほど時間は経過していないはずだったが、折れたはずの爪はもう既に元の形へと整形されていた。

少女は、いささか唐突にフンッと鼻を鳴らすと、先ほどまでとは少し違つた冷笑を浮かべてクスリと微笑んだ。

「おまえが言つた、マリアンヌ。契約不履行のクセして。……おまえであれ、誰であれ、契約以外でこの私を使役することなど許すつもりは無いからな。シャルル？ そうだな、アイツが私の願いを叶えてくれるのであれば、或いは……フツ、まあ、そう焦るな。『二兎を追うものは』と言つだらう？ ひとまず今は、あの男の資質に賭けてみるだけさ。それから先のことは、ああ、わかつたから、今更四の五の言つてくれるな。言つただらう？ もう既に時の歩みは進み始めてしまったんだからな。 まあ、あの男にとつては地獄の、私にとつては幸福の始まりだ」

最後のそれだけは実に鮮やかな微笑を浮かべながら少女はそう宣言すると、臆したところの微塵も無い歩き方で無人の倉庫を後にしてた。

「……なんとも馬鹿馬鹿しい『魔女の宣誓』だな」

腰丈の高い椅子に一人悠然と腰を下ろしながら、ルルーシュは無感動にポソリと呟いた。

その呟きをふいに耳に入れたルルーシュは、露骨に呆れた様子でルルーシュの背後に近づいた。

「しつこい男だな、同じシーンばかり眺めて。いい加減、嫌がらせにしか思えないぞ？」

一瞬黙り込んでいたルルーシュは、チラリと横目で振り向くと、「よくわかっているじゃないか」

と、人の悪い表情で唇の端を歪めた。

「 いてつ」

「おまえがそのつもりなら、私だって同じ手段で反撃してやるまでだ」

容赦なくルルーシュの後頭部に平手打ちをお見舞いしたC.C.は憤然と咳きながら、カツカツと靴音高く長い回廊の先に歩みを進めた。

空中に無数の絵画が縫い止められている幻想的な空間 Cの世界。

やがてC.C.が歩みを止めた先では、暗い洞窟の中で水音がぴちゃりと跳ねる音が響いていた。

「 やつと呼んでくれたね……私の名前 」

洞窟の中に裸身を晒して横になっている少女。

その少女の顔の上に屈み込んでいた少年が、茫然とした顔つきで腰を下ろし直すシーンが後には続いた。

ルルーシュは、いかにも憮然とした表情でC.C.の後に続くと、ややあって無表情に自分を見上げるタチの悪い魔女の視線に耐えた。だが次にC.C.が口を開いたとき、その口調は思いのほかに真剣なものだった。

「なア、ルルーシュ？」

「何だ？」

そこで一度言葉を切ったC.C.は、また一度絵画のぼづに視線を戻した。

絵画の中では少年が、ためらいがちに血に濡れたハンカチを水た

まりの中に投棄しているシーンが続いていた。

そのシーンをしばらく無言で眺めていたC・C・は、やはり無表情に傍らに立つルルーシュの顔を見上げた。

「私なりに、いろいろ考えてみたんだがな。やつぱりどうしてもわからなんだ」

「何が?」

答えながら、だがそれを言つ男の口調は、『出来れば訊ねてくれるな』と言外に物語つていた。

それを察せないほど浅い付き合いではなかつたが、男の意思を無視するのに慣れていたC・C・は、構わず質問を続けた。

「どうしておまえ、私を人間扱いする気になつたんだ? たかがこれしきの出来事で」

端的に言つてしまふなら、たかだか本名を知つたことぐらいで。ルルーシュは、しばらく慄然と顔を顰めたまま、口を開く兆しすら見せようとしなかつたが、いつになく真剣みを帶びているC・C・の瞳も、返事を急かすような真似はしなかつた。

ややあつてルルーシュは、いかにもげんなりとしている様子で、当て付けのように大きくあきらめの息を吐き出した。

「三日くれ。その間に、どうにか答えらしいものを考える」

C・C・は、クスッと息が洩れるような笑い方をした。

「えらくまた真剣に考えてくれるんだな?」

ルルーシュは、慄然とした表情のまま、それでも断固とした口調で切り返した。

「別におまえのためじやない。下手な考え方をして、後になつてアレコレ考え直すような真似を避けたいだけだ」

C・C・は、きょとんとした表情で小首を傾げた。

「要するに、自分のためか?」

「ああ、俺はそういう男だ」

「今も昔も変わらずか?」

「そう言つ事だ」

「言つて、すげなくルルーシュは踵を返したが、Ｃ・Ｃ・は後を追おうとはしなかつた。

カツカツと快活に去り行く背中に向かって、C.C.はひとり無感動に訊ねた。

「なア、ルルーシュ？」

一
何
だ
?

「もしも私が死ななくて、おまえも窮地に立たされることなく現場から脱出することが叶つていたら、そのときおまえは私の遭遇をどうした?」

ルルーシュはびたりと歩みを止めると、その場でしばらく黙考して、やがて肩越しに視線を返した。

「どうあえず、アッシュフォードに連れ帰つていったんじゃないのか？」

何しろシンジユク・ゲットーを壊滅させるほどの危険人物なんだ
からな。ヒレレリ・シユは読む。

「適当に放り出すつもりなら、最初から連れて逃げ回る必要もないだろう?」「..」

「それから？」

「そうだな、適当に時機を見て、安全な場所に逃がしてやる方法でも模索してやつただろうぞ」

「これにはじめのほうが、驚いていの表情でぱちくつと大きな瞳を見開いた。

「正体不明の、いかにも身元の怪しい女に、そこまでしてやる必要があるのか？」

「だから言つたの?」

ルルーシュは答える。肩をすくめがちに。

「俺の心の平穏のためだ。せっかく死地を脱したのに、その後に俺の責任で死なせてしまったのでは後味が悪いだろう?」

「…は無表情に小首を傾げると、不思議そうに訊ねた。

「愚問だな。出会つたことすり、二日もしないつむじに綺麗サッパリ忘れていただろ？」「

Ｃ・Ｃ・はようやく納得したような表情でクスリと微笑む。

「なら、せいぜい三日を考え事に費やすんだな。『綺麗サッパリ忘れられなかつた』場合の返答を」

いかにも余裕たっぷりの表情でからかわれ、ルルーシュは「うるさい」と一言呟くと、それきり一度も振り向くことなく、無限に繋がる回廊の先に向かつて歩みを進めた。

〔 end 〕

STAGE 1・999 「未知との遭遇」（後書き）

Cの世界で記憶を覗いている一人。

作者は共犯者のコンビが大好物なので、作品傾向もそういうお話が多いです。

少しでも愉しんで頂けましたら幸いです。

STAGE 10・55 「夜の休日」

「ルルーシュ、泳ぎたい」

現在時刻、夜中の2時。

ルルーシュは横目でちらりとふざけたことを呴く女を冷たく見下ろした。

「おまえ、今までの契約者たちに決まって言われたセリフがあるだろ？ 良い機会だから教えてみる」

「言われたセリフ？」

C.C.は一見真剣な表情で小首を傾げて素直に質問の内容を吟味した。

「そうだな…、あんまり無理をするな。淋しいならいつでも言ってくれ。ほかに欲しいものは無いのかい？ きみの笑顔は太陽だ。きみと出会えた奇跡に感謝するよ。それから…」

「ちょっと、待て」

「ああ、そうそう。いつもきみは可憐な花の香りがするね。そんなところかな？」

につこり。

ちょっと懐かしそうに笑つてみたりして。

その笑顔に、思わずちょっと動搖してしまったルルーシュは、意味もなくコホッと空咳をしながら視線を外した。

「……ひとつ訊ねるが、男以外と契約はしていないのか？」

「いいや？」

C.C.はベッドの上に腹ばいに寝返りを打つと、両手で頬杖を突きながらつらつらと答えた。

「女男男男女男だな、今の場合だと」

「はア？」

「とことん飲み込みの悪い奴だな。わざきのセリフの順番だ」

仰向けに身体を横たえているルルーシュは、じつに天井を睨みながら先ほどのセリフを反芻した。

しかし、男が女に代わったところで、まるで口説いていふよくな言葉の羅列である事実に変わりはない。

思わずそのままゴロリと無言で寝返りを打つと、C.C.が露骨にクスリと息を漏らして笑つた。

「なんだ、妬いているのか?」

「バカか、おまえは」

「なアなア、ルルーシュ~」

「だからなんだ?」

「泳ぎたい」

徹頭徹尾、思い立つたが吉田とばかりに自分のワガママを押し通すC.C.の傍若無人ぶりにほとほと呆れ果ててしまつたルルーシュは、そのまま聞こえないフリを裝つて寝る体勢を整えた。

重ねて言つが、現在の時刻は夜中の2時。草木も眠る丑三つ時だ。そんな時間にどこの物好きが泳ぎになび出掛けるものか。どうしても泳ぎたいと言つのなら、いくらでも好きなだけ出掛けてくると良い。ただし、自分ひとりで。

「……う、ッ?」

田を閉じたまま憤然と徹底抗戦の構えを続けていたルルーシュだったが、にわかにかぶりと耳を噛まれて思わずびくりと反応してしまつた。

「おまえは……シ、ビームでワガママを押し通せば、

「ほう?」

激昂するルルーシュの肩の上に顎の先を押し付けて意味深に声を潜めるC.C.は、指先でルルーシュの身体のラインをなぞり上げながら艶のある声音で呟いた。

「誰のせいで眠れないと思つていい? 今夜は疲れているから嫌だといったのに、あんなにしつこくおまえが…

「妙な言い方をするなッ！　週末の作戦のシミュレーションに付き合つてもらつただけだらうッ！！」

「なにをそんなに赤くなつてるんだ？　だからしつこく私に話を聞くと迫ってきたんだろう？　と言つてはいるんだよ、私は。何か間違つたことを言つてゐるか？」

くすり。

絶対わざとやつてゐるに違ひない方法で容易にルルーシュを激昂させることに成功したC・C・は、いかにも不思議そうに小首を傾げながら微笑した。

ルルーシュはとつさに奥歯を噛み愚かな羞恥をすり潰すと、あてつけがましく大きく息を吐き出しながらベッドの中から抜け出した。

「……1時間だけだぞ？」

C・C・はそれこそ太陽が輝くよつて微笑んだ。

生徒会副会長の特権を利用して、ルルーシュは比較的自由にアッシュフォードの施設を利用していた。
そこに目をつけたのがC・C・である。
なにしろ自身は学校というものに通つた経験が無かつた。
無限に存在している時間を活用して本だけは無数に読んできたので、ルルーシュが時々舌を巻くような専門知識を披露することもある。

そうした部分を頼りにして時にはC・C・を相手に作戦の相談を持ちかける場合もあるわけだが、今日の場合は自分でもあまりに完璧な作戦を思いついてしまつたものだから、話しかめたら止まらない。

くなってしまったのだ。

まったく自分でも子供のようだと思つてしまつたが、實際問題ある祭りだ。

8月も下旬に差し掛かり、夜は涼しいが、日中は暑い。

日本の気候で唯一厄介な夏の湿氣もかなりマシになつてきていて、少々強めに風が吹き付けるとちょっと涼しそうだ。

ルルーシュは簡単なシャツとジーンズに着替えると、珍しく露骨に喜びを醸し出している。C.C.を従えて無人の学園内を闊歩した。施設の施錠はすべて電子キーで行われているから、ほとんどの施設をフリー・パスで使えてしまう特権が今は少しだけ鬱だった。

けれども、どんなに暑い夏の盛りでも、日中には海水浴ひとつ諭しめないC.C.の境遇を考えるとなんとなく同情を覚えないこともない。やがてプールに到着した頃にはほとんど機嫌も直っていた。「おい、C.C.? さすがにこの時間では更衣室は使えないからな、先にひとりで入つて着替えている。俺は外で水温の確認をしてくるから」

そそくさと置いて背中を向けたが、C.C.は平然とした様子でそれに答えた。

「持つてきてないぞ?」

「……何?」

さすがに幻聴かと思つて、ルルーシュはいぶかしげにC.C.の表情を窺がつた。

それを『聞こえなかつた』と判断したC.C.は、真面目な顔でさらに言葉を付け加えた。

「だから、水着を持つてきてないと言つたんだ」

ルルーシュは眉間に濃く皺を刻んで、ギリッと奥歯を噛み締めた。

「……だつたら、こんな時間にこんな場所に何をしに来たんだ?」

C.C.は怪訝そうに眉をひそめてルルーシュの表情を眺める。

「泳ぐ以外にプールに何の用があるんだ?」

答えながらさつさとプールの中に姿を消した。

ルルーシュは、このままC・C・Cを置き去りにして部屋に帰つてやろうかと思ったが、どのみち施錠の必要があるので結局出直さなければいけないわけだつた。おそらくC・C・Cのことだから、どれだけ深く眠つていようが関係なく「鍵を閉めにいけ」と起こしてくれるに違ひない。

だつたら、いつそのことC・C・Cが泳いでいるそばで仮眠を取つてやるとばかりに憤然と後に続いたが、あわやのところから、どれ叫びかけた口を開ざした。

耳まで真っ赤に染めながら、とつと回れ右をした。

「……おっ、おまえには羞恥心といつものがないのかッ！――」

C・C・Cはそんなルルーシュの反応にクスリと息を漏らして微笑んだ。

「おまえがスケベ心を出さなければ用しか見ないさ。月光浴という言葉ぐらい知つていてるだろ？？」

言つなり、プールサイドに来ていた服を脱ぎ散らかしてドップリと水の中に飛び込んだ。

月光を映していた穏やかな水の表面が、激しく乱れて水の飛沫を上げると同時に、C・C・Cの長い緑の髪が月の輝きを受けて美しく光つた。

水音に惹かれて思わず振り向いてしまつていたルルーシュは、薄い緑の美しいベールが濃い黒の水の中に沈みゆく光景に激しく目を奪われた。

都会の環境にこの女を閉じ込めているのは自分が、時折それが窮屈そうに見えてしまうときがある。

そのワケをこんな場合になんとなく感じられるよつた気がしていた。

C・C・Cはどこから見ても満足げな様子で、水の中をスイスイ泳いでゆく。

平泳ぎだったのでルルーシュも特に気にすることなく思わず眺めてしまつたが、しばしば水面に丸くて白い尻の表面が浮いているの

に気付いて慌てて視線を逸らせた。

「気持ちいいぞ、おまえも一緒に泳いだらいいのに」

「……勘弁してくれ」

本当に、そう願いたい心境だった。

Ｃ・Ｃ・はルルーシュの反応を面白がるよつにふふふと笑つたが、じきにその笑顔もつかの間の解放感を愉しむ本物の笑顔に移行した。

ルルーシュは、ぼんやりその光景を眺めながら、そういうばこいつが無邪気に笑つた顔を見たことがないなといまさらによつに考えた。

「前から泳ぐのが好きなのか？」

「さア？ 自分でもよくわからないな。そうだと言つたら何か違うのか？」

「別に。……まあ、たまには付き合つてやらん」ともないというだけだ

「ふん、どうせその代わりに、また滔々と作戦を語つてみせるのだろう？」

「よくわかつているじゃないか」

「おまえはそういう男だよ」

たがいに憎まれ口を叩きあいながら、プールのじじまにはクスクスと穢やかな笑いの気配が漂つた。

Ｃ・Ｃ・は本当に小一時間あまりも水の中で野性に返つて、ルルーシュはその間ぼんやりと月見物を続けていた。

ルルーシュ自身、こんなに長いあいだ何も考えずに過ごしていたのはずいぶん久しぶりのことだった。

「疲れた。ルルーシュ、手を貸してくれ」
やがてプールサイドに戻ってきたＣ・Ｃ・は、当然のようにルルーシュをこき使つことも忘れない。

それに無意識のうちに従つてしまつてから、ルルーシュは慌てたように視線を逸らした。

「だから、羞恥心を少しくらいは持てと言つのに」

「目を瞑つていろよ。常識だらう？」

しゃあしゃあと返されて、それでも従つてしまふ自分は甘いのか？
まあ、たしかに最近は世話になる場面も増えていることだしな、
ルルーシュは自分に言い聞かせながら、露骨に渋々プールサイド
にしゃがみ込み、目を瞑つたまま両腕を差し出した。
そこに自分のほうから捕まってきたC.C.は、遠慮なく体重を
かけるとザバリと一気に水の中から上がつてきた。

「 ッ！」

だが、地上に帰り着くのと同時にルルーシュは唇の上に冷たい感
触を感じて、驚きに思わず目を見張つた。

「……らしくもない。礼のつもりか？」

もちろん一瞬で視線を逃していたのだが、それでも間違いなく触
れていたのは唇の感触。

C.C.はルルーシュの手渡したタオルで悠然と身体を拭きなが
ら、クスリと息を絡めて微笑んだ。

「勘違いするな。話しただろ？ 私のはただの記憶の更新だ。そ
れ以上の意味は何もない」

「記憶の更新？ どうして今そんなものが必要になるんだ？」

「当然だろ？」

どうしてわからない？ と言いたげな聲音の調子に、思わずルル
ーシュは視線を廻らす。

C.C.は心底愉しそうな表情で笑つていた。

「たまには付き合つてやると言つただろ？ その約束を忘れられ
たら困るからな」

その笑顔がいつになく本氣で愉しそうな感じで。

どうせならその笑顔を記憶しておくよと思つてしまつたルルーシ
ュは、とつさに背中を向けながら内心ひそかに動搖を持て余してい
た。

】 ende 】

STAGE 15 · 55 「闇の休日」(暗黙地)

本編の内容には「一ノクロ」も触れてません。

STAGE 15・55 「雨の休日」

明けても、暮れても、雨、雨、雨……。

よつやくうるさい蝉時雨のシーズンも終わって、肌に突き刺すような陽光が穏やかになつてきていると言つのに。いつも連日雨ばかりでは、嫌でも気分が気鬱に陥つてしまつというのだ。

アッシュフォード学園内のクラブハウス。

ルルーシュが10の頃から仮の住まいにしている部屋は、そのとき雨の音と、沈黙と、無機質なキー操作音だけに満たされて切っていた。

毎日勤勉に働いているメイドのおかげで洗濯物が乾かないと嘆く必要はなかつたが、それでも空気中の湿度をリアルタイムに吸い込んでいっているようなベッドのシーツは、なかなか人の温もりを消失してくれないので気持ちが悪かつた。

しばらくのあいだC.C.は右に左にと、口口口口寝返りを続けていたのだが、ついにはイライラが高じて起き上ると、すぐさまばつたり大の字に上下の位置を転換した。

自分の温もりに触れていないシーツの部分が、気持ち先よりも乾いているようで心地好い。

しかし、それも一瞬のことだった。

しばらくすると、またじわりと背中から湿度が溜まつてこくようなくせに襲われる。

その間も、カチカチと無機質な音に変わりはない。

「……おい、ルルーシュ」

「何だ？」

声をかけると思いのほか迅速に返事が返ってきたものだから、余計にC.C.はムカついた。

「こんなに可憐な私が、いかにも退屈そうに暇を持て余していると言つのに、”どうした？”と気遣う余裕もないのかこの童貞坊やが」

力チカチカチ

たゆみなくキーの操作音は続いている。

力チカチカチ、力チ、力チリ。

「では聞くが、どこの可憐な女がある」とに他人の究極のプライベートにすかずか土足で踏み込んでくるんだ？ しかも、俺はただの一度もそれを肯定した覚えがないんだがな？」

「えつ？ ちがうのか？」

思わずC・C・は、大の字の状態から頭だけ上に持ち上げた。横目でC・C・を睨んでいたルルーシュは、とうさんにその目を逃がした。

「……おまえには関係ないだろ？」

力チカチカチ。

ふたたび静寂を刻むリズムが開始されてゆく。

「……ルルーシュ……」

「今度はなんだ？」

「すまなかつたな、寝ぼけていたとはい、ゆうべナナリーの部屋で小一時間ほど同衾した。もつともナナリーも寝ぼけていたから大事無い。愉しかつたなア……おまえの悪口を色々聞かされて」

ツガ、ブ　　!!

ビープ音。

「つあ、あつ……！」

どうやらつづかり大変な操作ミスをしてしまつたらしい。

柄にもなくルルーシュが焦りの色も露わに、しばらくのあいだ猛烈な勢いでキー操作を続けていた。

C・C・は胸の上に落ちていた髪の束を弄つて、そろそろスペシャル・トリートメントでもしてみるかと別なことを考え始める。

「……まったくおまえという女はツ！ どこまではた迷惑な奴なんだツ！」

数分して、ようやく復旧することに成功したのだろう。

こ・こ・の足元で騒音を生み出していたルルーシュが、手を止めて振り向くなり激昂して叫んだ。

しかしその頃には、すこし話して氣の済んでいたこ・こ・はトロトロと襲い来る眠気に身を任せていた。

ぐるりと横臥に身を丸めて、自分で自分の身体を抱き締めながら寝言のように呟いた。

「…………シユ、…………くん……は？」

「はア？」

にわかに激しく降り始めた雨の音が邪魔をして、普通に話しても聞きづらい。

そんなところでは呟きが耳に届くはずもなく、ルルーシュは「どうして俺が」と愚痴を呟きながらこ・こ・の枕元に近づいた。

「なんだ？ 何か言ったか？」

「…………チーズくんを……どこ…………」

「人聞きの悪い言い方をするな。おまえが洗えといったから、咲世子に頼んで洗濯中だ」

たちまち眉間にキリキリと皺を寄せたこ・こ・は、眠気で口クに動かぬ手のひらでポンポンとベッドの上を叩いた。

「…………だつたら……おまえ…………」

「ふざけるな。人を抱き枕代わりに使うもつか？」

「…………も…………いい…………」

さりにキリキリと眉間の皺を深めたこ・こ・は、唸るようにいながら反対側に寝返りを打った。

部屋の中には今なお濃厚に、こ・こ・が先ほど食べたばかりのピザの残り香が漂っているかのようだった。

要するに、食後の暇を持て余していたこ・こ・は、眠くてぐずる子供のするようにルルーシュに絡んで、今度は甘えさせようと要求しているわけだ。

「どこまでワガママな女なんだ、おまえは……」

冷静に状況を分析し終えたルルーシュは吐き捨てるようにして咳いて、C.C.をベッドに残してまたパソコンの元に戻った。

カチカチカチ

窓の外にはにわかに雷鳴。

稻光は徐々に勢いを増していく、窓のガラスを打つ雨の飛沫もバババツとまるきりホースで水を直接吹き付けているような激しさだ。

ガラガラピカリ バリバリバリ…

とりあえず重要なデータはパソコン内部と外付けハードディスクに分散して保存した。

万が一にも帶電の可能性があるから、雷の鳴つている最中は精密機械の使用は厳禁。

それくらいの知識は当然ながらに持っている。

だが、室内での使用中に一度も被害に合つたことのないのもまた事実だ。

頭の中で言い訳がグルグルと作戦準備の邪魔をする。

そもそもどうして俺が、あんな可愛げの力ケラもない女にやさしくする必要があるのだ？

言い訳が次第に説得の様相を呈していく。

ガラガラピカリ バリバリバリ…

空気を搖るがす雷鳴に、それでなくともガタガタと振動を続けていた窓のガラスがビリリと激しく震えた。

あまりに一気に悪化してゆく天候に、おそらく小一時間もすれば止むのだろうなと判断した。

現在時点では必要な資料は3種類。2時間もあれば片付くような代物だ。

思わず鋭く目をすがめてしまいかがら、壁の時計を見上げた。

午後1時 まあ、休憩するには少し早いが、誰に咎められるわけでもない。何しろ今日は休日だった。

ルルーシュは軽く前髪をかき上げながら椅子の背に背中を預けて、

しばしのあいだ恨めしそうに外の天気を見つめていた。

「……まったく、仕方のない奴だな」

忌々しそうに咳きながら、不貞腐れた態度で席を立つ。

その頃にはC・C・はスウスウと寝息を立てていた。

このひるさい状況下でよく寝られたものだと呆れてしまったが、最前と同じようにギュッと身体を丸めた姿勢に変わりなく、いつも何かを抱えたがる空間をひどく持て余しているように見えてしまった。

起きている最中はニツコリ笑つて人を斬るような性格をしているクセに、妙なところで幼児性を残している女だなとしばらく観察を続けていた。

「……まあ、どちらにしろ俺には関係のないことだがな」

咳きながらルルーシュは「」そりとベッドの上に移動すると、背中合わせにC・C・の隣りに横になる。

雨の音はザアザアと暇を見つけず、さつとこの調子では学園のぐるりを囲つた用水路が溢れるのも時間の問題だなどなんとなく考えた。

地下の循環システムがリアルタイムで監視を行つてるので、実際に溢れたことは一度もないのだが。

昼寝の習慣はなかつたので頭はスッキリ冴えているはずなのだが、どうにも思考が冗長的だなど他人事のように考えた。

「…………」

やがて眠つている者の遠慮のなさで寝返りを打ち腕を投げ出してきたC・C・は、手ごろな対象を至近に見つけてルルーシュの腰のあたりにキュウッと抱きつきの腕を回した。

先にも一度要求され、なんとなくこうなることを予想もしていたから別段驚きもしなかつたが、結果的にC・C・の意識の無いところで甘えさせることに成功したルルーシュは、ふんっと鼻の先で笑い飛ばした。

「この淋しがり屋が……」

だったら普段から少しはそれらしく、しおりしく振舞つてことと言つものだ。

なにやらひどく勝ち誇ったような心境でそんなことを考えていた
のだが、しおりしく振る舞いナナリーのように可愛らしく甘えてく
るこ・こ・の姿を想像して、しばらくなあいだルルーシュは雨の降
る音に交えて声を殺して笑い続けていた。

〔 end 〕

STAGE 15・65 「夜のガスパール」（前書き）

本編の内容には1ピコグラムも触れてません。

STAGE 15・65 「夜のガスパール」

「音の絵」か。ラフマニノフの練習曲だな」
声をかけられるまで人の立っていたのにも気付かないでいたルルーシュは、とつさに鍵盤の上から指を外してギロリと背後を窺がつた。

Ｃ・Ｃ・はまったく気にした様子もなく、むしろルルーシュの腰掛ける椅子の端にちょこんと腰を下ろしてきた。

ここピアノの椅子は連弾も可能なように幅広に作ってあるので、細身な二人が腰を下ろしても充分な広さを残していたのだが、ルルーシュは露骨に機嫌を損ねた様子で視線を外した。

「……無粋な奴だ」

「どっちが無粋だ？ 演奏の途中で止めるなよ」

言つて、続きを弾けとばかりに顎の先で鍵盤を示した。

ルルーシュはチッと小さく舌を鳴らしてから、ふたたび演奏を始めたが、

「なんだラヴェルか。」夜のガスパール 第2曲『絞首台』つまらんあつけだな

Ｃ・Ｃ・はクスクスとひとりで愉しそうに笑つた。
簡単に答えているのだが、まだ3小節しか弾いてなかつたルルーシュは内心驚きを感じていた。

今度は演奏を続けたまま口を開いた。

「詳しいな。かなり意外だが」

Ｃ・Ｃ・はすぐには答えずしばらく口を閉ざしていたのだが、やがて冷淡に呟くように曲に乗せて歌つた。

「鐘の音に交じつて聞こえてくるのは、風か、死者のすすり泣きか、頭蓋骨から血のしたたる髪をむしっている黄金虫か アロイジ

ウス・ベルトランの詩集の一篇だ。当時でも無名の詩人だったんだがな、有名な音楽家に気に入られたおかげで後世に残つた。どうせなら第3曲の『スカルボ』を弾けよ

「弾けるか、あんな難曲素人に」

「つまらん男だな。悪魔的な賑々しさがおまえに似合つと思つたのに」

「本氣で残念に思つてゐるやうに唇の先を尖らせるよつこして言つてのける。

そもそも久方ぶりにピアノを弾く氣になつたのは、単なる気分転換と言うよりも憂さ晴らしの意味合いが強かつた。

そこに横からつるさく口を挟んでくる女の存在が癪に障つてルルーシュはわざと返事をしないでいたのだが、

「飽きた。だつたら”ヴァルトシユタイン”だ。ベートヴェンくらい弾けるだろ?」

と懲りずにC.C.は別な曲をリクエストしてくる。

Cの女が本当に恥々しいのは、いつだつてルルーシュを簡単にその気にさせてしまつところだ。

「いちいち難しい曲ばかり」

「弾けるくせに」

ベートーヴェンのピアノソナタ第21番ハ長調。

14番の”月光”、23番の”熱情”と同じく別名のほうが有名な楽曲だ。

三楽章まで通すと30分弱の時間を要してしまうが、その間C.C.はじつと視線の先を鍵盤の上に据えたまま熱心に耳を傾けていた。

ルルーシュは3歳の頃からピアノのレッスンを受けて育つたが、まったくピアノに触れない時期も長かつたため、そんな人間に簡単に弾ける曲ではなかつた。

だが、なんと言つても相手はC.C.だ。そうした事情を承知の上で、平氣で”ヘタクソ”ぐらいは言つてくれそうだなと思つた。

だからほんと意地でなんとか最後の和音まで無事に弾き終えて、思わず横田で「どうだ」と言わんばかりにC・C・の顔を覗いたら、見るからに田に涙を浮かべていたのでルルーシュのほうが硬直した。弾いたといつても最後までミスをしなかつただけで、曲想も何も膨らましようがない。客観的に聞くならば面白くない演奏だったと自覚していたので、余計に驚いてしまったわけだが。C・C・はふふっと照れて『よつじごく小さく笑つた。

「……すまない。……つまらん思い出が…、いや、いつたい何年ぶりに聴いたかな?」

思い出?

昔のこととはまず絶対に自分のほうから口にしない。

その女がぽろりと言つたセリフに激しく興味を覚えてしまつたが、それがあえて問い合わせてしまつのような幼児性とは無縁でいたいタチだつた。

我ながらつまらんところにこだわる男だなと呆れながら、すぐにまた別な曲を弾き始めた。

C・C・は驚いたように横からルルーシュの顔を覗き込む。

「『子犬のワルツ』? なんだ、どうした?」

作曲者のショパンが、『子犬が自分の尻尾を追い掛け回している情景にヒントを得て作曲』したとも言われているとおり、先の曲に比べればあまりにテンポの軽い明るい曲だつた。

「別に。…単に口直しだ。小難しい曲が続いたからな」

ルルーシュはぶっきらぼうにそう言って、あとは寡黙に演奏を続けたが、1分少々で終わつてしまつ曲だつたので、弾き終えた後もC・C・はニコニコとうれしそうに笑みを零していた。

それを横目に見ながらルルーシュは、専用のクロスで鍵盤の上に付着した自らの指紋を拭つた。

「なんだ? 気持ちの悪い奴だな」

「別に? けつこうおまえ私のことが好きなんだと思つてな」「ふざけるな」

「 わつか？ 私はけつじんが好きなんだがなア 」

「え？」

思ひがけない告白に思わずとつせに視線を返してしまったが、相手はやつぱり〇・〇・だった。

「おまえのその器用なところが好きなんだ。なにしあ退屈しないし、便利だからな」

と勝ち誇つたよつて言つて笑つた。

〔 end 〕

TURN 09・125 「素朴な疑問」（前書き）

TURN・9でエリア11から中華連邦へ脱出した黒の騎士団のメンバーが抱いた「素朴な疑問」。ほのぼのです。

「なんでアンタいつも、その人形抱いてるのよ?」

カレンが疑問を発した瞬間に、イカルガの艦内にピンチと張り詰めた空気がみなぎった。

誰が禁句と定めたわけでもない。

けれども、皆が皆、内心ではそれを疑問に思っていた証だつた。まるきり人形のような姿勢をしているのに、傲岸不遜で通じてしまっているC・C・のキャラクター。

その個性と、常にビックに行くにも一緒に連れ添っているチーズくん。

ハツキリ言って違和感だ。

いや、見た目の雰囲気だけなら、これ以上もなくお似合いなわけだが。

高飛車なセリフを吐いている最中にも、まるきり手元の人形に甘えていいるような格好をしているわけだから、違和感に感じてしまうわけなのだ。

が、今までそれを、正面切って指摘する勇者は存在しなかつた。指摘したが最後、何と言つて反論されるのか想像できてしまうが故に　怖かったのだ。

誰もが皆、返事を返される瞬間を待ち、耳をそばだてているために生じてしまう沈黙。

キリリと研ぎ澄まされている緊張感は、艦首ハドロン銃砲を発射

する瞬間に匹敵する。

こうした種類の緊張感に慣れていない扇などは、ひたいに巻いたバンダナを密かにぐつしょり汗にぬらして、思わず握り締めている拳をブルブル小さく揺らしていた。

と、そのときだった。

「C.C.、頼んでいた資料だが」
艦橋ブリッジに通じるエレベーターの扉が開いて、にわかに姿を現したのは、仮面の男ゼロ。黒の騎士団を率いる、一いちも高飛車が似合いな男の存在だった。

「おい、おまえちつたア空氣読めよツ！」と我慢できずに騒ぎ出す玉城の襟首を掴んで、南が静かに首を振りながら穩便に退場していく。

その背中を眺めながら、ゼロが怪訝そうな雰囲気で何しろ仮面で表情は皆無検討が付けられない。訊ねたが、まるきり動じた様子もなくC.C.が「気にするな」と一笑に付してしまった。

「資料なら、綺麗に耳を揃えて部屋に置いてあるはずだろ？。おまえの目は節穴か？」

「あの部屋のどこが綺麗なんだ？ 少しほは自分で片づけを」

「お断りだ。私は別に困つてない」

「馬鹿が。現に今、困つてているでは無いか」

「困つてているのは、おまえだ。必要なら、おまえが自分で片付ける」

「どうして私が、おまえの尻拭いばかり」

「喜べ。仕事が増えて結構なことじゃないか」

「ふざけるな。いいから、早く資料を」

「フンッ、仕方の無い男だな。直接渡してやるから付いて来い」

「いちいち偉そうな女だ。そもそも、おまえは」

そう言いながら、ふたりの背中はエレベーターの扉の向こう側に吸い込まれ、艦橋^{ブリッジ}内には、にわかの沈黙が訪れた。

「で、結局C・C・Cの返事はどうなったのよ?」

ややあって、ラクシャータが氣だるげに煙管を振り回しながら問いを発したが、皆が皆、溜息を吐き出すばかりで、それに返事をする者は存在しなかった。

夫婦だ…。

皆が皆、内心ではこつそりそり咳きながら。たとえばC・C・Cが抱いているのが本物の赤ちゃんでも、会話の内容といい、ふたりの態度といい、大して違和感を覚えはしなかつただろう。

いや、むしろそつした光景が、あまりに当然に田に馴染み過ぎているものだから、今まで誰一人として疑問を発する必要を感じてなかつたのだ。

「……フツ、結婚式にも、あの仮面を付けたままのかしらね?」

ややあつて、カレンが眉間に濃い皺を刻みながら冷たい繰り言を発したが、それに機敏な反応を示したのは扇だった。

「そうだな! 一日も早くそれを実現してやるためにも、もつと我々で一致団結して!」

「そうだな! 扇!」

「そうですよね、扇さん! がんばりましょ!」

にわかに騎士団一同の士気が上がった瞬間だった。

「ところで資料と言えば、私の渡した例のアレは、きつちり忘れず交換してくれたのだろうな？」

降下を続いているエレベーター内部で C.C. が訊ねると、ゼロ

ルルーシュは、思い切り眉間に濃い皺を刻んだ。

「時間が掛かる。アッシュフォードに一度戻らなければならぬからな」

たちまち C.C. が、蔑みの様子も露わに鼻を鳴らした。

「本当に使えない男だな、人のことはとやかく言うクセに」

「使ッ……俺は今、忙しいんだ。おまえのワガママに付き合っている余裕はない！」

「甲斐性の無い男だ。共犯者のたとやかな願いくらい、文句を言わずに叶えろ」

「おまえの願いのどこがささやかだ！ そもそも、最初に交わしていた契約では、ひとつだけ願いを叶えると」

「おや？ 『三つの願い』の逸話を知らないか？」

「はア？ ……ああ、『三つだけ願いを叶えてやる』と悪い妖精に訊ねられるアレか」

「ああ。アレに対する正しい三つの答へは、『もうあと三つだけ願いを叶える』だ。おまえは堪え性の無い困った坊やだからな。手間を省いて、最初から三つの願いを要求してやっているんだ」

「ふざけるな。それでは俺は永遠に」

「嬉しいクセに」

「誰が嬉しいか！ そもそも、おまえは」

そう言いながら、ふたりの背中は私室の中に消えたが、C.C. の運転するトレーラー内部に『チーズくん』グッズで構成されたハ

一レムが完成するのは、それから三日後のことだった。

〔 end 〕

TURN 09・125 「素朴な疑問」（後書き）

純粹に作者の抱いていた疑問です。

しかも、TURN・10でC.C.が曉で出撃する前には艦橋に置いてあつたはずのチーズくんが、TURN・11ではなぜだかC.C.の胸元に。

ルルーシュがゼロの格好で、わざわざ運んでいたかと思いつと嬉しいです。

ありがとうございました！

「カレンのこともあるしな、ひとまずエリアーーに戻る」

戦闘空母イカルガ。

その内部に黒の騎士団を率いる総帥・ゼロ専用に用意された居室は、艦内にしつらえられたプライベート・ルームのうちでも一番にゆとりのある面積を誇っている。

もちろんその割り当てに異議を唱える者など存在しなかつたが、理由はそのリーダー性よりも、むしろ暗黙の了解で『二人部屋』として最初から考えられていたからだつた。

一度の作戦が終了すると、ラクシャータ率いる技術部のメンバーを除いては、ほとんどのメンバーが許される範囲内で自由時間を満喫した。

家族単位、恋人同士で行動する者、仕事の延長で班単位で行動する者、そしてゼロのかたわらにはいつも決まってC.C.が。

玉置あたりはいまだに一人を愛人関係と決め付けていたのだったが、最近ではもっぱら二人は単なる仕事上の付き合いというのがメンバー内における定説だ。

それでも正直C.C.がどうしてゼロ専属の補佐的役割を果たしているのかは、誰一人として正しく把握している者はなかつたが、そもそもゼロ本人が秘密の多い男でもあつたので、それに付随する人間にまで関心を寄せている時間がもつたといいうのが実際のことなのだ。

セキュリティの面を考慮して、そこだけは特に綿密に設計された二重扉を抜けると、その奥には部屋の大半を占める書架が目立つた飾りのない空間だ。

もつともC・C・Cは、天下最愛のキャラクターである《チーズくん》で、もつとファンシーかつポップに癒しの溢れる空間に改装したいと狙いを定めている最中だったが、生まれ持つてのハイソ志向であるルルーシュが雰囲気でその企てを圧倒している現状だ。

おかげで今になつても殺風景な部屋に足を踏み入れたC・C・Cは、少々意外だった男のセリフに呆れた様子で訊ね返した。

「中華連邦は？」

一度手間を嫌つて部屋に入ったその足で直接クローゼットに向かったルルーシュは、とりあえずリラックスするために仮面を脱ぎ、マントを外した。

一方、袖のないフロックコートに近いデザインの上着を適當な場所に脱ぎ捨てたC・C・Cは、タンクトップにホットパンツという姿で応接スペースのベンチの上に転がつた。

「たしかにまだ反対勢力は残つているが、民衆が立ち上がった以上、シンクーや藤堂の敵ではない。それに見てみたいだろ？　心の力を」

言われてC・C・Cは、つい先ほどの一幕に思いを致した。

あのときもてつきり《政略結婚》などと無粋な提案を示したディートハルトの意見を即刻取り入れるとばかり思つていたのだったが。

「成長したな、坊や」

「黙れ、魔女。ともかく、これでやつと本来の目的に向かえると言つわけだ」

「教団か」

出歩く際には必ず持ち歩いているぬいぐるみに頬を預けると、C・C・Cは極力感情を消した聲音でその言葉を発した。

「ああ。ギアスの使い手を生み出し、研究している組織。教団を押さえれば、ギアスの面でも皇帝を上回れる」

「だが、教団の存在は、人の世から周到に隠されてきた。それに、

当主が交代することに教団はその位置を変えている

「今の教団は、中華連邦の領土内にあるのは確かなんだな？」

その間にも、ギアス抑止用のコンタクトレンズを装着してC.C.の元に戻ってきたルルーシュは、会話を続けながら平然とC.C.の世話を焼きに余念がない。

C.C.は、ルルーシュが黙々とC.C.の衣服を片付けてゆく様子に目を細め、会話を続ける。

「私の後の当主VV.VV.はそう言つた。しかし、この国は広い。口とかいう奴も詳しい位置はわからないのだろう？　どうやって探し出す？」

「だからこの国を手に入れたい。物資の流通、電力の供給、通信記録　痕跡は必ずある」

「国の力を使って捜すつもりか」
ゼロのマントに比べれば形状の複雑なC.C.の上着を丁寧に整え終えたルルーシュは、再びクローゼットに向かつて歩みを進めた。背中を向けた状態で次第に離れてゆくのだったが、ゼロを演じているときのルルーシュは持ち前の低音に磨きがかかっていて、少々の咳きでも容易にC.C.の耳に届いた。

もつともこのときC.C.は、今更聞くまでもなくルルーシュの返答には大方の予想が付いていたのだが。

「中華連邦は大きな国だからな。C.C.はこちらに残り、教団の情報が入り次第俺に連絡をしてくれ」

ほとんどC.C.が予測したのと一字一句違わぬセリフを発して、振り向いたルルーシュが返事を促がした。

C.C.は、怠惰に身体を寛がせている状態で、それを言つ男の顔を眺める。

そのときC.C.の気持ちの大半を占めていたのは、予測できていたのに回避する術を持たない自分に対するあきらめか、それとも最初から逆らうこと放棄している自分に対する落胆か、そのどちらがより強かったのだろうか。

そもそも契約者という関係は、別段四六時中の同伴を強制しているものではない。

それを承知しているからこそルルーシュも必要に応じて C · C · を適宜遠方へと配置した。

しかし、C · C · にとっては、今回のそれはようにもよつての命令だ。

自分が以前深く関係していたところ。そして心情的にはもう一度立ち入りたくないと言つてゐるところ。

そこに、あえて再度踏み込めとこの男は命令するのか。

「 わかったよ

けれども、それがこの男と自分の契約関係であったのだ。

ルルーシュが生きるための目的に必要と判断したことなら、自分は死力を尽くしてその願いを叶えてやる。

だから何ひとつとして本心は、不安も、不満も、伝えない。

だが、心情的には行動を起こす以前から疲労を余儀なくされる命令だ。

それでなくともこの半日の戦闘で、C · C · は疲労とストレスを抱え込んでいたのだ。単身ナイトメア - 晓 - に騎乗して出陣した。その際アーニヤの騎乗するモルドレッドに接触して、思いがけなく手に入れてしまつた真実の映像に少なからず受けたショックを引きずつていたのだ。

もちろん現状ではまだ C · C · の口からその真実をルルーシュに伝えるわけにはいかない。

だが、それを知つていて秘匿しなければならない。知らないで済んでいたなら何も考える必要のなかつたはずの状況が、C · C · の心理面に多大なる負荷をかけてしまうのだ。

次第に会話する気力も失せてきて、このまましばらく仮眠でもと考えていたときだつた。

「ところで、C.C.？」

一方、戦略や知略に関しては人並み外れて才走っているルルーシュも、繊細な人の感情部分には呆れるほどに疎かつた。

もちろんC.C.が秘かに抱えるストレスの原因に思い至るはすもなく、あくまで必要な話は終わつたとばかりに口調を変えて断定的に訊ねてきた。

「どうせこれから暇なんだろ？ 風呂に入ろ！」

「何？」

C.C.は自分の耳を疑つた。

じつとルルーシュを凝視しながら、なにやら恐る恐るベンチの上に身を起こした。

だが、平然とした様子でシャツとジーンズに服装を改めてきたルルーシュは、まるきり作戦の伝達を続けているような表情で続けた。「咲世子に取り寄せを依頼していた石鹼が、つい三日前にようやく到着したんだ。さすがに使い切れるものではないからな、残りはC.C.が使ってくれて結構だ」

「ああ、わかった。そうする」

要するに、使い古しの石鹼を分けてやると偉そうに言つて居るのである。

そう、C.C.が納得しかけたところで、さらにルルーシュは続けた。

「今から用意をしてきてやるから、呼んだら来い。ついでに髪と身体を洗つてやる」

「だからどうしてそつなる！」

やはり聞き間違いではなかつた証拠に念を押されて、思わず声を荒げてしまつたC.C.だったが、ルルーシュは怪訝そうな表情でそんなC.C.を見つめている。

「どうして、とは？」

「……それが理解できない時点でおまえは立派な変態だ。とうとうサカリが付いたか、イロガキめ。私はおまえの相手などは願い下げだ」

「フツ、安心しろ。最後のそれに関してはまったくの同意見だ。ただ、普段なら戦況を傍観しているだけのおまえに、想定外の心労をかけてしまったからな。中華連邦に滞在しているうちに、借りを返してスッキリしておきたいだけだ。寝転がっているだけなら、そこにそうしているのも、風呂に入るのも一緒だろう?」

いつもと変わらぬ上から目線で押し付けがましく言い置いて、自分はさっさとバスルームのある方向に歩いて行ってしまった。

呆気にとられたC.C.は、ルルーシュの姿が消えるのを確認するなり空中の一点に向かつて囁み付いた。

「おい、おまえの息子の精神構造はどうかしているぞ? 一步間違えばテロリストの総帥どころか、パワハラまがいのイロガキだ! いくら私でも、そんな相手に付き合つのは『免だからな!』

しかし、こうした際には放つておいても話しかけてくるはずのマリアンヌは、どうやら静観の立場を守るつもりでいるらしく、ひとりしきりC.C.がボヤき続けても、最後までひとことも答えはしなかつた。

行政特区日本の再興を機に、ゼロは国外追放。

その決定の裏をかく奇策により百万人が日本を脱出するにあたつて、当面の生活に必要となる消耗品は、中華連邦から貸与された人工島 蓬萊島にあらかじめ大量に備蓄してあつた。

物資だけではない、日本から連れてきた大半の日本人もここで暮らすのだ。

個々の家族構成で平等に割り振られた居住区には、扇や藤堂といつた最前線で戦闘に参加しているメンバー達の住まいも存在している。なかには「どうせ帰る暇はないだろうから」と不要視する声もあつたのだが、やはりここは日本での生活を踏襲したのだ。

しかし、ゼロとC・C・Cに限つてはそうもいかない。

ゼロの場合、家に帰る暇があるのだったら、ルルーシュとしてアッシュ・シユフォード学園に戻る必要があるわけだし、C・C・Cの場合は、仮にもブリタニア皇室から生死を問わず追われる身だ。たとえその点を充分に考慮した上で専用の居室を設けても、問題を起こそず平穀無事に近所付き合いができるようには思えなかつたし、近い将来何らかの形でルルーシュの手を焼かせるであろうことは目に見えていた。だから、監視の必要もないイカルガの内部に手つ取り早く生活に耐えられるだけの設備を充足させたのだ。

その結果、以前からルルーシュの頭を悩ませ続けていた先着順でひとつベッドを奪い合う必要はなくなつた。部屋の入り口はひとつだが、寝室は別々に設けてある。ほかにも、ちょっととした軽食ならいつでも作れるように簡易なキッチンや冷蔵庫も備えてあつたし、内密の情報操作の際に必要なPCルームも設置してある。

ただし、あくまで機能面ばかりを追及した結果により、風呂には浴槽を排除してシャワーブースのみを設置してあつたのだが。

そもそも一個の独立した戦艦にシャワールームを設置してあること 자체が贅沢な話だとルルーシュは思つていた。食事ならいくらでも工夫次第でスリム化を計るのは可能だつたが、飲料目的以外にナイトメアの整備にも必要となつてくる水だけはそうもいかない。その重さから積載可能な量にも限度がある。だつたら、少々の不便は我慢するしかないだろう。 そう思えばこそ、これでもギリギリのラインまで配慮したつもりでいたのだが、これに猛然と抗議したのはC・C・Cだった。

最初は聞き流すつもりでいたルルーシュだが、バスタブを置くほうが節水が可能だと実際の数値を示して反論してきたC・C。

の剣幕に、結局は押される形でC・C・の好きに任せたのだった。

そういうわけで、このイカルガの中では唯一、備え付けの浴槽がここにある。

まさかにも、そこにルルーシュと一緒にに入る口が来ようとは夢にも思わなかつたC・C・だつたが。

「ああ、ちょうど良いところに来たな、C・C・。ところで、頭と身体どちらを先に洗うんだ?」

命令する者、それに従う者。

その命令が愚直を極めていた場合、主従のどちらがより愚かを極めているのだろうか?

最後までそんなことを考えていたC・C・だつたが、マリアンヌがひとことも返事をしないのがまたさらに癪に障つて、だつたらいつそのこと当て付けのつもりで最初から全裸で姿を現した。

一方、バスタブの中に湯を溜めながら準備に勤しんでいたルルーシュは、そんなC・C・の姿を正面から眺めて、ちらりとも動搖しなかつた。あくまで機械的に、バスタブの中にC・C・を促がした。

「頭だ」

ながば自棄になつてC・C・は、大股でバスタブを跨いだ。

「わかった。すこしだけ待つていろ」

そう断つてバスルームの入り口に向かつたルルーシュは、フェイスタオルを手にすぐ戻ってきた。

ちなみにこちらはズボンの裾とシャツの袖を捲り上げている以外は完全に着衣の状態そのままだ。

「では、仰向いてこのタオルを枕にしてみる。バスタブに沿つて背中を密着させたら身体も滑らないはずだ」

言われた通りにしてやると、ほぼ真上から自分を見下ろすルルーシュと目が合った。

「おまえ、すこしは恥ずかしくないのか?」

「俺が?」

かなり本気で怒っているものだから、なにやら殺意めいた憤りが露骨に声に露わになってしまったが、それでもルルーシュは平然とした様子を崩さず鼻で笑つた。

「今更そんな無理難題を言われてもな。どうせいつも裸みたいな格好でウロウロしているのはおまえだ」

要するに、見慣れていると言いたいのだろうが、しかし本当に全裸でいるのと、全裸みみたいな格好でいるのとでは大きく違うところは思つた。

それに、本当の全裸を晒した経験は、まだ数えるほどしかなかつたはずだ。

「それにしても、ずいぶんと扱いに手馴れているじゃないか。実のところ、影で女でも買つた経験があるんじゃないのか?」

怒らせるつもりで低俗な話題を振つてみせると、案の定ルルーシュの瞳に力が籠もつた。

ルルーシュが本気で怒つていることを知ることは、ほかの誰よりもC.C.にとっては容易なことだった。

自身の力だけではもはや制御のできなくなつてしまつたギアスの力。それを押さえ込むために特殊なコンタクトレンズを着用しているが、それでもなければこの瞳は爛々と赤く輝いて見せていくことだろう。それが証拠にC.C.のひたいが鈍く疼いた。ルルーシュの怒りの波動によつて左目に圧力が加わるので、その度合いによってはC.C.もひたいに疼くような刺激を共有しているのだ。

ルルーシュは無言で一度身を屈めると、シャワーの湯の温度を確認し始めた。

「馬鹿が、おまえは。単に、日本式の風呂はナナリーがひとりで入るには危険だつた、それだけだ。初めのうちは風呂さえ用意されてなかつたからな」

七年前 突然のマリアンヌ后妃崩御の後、当時九つと七つだった子供が敵国の真ん中に《留学》させられた。外交の道具としてなれば公然と《処分》されてしまったようなものだつた。

それ以前は服一枚を着替える際にも大勢の侍従に囲まれて育つてきた子供一人に《新しい住まい》として用意されたのは、長年の風雨に晒されて朽ち果てる寸前の小さな土蔵だつた。本宅である樅木邸で不要になつた品々を雑多に詰め込まれたままの状態で、寝場所はおろか車椅子のナナリーが満足に移動する隙間すら残されてはいなかつた。土蔵の前も後ろも鬱蒼と茂つた雑木林に囲まれて、明かり取りの小窓がひとつある以外は窓のひとつもない、湿氣と埃にまみれた土くれの廃屋。

「なら、どうしていたんだ？」

もちろんC.C.は、その蔵の有様も、後の子供一人の動向も自分の目で見て知つていた。

だが、肝心なのは、そのことをルルーシュ本人が知らないということだ。当然の疑問として訊ねると、ルルーシュは長い睫毛の下に濃い影を落として、もの憂く、だが動じることなく淡々と答えた。

「ああ、ズザクに言つて大きなタライを貸してもらつた。湯を沸かすことは出来たから、ナナリーが見えないことに慣れるまでは俺が手伝つてやつっていたんだ。しばらくして、ずいぶん生活環境は改善されたんだが、それでもナナリーの背丈ほど深さのある湯船にナナリーが一人で入るのは無茶な話だ。だから、俺が手伝つてやるしか方法がなかつた。さすがにアッシュフードに来てからは咲世子に任せていたんだが。それでも、咲世子が数日家を開ける際には、ナナリーの髪を洗つて、乾かしてやるのが俺の役割だつたんだ」

C.C.は『なるほど』と大きくひとつ納得をした。

と言つても、別にルルーシュの説明を納得したわけではなかつた

が。

「流すぞ」

そつけなく言つてルルーシュは、手馴れた様子で C · C · の長い髪を湯に浸し始めた。

髪の生え際、頭頂部と順にシャワーのノズルを移動させると、じきに水気を含んで重みの増した緑の髪の毛が、一本の太い束となってルルーシュの足元ストレスにまつすぐ伸びてゆく。

「……綺麗な髪だな」

「うん？」

それでなくとも溜まっていた疲労と汗をたっぷりの熱い湯に洗い流される心地好さも手伝つて、その頃にはもうすっかりされるがままに身を預けて目を閉じていた C · C · は、独り言めいたルルーシュの呟きに薄目を開いた。

ルルーシュは、C · C · の髪を濡らす作業を愉しんでいるかのように、伏せた田元と口元にじりぐりく淡く微笑みを浮かべていた。

「普段はキヤベツみたいな色だと思うんだが、濡れるトリキュールみたいな色合いになる。光に透かすとまるで芽吹いたばかりの若葉みたいだ。もとからの地毛がこうなのか？」

いつたい誰に向かつて笑つているんだ？ と、よつぽど混ぜ返してやるうかと思つた。

しかし、内心ではどうせナナリーと過ごしていた愉しい日々の思い出を彷彿とでもしているのだろう。めずらしく愉しそうにしているルルーシュを茶化すのはさすがに大人気ないと思った。

C · C · は再び目を閉じると静かに笑つた。

「さあな。昔のことは忘れてしまったよ」

「そうか」

ルルーシュもそれ以上は追求しようとした。

やがて充分に濡らし終えたと見てシャワーを止めるとき、数度カシユツカシユツと何かを操作する音が響いた。

まもなく C · C · の鼻腔を甘くくすぐるその香り。

「……ローズ？　スズラン？　いや、違うな。何の香りだ？」

「ああ、スミレだそうだ」

「スミレか。……どうりで懐かしい」

「何だ、知っているのか？」

「昔な、……多少」

一度目は軽く洗つただけで流して、二度目はたっぷり時間を要して洗つた。

スミレの花の匂いの香るシャンプーの泡立ち。自分はタオルを枕に仰向いているだけだったので、実に気楽なものだった。時折ルルーシュの片手がC・C・の後頭部を持ち上げては、うなじの付近も全部余すことなく綺麗に洗い上げてくれている。

おそらくきっとその昔、愛しい妹ナナリーに要していたのと同じやり方で。

そもそも常日頃からルルーシュが実にさりげなくC・C・の世話を焼いているのは、長年ナナリーの世話を焼いてきて身体が覚えてしまっているからだった。

無意識のレベルですら、そこに対象が存在さえすれば条件反射で動いてしまうのだ。

いや、むしろ無意識の状態では、世話を焼く相手を探している?

「田代から特に手入れをしていくよりも見えないのにな、クセのひとつもない本当に綺麗な髪だ」

両手の指の隙間で漉くようにして何度もルルーシュの手指が行き来する。そのたび頭皮をツンと引っ張られはするのだが、その力加減がまた絶妙だった。油断をすると手放しで微笑みそうになってしまつ。

「さつきからやたらに髪を褒めるな。ひょっとしたら髪フェチか？」

「こちいち絡む女だな。ずっとナナリーが羨ましがっていたんだ。」

そこだけは母親からの遺伝ではないからな、髪の色も髪質も

ナナリー、ナナリー、またナナリーか。

嫌でも次第に正しい理由を認識させられてしまつてゐる。

まったく、おまえのやさしさは残酷だな、ルルーシュ。

いつのことおまえのナナリーに対する愛情が、肉欲に絡んだものだったら良かつたのに。

そうすればきっと誰だって簡単におまえをあきらめ切れるはずだから。

おそらくルルーシュ本人も母親からの愛情を求めて止まない幼少時代から口クな後継人も存在せぬままに、誰にも頼れず自分ひとりの力だけでナナリーを守りながらずっと長らえてきたからだろう。いつソルルーシュのナナリーに対する愛情は、若い母親が初めて生んだ自分の子供を直目的に溺愛している感覚にほど近い。

しかし、相手がたとえ妹でも、自分のことなど一の次に誰かを愛する愛し仕方をルルーシュはちゃんと知つてゐる。

その愛情の基盤があるからこそ、時に驚くほどにルルーシュが個人に向ける愛情も温容だ。

一度自分の懷まで入れてしまつた人間に對しては、どうまでも寛容に愛情を注ぐ手段を惜しまない。

そんな男の、恋の意味において限定した《愛情》だけが、まだ誰の手中にも收まつていないのである。

どうしてそれを求めないでいられよう？

誰に何を教えられなくてもそつとしたことを本能的に嗅ぎ付けてしまふ女達は、水面下でどうにかして彼の気持ちを手に入れたいと画策する。

しかし、下手な女以上に完成された品格と匂い立つような色気がルルーシュ本人に備わっているものだから、まずもつて女を武器にした手段では勝算はない。

だからといって、先日天子を苦手としていたように、若ければ良いというわけでもなさうだ。

やはり、ここは智謀策略に関係なく

「案外、何も考えずに体当たりで押しまくるのが一番なのかも知れないな……」

たとえば、さう、あのシャーリーのよひ。

退屈と言つてしまつのはきっと贅沢なのだろう、けれども動くことの出来ない手持ち無沙汰から、とりあえず思いついただけに過ぎない思索に励んでいた。だが、しばらく寡黙に指を動かしていたルルーシュに頭の上から声を掛けられハッとした。

「今度は何の相談だ？ 誰か殺したい相手の顔でも思い出したか、魔女」

それまで独り言を言つたことすら気付いてなかつた。は、思わず内心ギョッとした。

だが、そこは年の功でルルーシュ相手に氣取られるほど青くはない。

「おかげさまで退屈でな。いい加減、首が痛いぞ。まだなのか？」

「まったく、惚れ惚れするほど偉そうな奴だな。この状況で」

「惚れるなよ、迷惑だ」

「誰が。まったく、感謝しようとまでは言わないから、もう少しぐらうらい殊勝な態度でいてくれても損はないと思うがな」

「はん、たとえば？ ナナリーのようにいか」

「何？」

たちまち忙しく動いていたルルーシュの手指が止まつた。

「で言つほどこつしたやり取りを嫌つてはしない証拠に、それまで笑う余裕さえ見せていたくせに。いざナナリーを名指ししてやつた途端にこの始末だ。

本当に最低な男だなど。は思った。

さんざん他人の身体を身代わりの人形代わりに扱つておきながら、まさか自分では気付いてなかつたとでも言つつもりか　おまえが？何が感謝だ、借りを返すだ。結局のところ、弱つた自分の気持ちを慰めたい一心ではないか。

ブリタニア皇帝の策略により、絶望的な立場に追い込まれてしまつたナナリーは、ルルーシュの危惧していた通り強制的にエリア11の総督という『人身御供』の立場に祭り上げられてしまった。

それを信じて疑わなかつたものだから、意を決して奪還作戦を決行したところが、実際はナナリー本人の意思で望んだことだと教えられ、むしろゼロとしての自分の存在のほうを否定されてしまった。自暴自棄に陥つてしまつたルルーシュは、それでもなんとか自分の存在理由を取り戻し、最終的にはナナリーの意思を最大限に尊重する形で中華連邦に亡命したもの、実の妹により傷つけられてしまつた内心と、ナナリーのそばに居場所をなくしてしまつたことによる寂寥感は今も色濃くルルーシュの胸の奥に巢食つている。

きつとC.C.ではなくとも、相手は誰でも構わなかつたのだ。

こうして黙つて自分の言うとおりに従つてくれる女であつたなら。つかのま落ちた完全なる沈黙に、C.C.の髪から滴つた水音がパタパタッと高く響いた。

C.C.はとつさに閉じていた目を開けかけて、寸前で顔の周りを覆つた泡の存在に気付いた。サワサワサワと細かく泡の弾ける音が聞こえる。

ルルーシュが丁寧に立てた泡の肌理は纖細で、ただの気泡であるくせに触れている肌の部分が布を纏つてゐるよう暖かい。

C.C.はそうしたすべての感覚に、まるきり陶酔しているような溜息を大きくひとつ吐き出した。

「ルルーシュ」

「……何だ」

「恋をしろよ」

「なんだと？」

「とぼけるな。私は眞面目な話をしている」

田の上に落ちていた泡の塊を手で拭うと、C・C・はしづつすら薄

目を開けてルルーシュを見た。

ルルーシュは、怪訝そうな表情でC・C・を見下ろしていたのだが、その頬には隠しようのない朱色がうっすら上っていた。
まつたく、これだから童貞は。どこまでおまえはウブな坊やでいるつもりかと、C・C・はこさか腹立たしく思った。

「気に入らないんだよ。おまえは悪魔的に非情に徹していられるが、時々目を疑う場面で恐ろしいほどに脆くなる。計算では計り知れない理屈のあることに、そろそろ気付いてもいいはずだろ？　だから手っ取り早く『恋をしろ』と言いつんだ。恋なら理想的におまえのその脆弱な精神を鍛え直してくれるぞ？」

C・C・の瞳を見つめ返しながら至近で揺れ続けていた眼差しが、言葉の途中で耐え切れないようになってしまった。

しかし、瞳が言葉を読み取るわけではない。その耳に言葉を直接ぶつけてやれれば今のところは充分だったのだ。

「断言しておくが、おまえのその脆さはいつの日にかおまえ自身を滅ぼす。つまらない弱点を突かれて、おまえに死なれてもうつては困るんだ」

目を逸らしてもなお言葉が届いてしまっている証拠に、横顔に垣間見える瞳の表面は先より動搖を露わにしていた。

だが、沈黙にすら我慢しきれないといった様子で、にわかに唇をグッと引き結ぶと次の行動に打つて出た。

「……流すぞ」

「待て、ルル・ツグ　ふつ

問答無用でC・C・の頭部にシャワーを使い始めたルルーシュに、とつさに対処し切れなかつたC・C・は、思い切り鼻から水を吸い込んでしまつてしまらくのあいだ本気でむせていた。

頭の上でそれを傍観している悪魔は、露骨にくつくづくと喉を鳴らして笑つて見せていく。

「……ここの魔がッ！……ほ、本気で死ぬと思つたぞッ」

まだ苦しい息の下から怒鳴り返すと、ルルーシュは冷え冷えとした表情でそれを見返した。

「ほう、おまえでも死ぬのか？」

「こ……こは、とつさに田の下に皺を刻んで田前のルルーシュを睨め付ける。

「死ねるぞ、それ相応の痛みを感じる」

「知つている。だから、一度とおまえを死なせはしないと俺は誓つた。すくなくとも俺の共犯者でいる間はな。くだらない心配は無用だ」

あくまで高飛車な声音で命令して、ルルーシュはひどく優しく纖細な動きでこ……こ……の髪の洗浄作業を再開した。

その態度のどこが魔的でないのかとこ……こ……は思つたが、今度のそれは口に出すのが癪だつたので黙つておくことにした。

何度も何度もルルーシュの細い指先が、軽くこ……こ……の頭皮に触れては行き過ぎる。

ひとりで怒つているのが馬鹿馬鹿しくなるくらいこ……こ……、その指先の感触だけはやさしいのだ。まるきりハープか何かを奏でているようなやり方だつた。ルルーシュの動きのひとつひとつが音楽的な癒しに満ちている。

自分でも気付かぬうちにこ……こ……は、ふたたび静かに瞳を開ざしていた。

心地の良い湯の感触に、にわかに苛立つた気持の波形が徐々になだらかに静まってゆく様子をすこし他人事の気持ちで眺めていた。きつと相手がナナリー本人だつたら、今の状況にナナリーを寛がせるための豊富な話題と、心からの慈しみに満ちた明るい笑顔が振り撒かれているのだわつ。

可愛げのない女で悪かつたな。

いつも露骨に比較されてしまえば、C・C・でなくとも思わずボヤいてしまうというものだ。

だからといって、C・C・には逆立ちしてもナナリーのようにはなれない。

思うだに、こいつの妹というのはそれだけですいぶん希少な存在だと思ったが、それも果たしてどうだろう？ ナナリーの性格がアレだから単なる美しい兄妹愛に収まっているのだが、たとえばもつと利かん気の強いタイプであっても、ルルーシュなら変わらず惜しみなく愛情を注ぎ続けていたのかもしれない。

いや、そもそもこうして離れて過ごす羽田にさえ陥つてなかつたら、そのうちあのナナリーでさえも口うるさい兄の干渉を迷惑にすら思い始めたのかもしれない。

お兄様は、少々わたくしに対して過保護すぎるのです。それだから恋人のひとりもお作りになれないのよ。

ナ、ナナリー！ 僕はおまえのためを思つて今まで…ツ！

それが息苦しいと申しておりますのよ。

ナツ、ナナリイーツ…！！！

そのときの光景が手に取るよつに想像できるようだつた。

もつとも、ナナリーのほうが兄に比べれば、ずっと辛抱強いタチだったから、よっぽどのことでもない限り好き放題に兄に構われ続けてやつていたのだろうが。

そんなことを想像していたものだから、隠していたつもりでも笑いの気配は伝わつてしまつたようだつた。

ルルーシュが口の中だけで何事かを呟いた。

「おかしな奴だ」とでも言つたのだろうか？

本当のことを教えてやつたら、また全身の毛を逆立てて怒つて見せるだろうから。さすがに懲りているC・C・は、ひそかに笑つているだけで溜飲を下げることにした。

ややあつて、丁寧に泡を流し終えた洗い髪を、ルルーシュはタオル一本で器用に頭の上に結い上げた。

本当に、いちいち嫌味で混ぜ返すのが面倒になるくらい変なところで手馴れた男だ。

「さあ、終わつたぞ。バスタブの外に足を出せ、片足ずつだ」

「何？」

かるうじて嫌味を口にするのは我慢したCCC・だつたが、さすがに今度のそれは聞き捨てならない。

洗髪が終わつて、ようやく取り戻した視線の先で鋭ぐルルーシュを睨め付けた。が、当のルルーシュはこの期に及んでも「なぜ睨む？」と謂わんばかりに、かえつて不審げに目を見張つてみせる始末だ。

「やつぱりおまえは病氣だ。以前から、そうではないかと思つていたんだがな、しかし今なら心底断言してやれるぞ」

「だから、おまえのほつこそどうしてそうなる？　頭が終わつたら、次は身体を洗つてやると言つているんだ。極めて理に適つた正論じゃないか」

それのどこがだ！！

返す返すもそれがわからない時点で、自分の口から堂々と変態の名乗りを上げているようなものだつた。

いや、いっそ、純情の皮を被つたセクハラか？

この際、せいぜい辛辣な嫌味の応酬でルルーシュをやり込めてやるうかと思ったが、やっぱり今度もCCC・は止めてしまった。変わりに、むしろ精一杯煽情的にバスタブから足を突き出した。

「これでいいのか？」

不必要に胸の谷間も強調して、作為的に田のやり場を誘導して見せた。

「ああ、その調子でじばらくじつとしていろ」

おいつ、マリアンヌ！――――

ブチブチブチッと血管の切れる音を聞きながら、頭の中で怒号に近い呼びかけを試みたのだったが、やはりマリアンヌからの応答はない。

しかし、なぜかしら笑いをかみ殺してこよなうな気配だけは伝わってくるものだから、なおさらのこと業腹だった。

そんな事情は露知らずあくまで機械的に作業を進めているルルーシュは、冷めてしまつた湯を入れ替えるために一度バスタブの栓を解除した。

流れでゆく湯を追うように、一気にほどばしり始める熱いお湯。だが、浸かるのが目的ではなかつたから、C・C・の臍の上を浸したところでまた湯を止めてしまつた。

あらかた先の湯が流れ切つたところで再び栓をして、バスタブの中に直接バスジェルを適量落とし込んでいたから、湯量は少なくともC・C・の胸の位置くらいまでは盛大な泡が覆つていた。

たちまちシンシンと湯の注ぐ音が静まつて、湯の香に混じつた甘い匂いがC・C・の鼻腔を満たした。

じきに鼻が慣れてしまつたのか次第に匂いは薄れていつてしまつたが、ためしに泡の塊を片手で掬うと、パチパチパチと幽玄な破裂音を響かせながら新たな香りが淡く香つた。

「こつちもスミレか、良い匂いだな。しかし贅沢な男だ。正直おまえにこんな少女趣味があるとは意外だぞ」

「贅沢か？ たかが石鹼だ。昔から使い慣れているだけだ」

平然と返して見せる男は、やはり手にしたタオルで腹の立つほど機械的にC・C・の足の指まで洗つている。

しかし、そこでようやくC・C・は『なるほど』と先からの疑問に納得をした。

昔からというならば、それはおそらくマリアンヌの愛用した品だ

つたのだ。

外国から取り寄せようと思えば不必要に高価になつてしまつが、このフランス製の石鹼は今どきにしては珍しく植物油脂から得られた石鹼素地を100%使用していて、余分な化学物質は一切含んでいない。その製法を創業以来二百年以上もずっと継続しているはまだつたから、とりわけ刺激に対して敏感な子供の肌には安心して使えたはずだ。しかも、特徴となるこの香りも香料を使用しないで、純粋なスミレから抽出したエッセンスだ。匂いに慣れることはあっても、むせるようなくどさがないのも納得だ。

しかし。

こいつの精神世界は、本当に血の繫がりだけで出来ているのだな。

今でこそ殺したいほどに憎んでいるシャルル・ジ・ブリタニアにしてもその一員だ。とてつもなく限られた人間関係だけでルルーシュの内なる世界は構成されている。

「やつぱりおまえは恋をするべきだと思うぞ？」ルルーシュ

先ほど返答の得られなかつた問いを、ふたたびC.C.は溜息まじりに持ち出した。

自分のように関わってきた人間が記憶の及ばぬほどに多すぎてもどうかと思うが、その分得られた見識量も途方もない。経験とは、すなわち余裕の幅を広げることだ。

要するに、ルルーシュのような立場にある男ならいざれば必ず必要になる人生感だと思うのだが、今は黙々とC.C.の腕を洗つているルルーシュはわずかに目を細めると鼻で笑つた。

「今日のおまえは、よっぽどびぢうかしているな。それとも、ついに俺に惚れたか？」

「そうだと言つたらどうするつもりだ？」

初めからまるきり聞き耳を持たない態度が癪に障つて、C.C.。

はせいぜい真面目な表情で問い合わせた。

「さにハツと息を呑むくらい可愛げのある男だつたらまだマシだつたが、ルルーシュはあくまで淡々とした様子を崩さずにして腕を磨き上げている。

「……綺麗な身体だな」

「何？」

むしろじ・じ・のほうが今度もハツとさせられた。

ルルーシュは、じ・じ・の首筋や胸元に手を伸ばしながら、微かに疲れたように笑つた。

「妙な心配をしなくても、おまえの身体は綺麗だと思う。その美しさに感動すら覚える。だが、それだけだ。きっとリヴァルあたりなら必ずしてみせるだろう反応は、今の俺には起こらない」

そのセリフをルルーシュは、じ・じ・の胸に刻まれた残酷な紋章に指を這わせながら呟いた。

いつものじ・じ・だったなら、それはもつとも嫌悪する行為のはずだった。さにルルーシュの手を振り払つつもりでいたのだが、どうしたわけか指の一本も動かすことが出来ずにいた。

内心ではかなり混乱しながら、じ・じ・も声を落として訊いていた。

「それは……私がおまえの契約者だからか？」

「そうじゃない」

ルルーシュは反対側のじ・じ・の腕を掴み取ると、また機械的に白く透き通った肌の表面に純白の泡を塗りつけ始めた。

「……怖いのさ」

「怖い？」

淡々と手指の作業を続けながら、ルルーシュは心持ち俯いた。

長い前髪が彼の心を映し出す瞳の様子を隠してしまつ。

「……おまえでもいい。カレンでも誰でもいい。いつの日にか心の赴くままに、ナナリー以外の誰かに心を奪われる……そのとき誰が俺の代わりにナナリーを守ればいい？」

「おまえ…」

「これでも自覚しているさ。俺は同時にふたりの人間は守れない。
そこまで器用なタチじゃない。だからと言って、意識的に気持ちを
セーブしているつもりもないから、本当は生まれつきそうした感情
に欠けているだけかもしねないが」

「シャーリーもか？」

意識的に避けたのだろう。その名前をあげて口に出してやると、一
瞬だけルルーシュの眉間に皺が寄る。

その反応だけを見ても、あるいはあの女に対するだけは本気なの
かと思つたが、

「今の俺では、ふたりは同時に選べない」

頑固なまでに同じセリフをくり返した。

C.C.は、精神的疲労の増してしまったような心境で重々しく
息を吐いてしまつたが、淡々と腕を洗い終えたルルーシュが「背中
を向ける」と指示してきたので、逆らうのも煩わしいような心境だ
ったC.C.は何も考えずに素直に従つた。

狭いバスタブのことだったので、クルリと容易に方向転換するわ
けにもいかない。仕方がないのでやや変則的にバスタブの縁に肘を
突いて凭れかかると、背筋を伸ばして膝を崩した。

だが、そうしてみて初めてルルーシュの視線を目視で確認できな
くなってしまったことで、意外なことにC.C.はすこし戸惑いを
感じた。

年若い男女がふたりきり。しかも女のほうはまるで無防備に全裸
を晒しているのである。だからこそじくらいなら緊張しても当然だ
と思ったが、悠長なことに今まですこしもその必要を感じてなかつ
たのだ。

まったく、ルルーシュのことばかりをとやかく言えたものではな
い。

ルルーシュは、タオル越しではない指先でC.C.の肩甲骨に触
れると、そのままそつと静かにその形を辿つた。

本来ならば、ぴくりと身体を震わせて緊張しても不思議でないシチュエーションだったが、その接触によりC.C.はむしろ緊張を解した。

これだけ長く一人のときを過ごしても、相変わらず何を考えているのか理解しがたい男だ。そのせいか、触れたり話したり、何かしらの接触を持つているときのほうが、こっちも怠惰に窓いで彼の動向を見守つていられる。

左右の肩甲骨を等分に辿り終えた指先は、わずかな迷いも見せずそのまま背骨のラインを辿り始めた。

C.C.は今、その背筋をすつきり伸ばしている状態だったので、豊かな泡はC.C.の尻の膨らみをうっすら透かして見せていた。いつたいどうするつもりかと思つたら、どづやら脊柱^{せきちゅう}の終点がルルーシュの探求の終点だったらしい。そのまま何事もなかつた様子で、タオルの泡で背中をこすり始めた。

なんとなくだがC.C.は、途中から瞳を閉ざしてルルーシュの好きに身体を任せていた。

ルルーシュの指先が時折触れてゆく感触と、その息遣いだけに意識を伸ばして聞いていた。

「……だが、それはナナリーが自分で見つける人生だ。いずれ必ずおまえの出番はなくなる」

何らかの言葉の反撃をルルーシュも予測していたのだろう。今度は手指の動きこそ止まりはしなかつたが、とつさに怒りをこらえるようにして息を止めたことにはC.C.も気付いていた。

やがて、あくまで平静を装つて息を吹き返したルルーシュは、笑いさえ交えながら囁いた。

「いすれ、必ず？ 悪魔の次は占い師にでも転向するつもりか？」

「その未来を占っているのは私ではないよ。知つているのだろう、ルルーシュ？」 ナナリーが恋をしたらどうする？ あの榎木スザクのように、今までの人生觀をそつくり覆すような相手に出会つても、それでもおまえが出しゃばつてナナリーを守り続けるつも

りか？「

やはり脊柱の終点でルルーシュの手は行き場をなくした。

伝わってくる震えは、もはや錯覚などではありえなかつた。

ふたたびルルーシュの呼吸音が止まつていた。

これ以上の追い討ちは必要ない」とと、本当は「…」も理解していた。

だが、心のどこかでは、ルルーシュを追い詰める」と喜びを見出していたのかもしれない。

「おまえだつて、その可能性を考慮したからこそ、今のナナリーにとつては害にしかならない自分の存在を遠ざけた。そうして本来ナナリーのものであつたはずのすべての自由を返してあげたのだろう？」

「……」

唸るように聞こえる低い囁きは、しかし今の「…」の耳には心地が良かつた。

「あるいは、ナナリーの真の幸福を求めるためには、ゼロであれ、ルルーシュであれ、どちらのおまえも既に用済みだ。むしろ、ナナリーが自分の手で掴んだ幸福を壊すことはあつても

「……」

「今のおまえではもう一度と、ナナリーを手放しで笑わせてやることはできない。ナナリーのためと称していつたいどれだけの血を流してきた？ 本当にナナリーがそんな幸福を望んでいると思うのか？ 今まで一度たりとも後悔しなかつたと私に誓えるか？」

「黙れッ　だまれ！」

まるきり全身の骨を碎かんばかりに、背中からルルーシュの両腕が激しく絡みつく。

それでも。

「…だけは知つていた。

これがC・C・だけの知る ルルーシュの本心だったのだ。
いつのことC・C・のほうこそ痛みに呻いてしまいそうなほど
に、感覚を共有しているひたいが熱く疼いた。

そんなに泣くなよ、ルルーシュ。

今のおまえは子供みたいだ。

悲しいときに、トコトンまで悲しんでおかないから。
すっかり痩せ我慢するクセがついてしまっているから。
あれだけ何度も私だけはいつだってそばにいてやると約束したる
う？

だつたら、すこしは素直に私を求めるよ。
ナナリーの身代わりではなく、私個人を。
せめて、つかの間。

おまえにとつての癒しの場所と認めろよ。
共犯関係が継続している間だけで構わない。
私は傷ついたりはしないさ。

おまえも見たろう？ 知つているのだろう？
私は今までずっとどんな痛みにも耐えてきた。

だからおまえ一人くらいなら、いつだつて私が全部受け止めて上
げられるさ。

指一本動かせないくらいに力ずくの拘束は長く続いた。
度を越えた苦痛が続くうち、順応性のある人の神経は調子の良い
ことに快楽を生み出す。

やがてC・C・は自分のものとは思えない感覚にすべての意識を
ゆだねていたのだったが、しばらくして悄然と落ち窪んだルルーシ
ュの声が囁いた。

「……すまない」

ルルーシュとも思えない素直な謝罪に惹かれて意識を取り戻した
C・C・は、まもなくルルーシュが謝罪した眞の理由を理解した。

「なんだ、おまえ……噛んでいたのか？」

左の鎖骨の付け根付近に、どう見ても歯形と思しき赤い傷跡がくつきり形を残していた。C・C・も気付いてなかつたのだ。

さすがにバツが悪そうに、ルルーシュは言葉を濁した。

「だから……謝つただろう」

肩越しにちらりと視線を向けると、激情の名残をとどめて乱れた前髪の下で、逸らした視線がいつになく慄然と拗ねている。

「まあ、いい」

C・C・は笑った。

「カレンを連れ戻しにエリアーに帰るんだろう？　とりあえず私も本気で協力は惜しまない」

言外に、一日も早く奪還して、この傷跡を見せ付けてやるんだと匂わすと、ルルーシュは本気で嫌そうな顔をしてC・C・の手元にタオルを投げつけた。

「……もういいだろ？　あとは自分で好きにしろ」

口早に言い置いて、さっさと氣まずい場所からの逃走を計った。が、そうそう簡単に許してやるようなC・C・ではない。俊敏な動きで振り向くと、ルルーシュの肩の上に両腕を伸ばした。

「なんだ、他人の身体は好き放題に眺め回していたクセに、おまえの裸は見せないつもりか？」

「なつ？」

思わずぶりにシャツのボタンに手をかけてみせると、実体験においてはまったく免疫のないルルーシュは絶句しながら激赤した。

その条件反射のような反応があまりに可笑しくて、C・C・はくつくつと喉の奥で笑いを転がしながら胸元にルルーシュの頭を押し付けて、両腕で抱え込むようにして抱き締めなおした。

驚愕に思考が停止してしまっているのだろうルルーシュの耳朵に唇を押し付けながら囁いた。

「……後学のために教えておいてやるから、せいぜい記憶に留めておけ。女という生き物はな、ルルーシュ。たとえ慰み者扱いさ

れようとも、その相手に恋をしているだけですべての感情を喜びに転化することができるんだ。言つておくが、おまえのそのギアスの力よりも強制力は強いぞ？ おまえはただそうした相手の存在を許せばいい。誰でもいい、適當な誰かをそんな恋に落としてみろよ

ほかに誰を許す勇気がないならば、いつそ私を。

そうすれば、すくなくともおまえは癒しを得ることが出来るのだう？

ルルーシュが息をひそめる気配が、つかの間の静寂の邪魔をした。ややあって、負けず嫌いの声が精一杯に囁く。

「……何だそれは、経験談か？」

「私が？」 私ならもつと褒められない恋をしてきたさ

たとえば、恋した相手が最後には決まって私に害を与えても怨嗟の声を浴びながら、 全身の骨を砕かれている最中でも。愛の言葉を囁いたのと同じ唇で、私の死を望んで止まない憎悪の声を聞く。

悲しいとは思つたが、相手を恨んだことは一度もなかつた。

ただひたすらに、恋の相手にすら憎しみの気持ちしか残してやれない、そんな自分の存在が

残念に思つた。悲しいと思つた。 命の火が消えるまで、何度も何度も。できることなら喜びを、それを思うだけで心が一気に晴れ渡るくらいの喜びを、その相手に残してやることができなんにか

Ｃ・Ｃ・が無造作にルルーシュを抱き締めてしまつたものだから、それまで湯気に湿つっていたルルーシュのシャツの背中と髪の毛は今ではしつかり濡れてしまつていた。

Ｃ・Ｃ・の細く白い二の腕や、肩口、胸の谷間のそりそりに、濡れて重くなつたルルーシュの髪の毛が張り付く。激しそぎる抱擁にほろりと零れ落ちていたＣ・Ｃ・の緑の髪に、ルルーシュの黒い髪

が絡まる。吐息は、ルルーシュの耳朵を直接打っていた。

しかし。

「だつたら、おまえのほつこを胸を張つて血漫できる恋人を見つけるよ。

以前におまえは失望させるなと俺に言つたな？ 今がまさしくだ、自分にできないことを俺に押し付けるな」

不敵に笑つて顔を上げたルルーシュは、すっかりこ・こ・のよく知る顔を取り戻してしまつていた。

その自信はいつたいどこから沸いて出ているのかと、感心してしまづくらに力のみなぎる表情で。

失敗したなど、すこしだけこ・こ・は残念に思つた。

もつと辛辣に打ちのめしてしまつてから飴を『えてあげたなら或いは

いや、それでも。この男なら、血の涙を流し続けながらでも、最後には笑つて見せるのだろう。

それがわかつてしまつこ・こ・だつたからこそ、もはや出る幕は用意されていなかつた。

こちらもせいぜい不敵に笑つて、精一杯に息を吐く。

「立ち直るのが遅すぎり。おかげですっかり湯が冷めてしまつたではないか。これ以上私に愛想を尽かされたくなかったら、行つてピザでも作つて來い。そうだな、具は生ハムとルッコラ、チーズは最低でも五種類だ。いや、その前に私の髪を乾かすのも忘れるな。光栄だう？ わかつたら、呆けていないでさつさとしる」

「……はいはい」

不承不承ながらも素直に従つたルルーシュは、やがてこ・こ・をその場に残してまずは着替えるために自分のほうの私室に向かつた。わざわざその背を引き止めてまで湯を入れ替えさせたこ・こ・は、今では肩の上までたっぷりのお湯の中に浸かっている。

ポツンとひとり取り残されてしまった静寂に、なんともいえない複雑な心境を持て余してしまったが、ただひとつはつきり言えることは ルルーシュの噛んだ左肩が痛かつた。熱い湯で血行が促進

されているものだから尚更だ。

「……まったく、とんだ損な役回りじゃないか私は」

そうぶつくさと呟きながら、C・C・は天井の高い空間に視線を投げかけた。

「おい、マリアンヌ？ おまえがあんまり冷たすぎると私を詰るから、ちょっと甘い顔をしてやつた途端にアレだぞ？ だから私は言つたんだ。あいつは飴より鞭のほうが効く。一度甘やかすとトコトンまで付け上がるタイプだからな。 何？ まだおまえは私を責めるのか？ だいたいだな、あいつにはこれが一番効くとおまえが言つからだから私は」

それは以前ナナリーがズザクに教えた知識のひとつだが、疲労や精神的ショックに傷ついている人の心は、どんなに優しい言葉よりも、直接の体温との接触によりほぼ無条件に癒される。

それを試しに実践してみたC・C・だつたが、そもそもあの男のほうこそ無意識のうちにもそうした癒しを求めていて、満足しきつた今現在はさつきまでの変態じみた執着など忘れてしまった様子でさつたとバスルームを後にした。

だからおまえは、未熟だと言うのだよ。この童貞が。

そう毒づいてみせるのだけれども、怒れば怒るほど左肩の傷が疼いてしまうので、C・C・も最後には結局笑つてしまつようがないのだった。

今はまだこの程度の報復で済んでいられるから。

ルルーシュの知略も及ばぬずっと未来を見据えるC・C・には、これは笑つて見過ぎるほどの単なる通過点に過ぎなかつたから。

だったら、おまえのほうこそ胸を張つて自慢できる恋人を見つけるよ。

どの口が。

そんな世迷言を言つて見せるのか。

だからなおさらC.C.には、今はまだ笑つて過ぐせる状況にこそ限りのない幸福を感じる。

そのうちきっとルルーシュのほうこそ、決して見逃すことの出来ない真実を手に入れてしまうのだらう。

私を気遣つてみせるのと同じ唇で、きつとおまえも私が叱責に近いマリアンヌの声音がしきりに何かを話しかけていた。だがC.C.は、今度は自分のほうこそ不要な意識に蓋をしてつかの間の幸福のさなかに、ひとり満足して笑つた。

〔 ende 〕

「お母さん、お母さん！」

そこは壁や床のそこかしこに磨き抜かれた白の目立つとも綺麗な邸宅だった。

その気になれば狩猟が愉しめてしまつほどに広い庭。いつそ山を丸ごと私有しているような広大な面積に、ここを訪れる者たちの三割は門まで辿り着けずに迷子になつてしまふなどと「冗談混じりに囁かれる始末だつたが、ともあれ生まれる前からここに住んでいる少年は、目的を持った足取りで懸命に母の姿を捜して長い廊下を走り続けていた。

年ころは7・8歳ほどになるのだろうか。

すらりと手足の伸びた痩身。肩の上までまっすぐ伸びた黒髪。今は白いブラウスに膝下丈の清楚なパンツを身に着けてるので仕方がないと思えるが、たとえば履き古したジーンズに色の褪せたTシャツを着ているときでも初対面の相手には十中八九少女に間違われてしまうのが目下の悩みの種だつた。だが、今はそれより切羽詰つた重大な問題に直面していたので考え込んでいる暇はない。

乗馬や自転車などに比べると、どこか慣れ切らなさを感じさせる足取りで猛然と無人の廊下を駆けてゆく。

一面に敷き詰められた白亜の床は、よく見ると模様の違つた白大理石で市松模様を描いてある。午後の明るい日差しを燐々と取り入れている大きな窓には、アールヌーボー調の草花を模した細工の緻密な浮き彫りがさりげなく窓から見える風景に雅やかな趣きを与えていた。ほかにも最近はよつぽどのことでもない限り使用する機会の減つてしまつたシャンデリア、部屋の壁のそこそこに備え付けてある古風な燭台、岩のように大きなマホガニーを使用したテーブルや、

なんでもない飾り戸棚ひとつに至るまで豪奢な趣向を凝らした調度が揃えてあり、詳しい経緯までは知らないが、そもそもこの土地も、建物も、以前父と深く親交のあった人物から譲り受けたものらしく、300年を優に越えてしまう筋金入りの年代物だった。

それをまるきり新品同然にいつも磨き上げているのが少年の母の役割で、毎日大勢のメイドを従えながら率先して手入れに精を出している。

だが少年はそうした母の姿を見るたびに、何も好き好んでこんな大きな家に住まなくとも…どうしても思つてしまふのだ。

どうせ父は月の大半を家以外の場所で仕事に明け暮れているわけだし、どれだけ母が父のためを思つて誠心誠意^{うぶ}尽くしても、肝心の父が一日と家に居つかないようではまったく無駄な努力のようにしか思えない。

むしろ最近では少々知識の幅も増えてきて、本当に仕事で家を空けているのかと次第に疑い始める始末だった。

とにかく今はこの家の広さが少年には恵々しくてたまらない。母の立ち寄りそうな場所をいくつか回つて探していくうちに、いつしか全身汗だくなつてしまつていた。こんなに走つた覚えは学校の授業でもありえない。もう本当に「いい加減にしてくれ」と言うような心境だった。

「おかあさんっ！！！」

念のため客用の応接室も全部覗いて、そのどこにも母の姿のないのを確認すると、少年はすぐさまクルリときびすを返して駆け出した。

考え得る限り残りの可能性はひとつだけ。

裏庭の先にある温室だ。

温室には母屋のテラスから柱廊を渡つて行くのがいちばんの近道だったから、少年は何も考えずに中二階のテラスの窓から階段の手すりを伝つて飛び降りた。

しかし、まさかにも階段の終着地点に人が通りかかるとは思つて

なかつたから、焦つた少年は思わず途中で体勢を崩してしまつた。たいした高さからではなかつたが、背中から庭に落下してしまつ。受身をとる方法すら知らなくて、思わずギュッと目を閉ざした。だが、それを見たその人物が走つてくるほうが速かつた。

気がついたときには、お姫様ダッシュの状態でその人の腕の中に抱えられてしまつていた。

恰幅の良い長身はそれでもまだ着痩せするタイプらしく、少年を受け止めてくれていて胸の筋肉は思つた以上に厚かつた。

ゆるくカーブしている焦げ茶色の頭髪は、形の良い頭のラインに沿うように短くカットされていて青年の男ぶりを上げていた。

落ち着いた濃い深緑色の瞳。その瞳が、驚いているような、何か面白がつているような表情で腕の中の自分をじつと見つめている。だが、少年にはそうした表情に胸焼けがするほど見覚えがあつた。きっと内心では『可愛い子だな』とでも感心しているのだろう。

思うと同時に助けてもらつた恩も忘れて、カツとしながら青年に食つてかかつた。

「さつさと離して下さいッ！」

「なんだと、ララ！」

そしたら思わぬところから叱責の声を浴びせられて、ビックリした拍子に目前の青年の顔を見上げても、青年は愉快そうな顔を崩さず笑つている。

聞き覚えのある声にビクビクしながら、ララは青年の肩越しに背後を返り見た。

「お父様ッ？！」

「おまえはまた……。元気なのはいいが、あんまり無茶をするなと何度も言わせるな。相手がその男だつたから良かつたようなものの、女性や小さな子供に怪我をさせてしまつたらどうする？ なのにおまえは、助けてもらつておいてそれなのか？」

淡淡と諭されるように何度も言われているセリフを再現され、それでなくとも青年の腕の中にいる気まずさから悄然と視線を落とし

た。

おずおずと顔を上げると、やはりさしい顔をして自分を見ていた青年に再度同じセリフをくりかえした。

「……すみません、降ろしてもらえますか？」

青年は二口一口少と気持ちの良い笑顔で微笑んで、丁寧にララの身体を地上に戻してくれた。

そのやり方で、やっぱり少女に間違われているなと思ったララはムツとしたが、今の怒りはおとなしく腹の底だけに止めた。居住まいを正して、きつちり腰を折りながら謝罪した。

「助けて頂いてありがとうございました」

「どう致しまして。僕はもつとヤンチャでもいいと思つてゐから、何度もどうぞと言つてあげたいけどね」

「余計な口を挟むな」

にわかに勃発する大人ふたりの諍いに、ララは臆した様子も見せず、父親のほうに視線を向けると、また同じように折り目正しく腰を折る。

「お帰りなさいませ、お父様。お騒がせして申し訳ありませんでした」

そして再度ふたりに等分に会釈を送ると、そのまま目的の場所に向かつて歩いて行つてしまつた。

につこり笑いながらその後ろ姿を見送つていた青年は、感慨深げに息を吐きながらクスクス声に出して笑つた。

「ショックだなア、昔あんなに遊んであげたのに。嫌われちゃつたみたいだね」

「無茶を言つな。生後半年では覚えているほつが異常だ」

庭の芝生から流れてくる風の匂いが芳しい。

午後を過ぎてまもないこの時間では燐々と射す太陽がひときわまぶしく芝生を照らしたが、柱廊の屋根の影に入つてるので暑さのほつは大して感じはしなかつた。

もつとも、もつと苛酷な環境でも居心地よく寛いでしまえる屈強

な青年は、温室までの道のりを繋ぐ赤レンガの上にクスクスと陽気な笑い声を響かせた。

「でも、ちょっと見ない間にずいぶん大きくなつたなア。ララちやん、今年でいくつになるんだつたつけ?」

年の頃は30代前半といったところか。恰幅の良い長身は若干窮屈そうに黒のスーツに包まれているのだが、よく鍛えられた筋肉がその下に隆々と息づいているのは服の上からでも充分にわかつた。見るからに上機嫌の様子で、かたわらの仏頂面を覗き込んでいる。

一方、話を振られた父親は、去っていく子供の後ろ姿をずいぶんと渋い表情をしながら見送った。

「8つだ。反抗期と言うのかな? 最近すこしも親の言つことを聞くやしない。困った奴だよ」

どこか少年の面影に似通つてゐるその人物は、少年と同じ色の黒髪をすこし長めに伸ばしており、こちらもダーク系統のスーツで身を固めているのだが、かたわらに立つ青年に比べればずいぶんとそのしなやかな痩身が際立つた。

けれども、見るからに底知れない貫禄の備わつてゐる男性だ。なんらかの役職に就いている者か、はたまた高貴な生まれの出身か。一見してふたりは、要人とそのSPのようにも見えてしまつ。だが実際は、最近また親密に交流を深めつつある付き合いの長い友人だ。青年は、なおさら愉しげに笑いながら言葉を続けた。

「きみは怒るけど、でも僕の子ども時代に比べるとまだまだおとなしいくらいだよ。頭の良い子みたいだね、なんだかルーシュの小さい頃を見てるみたいで驚いた。やるんじやないかと思つたら、やっぱり体勢を崩して転げ落ちてくれちゃうし。運動神経のちょっと二ブイところまできみ譲りだね。どうせならお母さんに似れば良かつたのに」

「……それはどういう意味だ、スザク?」

「言葉通りの意味だよ。でも、順調に育つてゐみたいで安心した。たしかまだいちばん下だったよね?」

凄んでもみても一向に動じた様子も見せないスザクに、完全にペースを奪われてしまつてゐるルルーシュは、いつそう苦い顔をしながらゆつたり歩み始めた。

「ああ、そうだつた。昨日まではな」

その隣に自然と肩を並べる形でゆつたり歩み始めながら、スザクが呆れた様子でカラカラ笑つた。

「なんだい、また施設の子を引き取つたのか」

「またとか言つな。ナナリーが困つてゐるのに、黙つて見過させるはずがないだろ?」

「変わらぬいないね、ルルーシュのやうにいる。けど、ララちゃんを入れても6人だつたつけ? 上の兄弟たちは元氣にしてるのかい?」

「ああ。上から3人は先週までにもう独立してしまつたよ。ララの上の双子も今月末でアッシュフォードを卒業だ。その日は俺も出席する予定でいるから、スザクもなんとか都合をつけて来ないか?」

「うん、ひさしごりだね。ミレイ会長とリヴァルの結婚式に出席して以来だから…もう7年になるのか。まったく光陰矢の「」としだね、どうりで僕らも老け込むはずだよ」

「一緒にするな。ジジくさいのはおまえ一人で充分だ」

「きみに言わせたくない。でも、案外それでララちゃん機嫌を損ねてるんじゃないのかな? 下の子を引き取る前に、きつちつララちゃんにも相談した?」

「当然だ、納得するまであれの母親が」

「やつぱり。きみからは何も言つてないんだろう? そりゃあララちゃんに拗ねるよ」

「わかつたようなことを。まだ子供も生まれる予定もないんだろう? おまえのほうこそ大事にしてやつてあるんだろうな?」

「愚問だね。どつかの怖いお義兄さんが見張つてなくとも大事にしてるよ。でも、子供は半分あきらめてる。来月末にでも様子を見て施設に相談に行こうと思つてゐるんだ」

「ナナリーは同意しているのか？」

「まだ何も言つてない。けど、そろそろ僕も腰を据えて落ち着きた
い気分だし。ナナリーにはいつも僕がフォローするからって言つて
あるんだけどね」

父親と知らない男性が話をしているのを背中で聞きながら、少年
は寡黙に足を進めていた。

何が何でも、父が母と会う前に知つたばかりの秘密を母に教えて
あげなければ。

つい半月前まで、これでも少年は父のことが大好きだったのだ。
なにしろ彼の父親は、見ているほうが恥ずかしくなってしまうく
らいに母親のことを溺愛していた。

口に出して甘い言葉のひとつも言つて聞かせるわけではなかつた
が、それとなく父がいつも母の精神的な支えになつてていることは少
年の眼から見てもわかりすぎるぐらいにわかってしまう事実だった
のだ。

一見すると母は父よりもずっと強い人だつたけれども、父と一緒に
にいるときは明らかに肩の力が抜けていた。

とにかくいつもニコニコとうれしそうに微笑んでいる印象の強い
人だったが、父と一緒にいるときはその笑顔の迫力からして違うの
だ。

ララの目から見る限り、この父のビーチがそんなに好きなんだろう
と不思議に思えてしまうほどだ。

子犬がじゅれあつて、いるような口喧嘩ならしじつちゅうして、いた

が、普段は本当に仲の良い夫婦で、子供であるララの目で見ていてもまったく理想的な夫婦像であることは認めないわけにはいかなかつた。

それなのに。

あんな裏切りつて、いくらなんでもひど過ぎる。

「お母さんッ！……」

ほとんど泣きそうになりながら、よつやく母の過(い)してくるはずの温室に足を踏み入れた。

そこには種々雑多な植物が縦横無尽に群生していて、一見する限り自然発生したジャングルのようだつた。

けれども実際は、植物学的に貴重な資源がここには育つている。ゼロがブリタニアに挑んだ最終決戦。その際、ほぼ砂漠化してしまったEJ南部にもともと自生していた植物の種子を一から栽培して、いざれば現地の緑化に用いるために品種改良を進めていたのだと教えてもらつた。

だからこの温室の天井は通常では考えられないくらいに高かつた。品種改良の一環で、母が採取してきた野鳥の卵を親鳥と一緒に中に移してあつたから、本来ならこのあたりでは見ることのできない鳥たちが賑々しく木の上で鳴いていた。だが、虫や蝶などは現地から採取してきた土の中から自然発生したものだつた。

何度も何度も焦土と化して、とうとう自力では水を蓄えられなくなってしまった現地の砂漠。しかし、そのなかでさえ長らえることができている生命力の強さに励まされる形で、今も母を筆頭に戦後間もなく結成された生物化学班が難しい研究を続けている最中だ。

こうした事情を抜きにしても、温室の内部はとても過ごしやすい場所だったので、学校に上がるまではララも四六時中母と一緒に過ごしたものだつた。

しかし、この秋から全寮制のアッシュフォード学園に通うことになってしまったので、大好きな母と一緒に過ごす時間が激減してしまった。

この年頃の少年にしては珍しく母に対する執着をすこしも隠さず、今まで育ってきたのは、不在がちな父に代わって自分が母を守るという騎士道精神がしっかりと根付いていたからだ。

一緒に過ごす時間がままならないくらい多忙なことを別にすれば、ララも父のことは尊敬していた。

そして、ゼロのこともずっと以前から当たり前のように知つていたけれど、その正体が父であることを先週の授業で習つたときには、正直担がれているかとさえ思つたのだ。実の父親以上にゼロのことを探していいたから。

世界の大半を非道な軍事力で押さえつけていたブリタニア。そこでの皇子でありながら圧倒的な統率力でもつて革命を起こし続けたゼロは、合衆国日本を設立した後わずか数年で世界中から戦争をなくしてしまったのだ。

誰一人として苦しむ必要のなくなつたやさしい世界。その世界を単身実現してしまつたのがゼロであり、すなわち自分の父親の成し得た前人未到の大偉業。だから父は本当にすごい人なんだと思つていた。世界中の全員が、みんな父に感謝しているのだと思つていた。

だが、違つたのだ。

「おかあさんっ！」

人工的に栽培しているとは思えないほどに茂つた数多の深緑。迂闊に足を踏み入れようものなら容易に迷つてしまいそうなジャングルだったが、通り慣れているララには目を瞑つても歩ける場所だった。5つの誕生日を迎えたばかりの頃、丸々一昼夜迷子になり続けた経験は伊達ではない。それから数分歩いたところで、無事に母の姿を見つけることが叶つた。

「お母さん！」

いづれは現地に戻すことが目的だから、土以外に水も現地のものを使用している。

だが、川や湖は枯れてしまつたから、以前そこにあつた水が流れ込んでいた海の水を培養して貯水していた。

何本も小川やため池が人工的に用意されてあつたけれども、水は循環しないとすぐに腐つてしまつので、小川の下流から水流は温室の地下の貯水槽に注ぎ込み、ふたたび上流に流れ込む仕組みを作つてある。わざわざ現地の水にこだわったのは、現地にしか存在していない微生物やバクテリア、ミネラル成分がその水の中に存在するからだ。だから定期的に降り注ぐスプリンクラーの水源も、もちろん地下貯水槽のものだつた。

その散水時間をやり過ごす目的で、ほぼ温室の中央に小ぶりな四阿^{まや}が設けてある。

人工的に調整したものではあるが、それでも季節に応じて鮮やかな花々があたり一面に咲き零れる場所に位置しているので、休憩所としてはまさに最適の場所だつた。

以前から自然の中で過ごすのが大好きだつた母親は、いつものテッキに腰を下ろして笑つていた。

だが、笑つてこちらを見ているだけで、一向に少年の呼びかけにも応えようとしなかつたのは、その腕の中に小さな赤ん坊を抱いていたからだ。

母は空いているほうの手でララを呼んで招き寄せると、少年の頭をギュッと抱きしめながらひたいに軽くキスをした。

「お帰りなさい、おちびちゃん。でも、どうして急に帰ってきたの？」ちゃんと先生には伝えてきたの？」

心配げでもなく、叱る様子も見せず、あくまで一コ一コ笑いながら母は言つ。

森の緑を映したような綺麗なグリーン・アイズ。いつも笑つている氣がする大きな瞳が少年は中でも大好きだつたのだ。できれば父譲りの黒髪ではなく、母の美しいハーブラウンを遺伝すれば良かつたと今でも本氣で考へてゐる。

それよりも、少年は母に真実を伝えたい氣分でいっぱいだつたら、質問には答えずに早速用件を切り出した。

「ねえ、お父さんが、……ゼロが、戦争に勝つために民間人を

たくさん殺したって言うのは本当?」

ララにその事実を伝えたのは寮の同室になつた少年だった。

入園当時からすぐ気の会うもの同士で仲良く過ごしていたはずだったのに、ある日を境に突然人が変わったようになつてしまつた。嫌われているというレベルでなく、ついには一言の説明もないままに寮の部屋割りを突然変えられてしまつたのだ。

ララは自分が何かをしてしまつたのかと思つていた。だが、違つた。

学園内ですれ違つても目も合わしてくれないどころか、露骨に憎悪の目を向ける相手の態度に業を煮やして、ついに辛抱の切れてしまつたララは相手に断固説明を求めた。

そしたら、言われてしまつたのだ。

おまえの父親が、僕の両親を殺した犯人だと。

いつかぜつたい復讐してやると、少年は目をギラギラ光らせながら唾棄する様子で吐き捨てた。

そんなのはデタラメだと信じたかったのだが、返答を求めた教師たちは一様に「わかつてあげなさい」と言葉を濁してしまつたのだ。少年は乾いた草むらに火が回るような勢いで、周り中の大人に不審を抱いた。

ここにいる全員が、まだ何か重大な事実を隠している。

それがわかつていてるのに、ララが聞いたくらいではどんなに食い下がつても意味のないこととは歴然としていた。

だから唯一の味方である と信じてゐる、母親に返事を求めに帰つて来たのだった。

いつもの笑顔で力いっぱいに「そんなのは嘘よ」と否定して欲しかつた。

けれども、母親はあくまで冷静にこう答えたのだ。

「本当よ。お母さんの父親も戦争のせいで死んでしまつた。でも仕方のことだつたのよ」

「なにが仕方がないつてつ?！」

だつて人が死んでるのに！と続けたかった反論は、驚いて起きてしまつた赤ちゃんの鳴き声で遮られてしまった。

しばらく母はぐずる赤子を寝かしつけるのに時間を要して、やがて顔を上げると静かな表情で笑つた。

「でもね、ブリタニアは　お父さんが戦つていた相手は、もつとたくさんの人々を殺したの。お母さんはブリタニアに生まれたからずっと幸せに暮らしていただけれど、でもエリアーーー日本に生まれた人たちはずっと苦しい思いをしながら生きていた。

たとえばね、ララ。あなたが悪戯をしたときに、言葉であなたを叱るんじゃなくって、あなたを殺してしまつたらどうする？」「…………」

意味がわからなかつた。

悪戯ぐらいで……人の生死が左右されてたまるものか。黙つてしまつた少年の目の前で、母はことさら柔らかな表情で笑つた。

「でもね、ブリタニアはそんな理由で日本人を殺したの。時には、ただそこにいるのが邪魔だからつて、自分たちの役に立たないからつて理由で武器も持たないたくさんの日本人を殺した。ララが日本人だったらどういう気分になるかしら？」

「僕ならぜつたい嫌だつて言つよー！」

「そうよね」

頷いて、母は縁の瞳をさらに細めた。

「だから、お父さんも『嫌だ』つて言つたの。ただ、言つても聞いてくれない相手だつたから行動を起こした。昔からお父さんは、ただ黙つてみているだけでいるのが出来ない人だつたのよ。おかげで、敵味方の区別なくたくさんの人々が犠牲になつてしまつたけど、でも今はこうして世界中から戦争がなくなつた。もう誰も苦しめなくて良くなつたのよ」

もう誰も。

だつたら、どうして彼は今もまだ苦しんでいるのだろうか？

「いつかぜつたに復讐してやると彼は心の底から苦しみながらそう言った。

たしかに、ララの生きているこの世界からは戦争はなくなつた。
戦争の後も続けられている父の政治努力により、誰に教えられる必要もなしに本当に暮らしやすい環境に育つてているのだと自分でも思つ。

父を殺したいほどに憎んでいた彼にしてもそうだった。自活能力の皆無な子供が、その歳までなにひとつ不自由なく長らえていられるのは、父が特に力を入れている福祉事業のたまものだった。子供のない世帯には無税のほかに養育費を一部支給するといった優遇措置を約束することで、率先して戦争で親を亡くしてしまった子供たちの支援に働きかけていた。実際に行動を起こしているのは既存のNPO法人だったが、その大半が以前ゼロの配下で戦っていた黒の騎士団のメンバーであることは世間も暗黙の了解で認知していた。だから、優遇措置目的で戦争孤児を引き受けて、裏では虐待をしているようなどんでもない親たちにも、秀でた情報網と行動力を活かす形で実に迅速に細やかな対応が行われているのだった。

実際、父の行つている業績は大したことだと今でも思う。
でも、だからといって世界中の全員が幸福になつたわけではない。
どれだけ居心地の良い家庭をあてがつても、所詮は他人だ。家族を殺されてしまった心の傷が帳消しになるわけでは決してない。

それでも父のやつたことは間違いではないのだろうか？

ララはそれから数分も沈黙を守り続けた後で、母に問うた。

「……お母さんは、本当にお父さんは正しいと信じるの？」

母は答えた。一瞬の迷いも見せない様子で、「信じるわ。今も心の底から信じてる」

でも、お父さんはおじいちゃんを殺してしまったのでしょうか？

出口の見えない迷路に迷い込んでしまったかのように、ララの気持ちちは晴れることはなかった。

それでも、なんとか結論を得たい一心で別な質問を考えていたの

だが、背後から近づいてきた足音にその努力も邪魔をされてしまった。

「 やあ、シャーリー。ひさしふり」

「 スザクくん！」

驚いた母親が叫ぶのと同時に、腕の中で眠っていた赤ん坊が泣き出した。

すると、その背後から音もなく歩み寄ってきた父親が、渋い顔をしながらシャーリーの腕の中から赤ん坊を引き受けた。

正直言つて無骨なスース姿の風格溢れる男性が、やわらかな布に包まれている赤子を抱いている姿は、まるきり誘拐犯のようにしか見えなかつたが、それでも四阿からすこし離れた場所まで歩んでいるうちに、じきに赤ん坊の泣き声も静まつてしまつていた。

その様子を横目に赤い顔をしているシャーリーのかたわらで、こちらも頭をかいているスザクが感心したように呟いた。

「へえ～、意外だな。ルルーシュって子守りまでできるんだ？」

「そ～なの。あいかわらず料理も上手いし、炊事洗濯家事親父、あとはモーお乳が出せねば完璧なんだけどね」

「あはは、そこだけはルルーシュがどれだけ頑張つても無理だよね」四阿からすこし行つたところにため池を利用した噴水がある。ルルーシュはその周囲をゆつたり歩みながら、腕の中の赤ん坊にやさしい表情で何」とかを囁きかけている様子だった。

シャーリーはその様子につつとり見惚れているよつた息を漏らした。

「ああいう姿を見ると思い出しちゃうな。私がララを産んだとき、ちょうど上の双子がヤンチャで手が焼ける時期だつたから、体力自慢の私と変わつたの。ララは離乳が早かつたものだから余計にね。だからララは半分ルルが育てたようなものなのよ」

それまで大人ふたりの父親評にぼんやり耳を傾けていたララは、

驚きのあまり思わず母の顔を凝視した。

自分が物心つく以前からずつと父は仕事の虫だつたから、てつき

りその以前からその調子だとばかり思っていたのだ。

本音を言えば少なからず嫉妬を感じていた。だからなるべく見ないようにしていた父と腕の中の赤ん坊の姿を遠目に眺めながら、ララはかたわらで陽気に笑っている大人ふたりの声を聞いていた。

「そりだつたんだ。当時はまた自分の子供まで政治の道具に使って

「と呆れたモンだつたけど、アレは本氣で子育てしてたんだな」

「私の対面が悪いとでも思つたんでしょう。ルルもわざとそう見えるように振る舞つてたみたいだし。別に誰に何を言われても、こつちもこつちで忙しくしていったから気にする暇なんてなかつたのにね。

上手いわよ～私、今でも時速128キロは出せる自信があるもの」

「はは、それは頼もしいや。たしかにルルーシュじゅ、キャッチボールでも山登りでもじきに子供に負けぢやうね」

「聞こえたぞ、スザク」

物騒な顔をしながら戻ってきたルルーシュだつたが、その腕の中では小さな赤ん坊がすやすやと気持ち良さそつた寝息を立てながら寝入つている。

その感心するしかない手際のよさに、シャーリーが幸福そうに微笑んだ。

「ところで、スザクくん？ 今日はゆつくりして行けるのよね」

訊ねるところよりも、どことなく脅しつけてくるよつた言い方に、

スザクは面白がつて笑つた。

「昔からきみの言つつけには素直に従つておくれ習性ができるといふらね、仰せのままで。ナナリーが淋しがるから泊まつてはいけないけど」

「だったら、ナナちゃんも一緒に連れてきてくれたらうれしいのに。私もだけど、どこかの怖～いお兄さんはもつと逢いたがつていて思つけど？」

「うん、僕もねそつしたいのは山々なんだけど。ナナリーのほうも本当は怒つててるのは口だけで、もうとつくて許してほはずなんだけどね。でも、ほらルーシュのほうがアレだから」

アレと親指で示した先にいる父親にララもつられて目線を向けてしまったが、話が聞こえているはずの父親はまったく都合の良いことに腕の中の赤ん坊に子守唄を歌うのに夢中のフリを装っていた。

ナナリー エリアーの最後の総督 皇女殿下。

父親の実の妹であるというその人に、ララはまだ一度も逢つたことはなかつた。

詳しい理由は知らないが、ふたりは現在まったくの没交渉であるらしかつた。

だが、テレビや雑誌で見る限り、父にはあまり似ていないその女性はいつもやわらかな微笑をたたえていて、ララの友人の中にも熱を上げている連中が多かつた。

そして。

そうした一連の様子を母のかたわらで見守りながら、ララは初対面だとばかり思つていた青年のことを思い出していた。

いや、思い出したというよりも、これも先日の授業で習つたことだつた。

生まれはエリアーになる以前の日本。そこ最後の首相・枢木ゲンブの長男で、後の戦争ではブリタニアの精銳としてゼロに対抗し続けていたナイトオブワーン 枢木スザク。

彼も忠誠を誓つた皇女コーフェミアをゼロに殺されているはずだった。

それなのに、そんな事実は忘れてしまつたような顔をして、ここでこうして笑つてゐる……。

正直、どう理解すればよいのかますますわからなくなつてしまつ思いの底なし沼に飲み込まれてゆくよつな心境を味わつていていたときだつた。

何かにハツと氣付いたような様子のスザクが、四阿の背後に茂つた喬木きようぼくに明るい声を投げかけた。

「ああ、咲世子さん。ご無沙汰します」

スザクが声を掛けてから数秒後に木立の向こうから姿を現したメ

イド服姿の咲世子は、両手にアフタヌーンティーの用意を揃えていた。

自分のほうからそれを迎えに行つたスザクは、ケーキが入つたバスクケットだけを咲世子に任せて盆を抱えて戻ってきた。客の身でありながら、実に手馴れた様子でテーブルの上にお茶の用意をセッティングし始める。

それらの様子をテーブルに座つたまま眺めていただけのシャーリーは、ララの皿に皿を合わせると力強くにっこり笑つた。

「い、い？ ララ、よく覚えておきなさいね。モテる秘訣は、お金でもなく、容姿でもなく、人一倍スマートな身のこなしよ…」

「子供に変なことを教えるな、シャーリー」

そんなところだけはしつかり耳にしている父親は、すかさず口を挟んだが、

「まあ、否定はしないかな？ 僕つてモテるし」

当の本人にしゃあしゃあと肯定されてしまったものだから、たちまち皿を三角に吊り上げてスザクを睨んだ。

「スザク、おまえ……」

「そ、そ～。しかもそのモテモテの旦那さまは、奥さんのナナちゃんに夢中なの。これがいちばんの高ポイントよ。ね～？ 咲世子さん」

「そうですね。学園でも下級生に人気のあるのはルルーシュ様のほうですが、上級生になるとどうしたわけかスザクさんの人気が逆転するようです」

週に一度だけアッシュ・フォード学園へ体術の講師として出向いている咲世子は、意外なところで事情に通じているようだつた。

そのやりとりを複雑そうな表情で眺めていたルルーシュだつたが、それに気付いたシャーリーと皿が合ひつとなぜかしら微かに頬が染まつた。

シャーリーは気にする」となく「一二一二」と呟つたままを口にした。

「妬かなくてもいいのに。だいじょうぶ、ルルのことは私が百人分、

千年先まで大好きだつて予約済みだから

おそらくそれを予測していたのに恥ずかしさを制御できなかつたルルーシュは先にも増して頬を紅潮させている。

「臆面もなく……よくそんなことが言えるな。スザクもいる前で「いや僕は気にしてないからお構いなく」

「そうよ、恥ずかしがる必要なんてないもの。どれだけ自分にひとつは当たり前の事実でも、言わなきゃ誰にも伝わらない。 つと、そうそう、そうだった。ねえね、ルル？ 照れていいから、耳だけちょっと貸してくれる？」

居心地悪げに四阿の周りをブラブラ歩き回っていたルルーシュは、不審げな様子を隠せないながらも素直にシャーリーの呼びかけに従つた。

水よけに四阿の足元だけを覆つた竹製の柵越しにすこしだけ身を乗り出して、本当に耳だけをシャーリーの至近に近づけた。

そして、シャーリーはルルーシュだけに聞こえる小声で何事かを囁いていたのだったが、

「えっ、それは本当かッ？！」

とルルーシュが叫ぶのと、驚いた赤ん坊がみたび泣き出すのはほとんど同時にことだつた。

折りよくテーブルセッティングを済ませた咲世子が何も言わずにルルーシュの腕から赤ん坊を引き取つて、母屋のほうに戻つていつた。

ルルーシュは一瞬だけ申し訳なさそうな表情で顔を赤く染めていたのだったが、それより以上に今はシャーリーの伝えた内容に驚きを隠せない様子でいた。

そこまで動搖した父親の姿を初めて見るララは、こつそりケーキに伸ばしていた手を止めるくらいにすっかり驚いてしまつたが、何事かを察しているらしい隣のスザクが呑気な聲音でそれを訊ねた。

「なになに？ ついにオメデタかい？」

その言葉にさらに驚いてしまつたララは、視線でスザクを射殺し

かねない勢いで隣を凝視してしまつたが、シャーリーはこの世の幸福を全部独り占めしているような表情で笑つた。

「うん、四ヶ月だつて。ネネの半年検診のついでのつもりだつたんだけど、診てもらつておいて正解だつたみたい」

「おめでとう、シャーリー。良かったね」

「ありがとう。すごくうれしい」

それは極めて温厚なやり取りだつたが、今なおララの驚愕は続いていた。

あれは自分が3歳の誕生日を迎えた頃だつただろうか。自分と言う実の子供がいるにもかかわらず、次々よそから子供を引き取つてくる両親の気持ちが理解できずに、ララは猛然と抗議したのだ。「僕の本当の弟か妹を産んで！」と。

もちろん上の兄弟もララにやさしくしてくれた。

だが、いつの世界も口さがない大人はいるもので、遊びに出かけた友人宅で「実の兄弟がいないなんて可哀想」と言われてしまつたのだ。

その意味が理解できなかつたララは、「よく素直に母親に意味を正したのだったが、母親は臆することなくわかりやすい言葉で教えてくれた。

両親は自分の子供を産まないのではなく、産みづらい体质だつたのだ。

父と母の結婚したのは、シャーリーがアッシュ・シユフォード学園を卒業するのを待つてのことだつたから、もう10年以上昔のことだつた。

父と母は同級生だつたのだが、父がゼロであることが世間的に明らかになつた時点で、父は放校処分を受けていた。

実際は、そこにも政治的な要因があり、父の幼少時代から経済的な支援を続けていたアッシュ・シユフォード家に被害が及ばぬようにとの策だつたから、もちろん水面下では双方の蜜月関係は続いていた。ゼロであるルルーシュと結婚したことにより、どうしても危険の避

けられなくなってしまったシャーリーを最後の決戦まで実質的に匿い続けたのもアッシュ・フォード家から派遣された人物だった。

そうした種々の不安の中にある時期だから、ようやくララを授かったのは結婚後5年目のことだった。

その頃にはずいぶんと政情が落ち着きを取り戻し始めていたので、もちろん次の子をすぐに設けても何の問題もなかつたわけだが、以後8年間ずっと良い知らせを手に入れずについた。

だからといって、その代償に施設の子供を引き取っていたわけではなかつたが。

シャーリーに招かれるままに、そのままかたわらに腰を下ろし直したルルーシュは、しばらくの間ものも言えない様子でじっと静かにシャーリーの手を握っていた。

しかし、にわかにハツとしたかと思いきや、熱の籠もつた聲音で重々しく演説しあげ始めた。

「いや、だつたらこうしている場合ぢゃない。今すぐ主要な産院に協力を求めよう。シャーリー、個室の規模はどれくらいがいい？ 食事の内容も重要な件だな。念には念を入れて、予定日の半年前にはすぐにでも入院できるようにまずは手配が先決だ。必要とあればナナリーの主治医にも協力を求めて」

見るからにものすごいスピードで考えをまとめているらしいルルーシュの隣で、いかにも慣れた態度でシャーリーが笑った。

「予約ならとっくにしてきちゃったわよ。いつもの先生に」

「それでは万が一の事態に最適な対処が」

「怒るわよルル。あんまり縁起でもないことばかり言わないで」

「そうだよ、ルルーシュ。きみが産むわけじゃないんだから、ここはひとまずじつしり構えて、詳細はシャーリーに任せておくのがいちばんなんじやないのかな？」

「黙れ、スザク！ 僕が産めるなら既に147の選択肢はクリアしたも当然だ。俺が産めないからこそ、最低でも16・388通りの攻略法を用意しておく必要があるんだろう！」

いつものクセでそんなセリフをあくまで真剣に力説してくれるものだから、シャーリーとスザクは同時に声を合させて吹き出した。

「ルツ、ルルーシュ！ キ、キミがう、産むつてッ……ひや、

147通りイ？！」

「ルルなら、ほつ、本当にうつ、産めちゃいそうシ……が、がんばつてみる？ おつ、応援つ……するつからつッ！」

身体をふたつ折りにして悶絶している大人ふたりを前にして、ララは呆然としながら父親の顔を眺めていた。

しばらくは顔中を真っ赤に染めながらシャーリーとスザクに小言を言い続けていたルルーシュだが、ふと見られていることに気付くと、それはもう気まずそうな表情で問い合わせたものだった。

「……なんだ、ララ。おまえまで言いたいことがありそうじゃないか？」

「ううん、そうじやないけど……」

「何だ？ はつきり言え」

「ルル、ハつ当たりしないで」

「そうだよ大人げない」

「おまえたちは黙つていろ！ 僕は今ララとだな」

「ううん、違うの。ただね、なんだかお父さん うれしいんだなあつて……思つただけ」

ララが淡々と言つたのに、笑つていたふたりの声もぴたりと止まつた。

ルルーシュがすこし慌てたような表情で、机の上のララの手を両手で掴んだ。

「当たり前だろう！ ……ララの願いだ。叶えてやるのが遅くなつてしまつて悪かつたな」

まさかにもそんなことを父親に言われるとは思つていなかつた少年は、思わず言葉を失くしてしまつた。

それは口さがない大人の陰口がララに言わせたにすぎない言葉のはずだつた。ララ自身、学校に上がるのと同時にいろんな知識を仕

入れていたから、産みたくても産めない夫婦が世間には多く存在していることを知っていた。

だからいつしかあきらめるのではなしに、納得と言ひ形で不満は解消してしまつていたのだが。

それでも、3歳の自分が言つたに過ぎない要求を、この多忙な父親が覚えてくれたのが言葉にならないほどうれしかつた。

父の隣で母親も包み込むよつやさしい表情で自分を見つめている。

その隣に座つてゐる、父と幼馴染みだといつ青年も、負けず劣らず温もり溢れる表情で見守つてくれている。

自分はこれ以上もなく、いつもした人たちに守られているのだと改めて氣付いた。

「…………うん。…………」

やがてララはそう静かに頷いたが、頷いた視線をそのまま上げることができなくなつてしまつた。

喉の奥に得体の知れない大きな塊がブワッと一気に爆発して、あまりの苦しさに目を閉じてしまつたら、それ以上もう何も考えられなくなつてしまつていた。

うれしいということ以外、何も考えられなくなつてしまつていた。この胸の中いっぱいに溢れている感情が『幸福』だと、初めて理解できたような感じがした。

「 ララ、ララ、私とルルの可愛い赤ちゃん。生まれてくれて本当にありがとう。私とルルを世界でいちばん幸福にさせてくれてありがとう。 大好きよ、あなたに会えて本当に良かつた。愛してるわ、私とルルの可愛い赤ちゃん 」

それは、恋をしている少女なら誰しも一度は胸に思い描いたことのある『最高の夢』だつただろう。

好きな相手と幸せになりたい。

結婚は、その幸せの最たるものだつたから。

強く願い続けていれば、いつかはそんな日が自分にもきっと訪れるはずだと信じて疑いはしなかった。

けれども、あの雨の日の街角で、シャーリーは突然に、間違いだらけの現実に気付いてしまった。

誰かに仕組まれている嘘の世界に気付かされてしまったのだ。

憎いと思った。

たつた今さつさまで、当たり前のように恋していた男の存在が。

それでも。

最終的にはそれでもいいと思えてしまった。

愛しい男の正体が誰であつても、ルルーシュがルルーシュである事実に変わりはない。

シャーリーが知っているルルーシュは、シャーリーが恋をしているルルーシュ以外にあり得ないのだから。

自分でも笑つてしまつべからんに、簡単に、シャーリーはルルーシュに三度も恋をした。

父を殺される以前と、ルルーシュに記憶を消された以後、そして

今。

結局、誰が何を操作していても、まるでひまわりが太陽に向かつて花を咲かせてしまうように、シャーリーの恋心は必ずルルーシュに向かつて扉を開いてしまうのだ。

正直、自分でもルルーシュのどこが好きだかわからない。

最初は苦手なところから始まつたただ的好奇心のはずだったのに。気付いたときにはもう恋をしていた。

一度で済んでいたならただの偶然。

二度目でもまだ偶然かな？

でも、私は三度目でもまだ恋をしてしまったの。

きつと、これから先、何度も同じように記憶をなくしても、どうせ自分はまたルルーシュに恋をするのだ。

そう、思つたら、迷いや怖さが一気に吹っ切れてしまった。

今まではずつとルルーシュにも自分を好きになつてもらいたい一心でそばに居続けていただけだったけれども、だったら、自分ももつと努力しなきゃいけないと思った。

ルルーシュは今、とても呑気に恋に現^{うつ}を抜かしている暇なんてない状況に陥つてしまつている。

ルルーシュがどうしてそんな戦いに巻き込まれてしまつているのか何も知らない。

どうしてブリタニアの一学生に過ぎないルルーシュが、幸せな学園生活を満喫していたはずの少年が、革命家になる必要があつたのか。

理由を知りたいと思つた。けれども、話を聞くだけだったなら、何も今やるべきことではなかつたのだ。

そんなどはすべてが終わつてからでも十分だ。

なにより今まずやるべきは、ルルーシュの夢を叶えてあげること。

だって、ふたりで幸せを掴みたいと思っているんだもん。

だったら、どんなにわざかなことでも構わないから、私もルルーシュを助けてあげなくちゃいけないと思つた。

いつそのこと、私がルルーシュを守つてあげなくちゃ。

記憶にないはずの人々が、自分たちの周りで当たり前の顔をして生活をしていた。

誰が敵か味方かもわからない。

わからぬながらに、幸福な生活を送つていたはずだつたけど、嘘だとわかつてしまつた以上、夢の中の生活は終わりを迎えたのだ。真実の生活を取り戻すためにも、私がルルのために安全な場所を確保してあげなくちゃ。

それをひとつずつ確かめていくのはとてつもなく時間がかかるけど、でも、ルルを助けて、守つてあげるためなんだもん。私がまず、頑張つてみせなくちゃ。

そう、思つていたはずだったのに。

どう、しちゃつたんだろう？　なんだか身体に力が入らない。

ようやくルルと一緒に過ごせると思つたのに。

私が知つているルルと、知らないルル。

そのふたつのルルを混ぜ合わせたら、きっと別々でいるよりもルルは幸せな気分を味わつてくれるはずだから。

いつも私に笑つて見せてくれているように、いつも笑つていられる世界にすこしでも近づいていくはずだから。

本当は今までずつとひとりで淋しかつたんだよね、ルル？

幸福に過ごしているはずの生活が、すべて仮面にすぎないことをルルひとりだけが知つていた。

知つていたのに、ずっとひとりきりで黙つて、こんな孤独に耐えていた。

必死で私たちの幸福を守るために我慢していたんだよね？

なのに、そんなルルの気持ちに私はちつとも気付いてやれなかつ

た。

ずっと、ルルも幸福なんだって信じて疑わずに過ごしてきた。

でも、もうだいじょうぶだから。

私がいる。

ルルがもう一度と淋しい思いを味わわないように頑張るから。
だから、見ててねルル！

ぜつたに私があなたを幸福にしてあげる！

……そう、言ってあげるつもりでいたんだけどなあ……。
どこで方法を間違つてしまつたんだろう？

水の中に浮かんでいるような、頼りない空間。
でも、私は水に飛び込む瞬間が大好きだった。

キラキラと輝く水色と、美しい光の交錯。

そういえば、いつも自分が見ているだけで、ルルには一度も見せてあげたことがなかつたね。

今度ルルにも見せてあげられたら、ルルも一緒に喜んでくれるかな？

「 駄目だッ！！！ 死ぬなッッ！！！ シャーリーッ！！！」

「！－！」

限りなく透明に輝いていて、まるで夢を見ているみたいに美しい
その水の色。

寒くて、ひとりぼっちで淋しくて、どうしようもなくルルに今、
会いたいと思つた。

こんなふうに淋しい思いを、今までずっとルルが味わい続けていたのかと思ったら、

たつた今、この瞬間にもルルのところに走つていつてあげたいと思つた。

何も言わずにじっかりと、腕の中にルルを抱きしめてあげたいとそう思つた。

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。

ああ、なんだ。

ようやくルルも一緒に見てくれる気になつたんだね。

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。

私ね、一足早く『リラフ』って名前の子供に逢つて来たんだよ？
可愛かったなあ。

私の知らない頃のルルってあんな感じだったのかな？

大好きなのに、好きって素直に言えなくて、
でも最後には世界中でいちばん幸せそうな顔をして笑つていた。
夢の中で私が次に産むはずだったルルの赤ちゃん。

今度の子もきっと世界でいちばん幸せそうな顔をして笑つてくれるかな？

くれるよね。

だつて、ルルと私の子供だもん。

世界中でいちばん幸福なのに決まつている。

だつて、ルルを世界でいちばん大好きな私がこんなに幸福なんだもん。

だからあなたにすこしだも、この幸せな気持ちを分けてあげたい。もつともつとたくさん、好きって伝えてあげなくちゃ。

ちょっとは感動するでしょ？ つて。

たまには素直に認めなさいよ、って。

言わせたし

ほかにももつといつぱい、いつぱい話したい。

話せぬよね？

だって、恋はパワーって言つたじやない。

だから、嫌だと言つても、私は何度も生まれ変わって、また同じようにルルに恋をするんだもん。

「……………」
「……………」

キラキラ、キラキラ、降り注いでくる水の色。
この世でいちばん綺麗な水の魚。

私の胸の奥で輝く
恋の火。まことに永遠に。

[e n d e]

昔々あるところに、孤独な王様が暮らしていました。

王様はずいぶん昔に見知らぬ魔女から不思議な力をプレゼントされたのですが、あまりに熱心にその力を使って頑張りすぎてしまつたので、そのうち王様の不思議な力は暴走してしまいました。

声に出して言つた言葉が全部命令になつてしまつのです。

「ずっと雨の日ばかりで憂鬱だな」

それをそばで聞いていた女の子は、重度のうつ病を患つてそのうち自殺してしまいました。

「美味しい紅茶が手に入つたんだ。良かつたら一緒に飲まないか？」

それをそばで聞いていた男の子は、一生紅茶だけしか飲めなくなつてしまつて栄養失調で死んでしまいました。

「そんなに暗いところで本ばかり読んでもいたら、目が悪くなつてしまつぞ」

それをそばで聞いていた女の子は、目が見えなくなつてしましました。

「仕事に精を出してくれるのはありがたい話だが、たまにはスポーツでもしてリフレッシュする必要があるだろう？」

それをそばで聞いていた男の子は、休みたくても運動が止められずに体力を使い果たして死んでしまいました。

そのうち王様は話すことを怖がるよつになつてしまつました。
そうしたら、どうでしょ？

今度は王様が何かを考えただけで、周りの人々が命令に従つようになつてしまつたのです。

半年も立たないうちに、王様の周りには誰も居なくなつてしましました。

親しい人から順に死んでしまいました。

悲しくなつた王様は、我慢をして、我慢をして、どうしても耐えられなくなつてしまつてから引越しをくり返していたのですが、10年も経たないうちに世界の半分が誰も住まない国になつてしまいました。

王様はこんな力を与えた見知らぬ魔女のことを激しく恨み始めました。

あんな魔女のほうこそ今すぐ死んでしまつたらいいのにと、王様は毎日毎日そのことだけを強く考え続けました。

そして、ついに願いは叶つたのです。

「ああ、うれしい。おまえのおかげで私はよつやく死ぬことが出来るよ。どうもありがとう」

その魔女はわざわざ王様のところまで訪ねてきて、王様の見ている前でパツタリ倒れて死んでしまいました。

その頃にはもう世界中から人と言う人が全部死んで居なくなつてしまつたので、たつたひとりになつてしまつた王様は、自分もみんなのように早く死んでしまいたいと願い始めました。

とてもとても激しく長く願い続けていたのですが、どうしたわけか100年経つても200年経つても王様は歳をとらなくなつてしましました。

ひとりぼっちになってしまった世界の上で、王様はそれから毎日死ぬことばかりを考えながら暮らしていました。

死ねない自分を不憫に思つて、毎日毎日自分の不運を嘆いて暮らしました。

そして、ふと王様は考えたのです。

もしも自分にこんな力がなかつたら、いつたいどれくらいの人間が自分の言う事を聞いてくれたのだろうかと。確かめたくても、誰も居なくなつてしまつたので確かめようがありません。

ついに氣の狂つてしまつた王様は、誰も居なくなつてしまつた『やさしい世界』で今でもひとり暮らしています。

〔 end 〕

風に乗って届いてくる花の香り。

ほのかに新緑のすがしさも含んでいるそれは眠っているルルーシュの鼻腔をくすぐり、頬の産毛を撫でるようにして行き過ぎて、やがて部屋のカーテンを揺らしてまた自由な外の世界に出て行つた。

ひらひらとカーテンが揺らぐに合わせて、投げ出している四肢の上に淡い日差しを感じる。

とても気持ちの良い朝だつた。

なんだか久しぶりにゆっくり眠ることのできたような気分。

野鳥たちがチュンチュンと鳴いている向こう側で、人の声がクスクスと愉しげに寛いでいる声が聞こえる。

何がそんなに嬉しいのだろうかと気になつて意識を向けてみるのだけれども、あんまり眠りの余韻が気持ち良いものだから一向に目を開ける気分になれない。

思つている間にも笑い声がひときわ盛り上がり、かすかにだが人の足音が近づいてくるのを感じた。

なんだかとても軽い体重だ。床を踏む靴音でけつこうなスピードを出しているのがわかるのに、まるきりテニスボールを軽く地面にバウンドさせている程度の身の軽さ。それがそのままルルーシュの足元附近から枕元に近づいてきて。そこでそのまま音が失せてしまつたので、いつたいどうしたのかと思ったが、じきに四肢を照らしていた太陽の温度が失せているのに気付いたので、じつと息さえ殺して枕元から様子を窺つているのだなと思つた。

けれども、ずいぶんと長い間そのままの状態でいるので、何をそんなに熱心に見ているのかと気になつたが、それよりも気が付いてみれば顔の上を照らし始めていた日光を遮つてくれていたので、さ

つきよりもむしろ寝心地が改善されたほうを喜んだ。

そばに立っている誰かも静かに自分を見ているだけだから、そのうち気にもならなくなってしまった。

しゃらりとカーテンの風に舞う音。

吹き込んでくる空気がほのかな湿気を運んでくるけれど、朝一番の清浄に冷えているのでなおさら心地が良かつた。

できればこのまま永遠にも眠つていたいような気持ち。

そこにまた何かの音が近づいてきて　それは軽いモーター音のようだった　先に訪れていた誰かに小さな声で問いかけた。

「起きそうにありませんか?」

「うん……。というよりも、あんまり気持ちが良さそうで……起きるのはちょっと……可哀想な感じかな?」

「……そうですね……」

初めて話したほうが少女の声。

それに答えたのが少年の声だった。

ルルーシュは聞いた覚えのある声に誰だったかなと思いを巡らす。けれどもまだ思考力も眠りの影響を受けていて、まるきり大海原に漂いながら瞑想にでも耽つているような気分だ。

すこしも考えがまとめられないでいる間に、そこにまた別の人間の足音が近づいてきた。

先のふたりに比べれば、なんだかひどく刺々しい足音だ。

ルルーシュは条件反射で眉間に皺を刻んだ。

「なんだ、まだ起こしていないのか?」

「だつて……」

「たぶんお疲れなんですよ。……最近ずいぶんお忙しそうにしていましたから」

そして沈黙。

おそらく訪れている全員で、眠つている姿を観察でもしているのだろう。

ルルーシュはこのまま放つておいてくれればいいのと思った。

だが、高飛車な女の声が、フンッと鼻を鳴らすと同時に続けた。
「しかし、そもそも起こせといったのはこいつだ。こいつ寝汚い
奴には……」

「あっ、駄目ッ……！」

「きやあ……ッ！」

ルルーシュは突然腹部に刺されるような痛みを感じて、身体を二つ折りにして悶絶した。

いつたい何が起こったのか理解できなかつたが、痛みが落ち着いてくるのと同時にようやく薄目を開いて、自分の腹部に突き刺さっている衣物のブーツの踵に気付いた。

痛みに思わず涙を溜めながら、暴行の相手の顔を睨んだ。

「…………おまええ～……ッ！」

それでも相手は涼しい顔で高飛車な女神のように微笑んだ。

「うれしいだろ？」「のドMが。こんな朝っぱらからこんな美人に起こされて」

「ふざけるなアアア～ッッッ！！！」

とつさに胸倉を掴もうと手を伸ばしたが、それを容易く許してくれるような相手ではなかつた。

かえつて容赦なく腹の上の踵に体重をかけられて、ルルーシュは声もなく痙攣する。

「そうかそうか、そんなにうれしいか。涙まで流して。身悶えている姿が絶品だぞ。男にしておくのがもつたいいくらじに色氣のある奴だ。まったく朝っぱらから不埒な男だな」

「シ、……さん……あのつ……そろそろお兄様が……」

「そつ、そうだよつ、本氣で死んじゃつよつ……」

「そつか？この風のよつに軽い私の体重で？」

いかにも不満そうに言いながら、それでも声もなく脂汗を流しているルルーシュに気付いて渋々足を床の上に戻した。

ルルーシュは、そのまま声もなく氣絶した。

Ｃ・Ｃ・は呆れたように呟いた。

「ほら見ろ、また眠ってしまったじゃないか

「……え……いや……それは……眠ってるんじゃなくって……」

「ああっ、もうっお兄様？　お兄様っ？　しつかりしてくださいっ
心配のあまり、自分たちのほうこそ泣きそうになつてている少年少女の反論を、C・C・は軽い鼻息で吹き飛ばすと、枕元に置いてある鉱水のビンに手を伸ばした。

「…………で？　俺はどうして濡れているんだ？」

それから半時間ばかりが経過して、庭のテラスのテーブルでルルーシュはぶすぐれた表情で訊ねた。

パジャマのまま寝室以外で過ごすのは本来ルルーシュの好むところではなかつたが、休日の朝食時ということで特別に許すことじた。

というよりも、着替える気力すら失くしていたせいもある。

すっかり寝乱れている黒髪からぽたぽたと水滴を滴らせながら胸の前で腕を組んでいるルルーシュの正面には口々とナナリーが肩を並べて座つていて、しきりに気まずそうに目配せしあつている。

C・C・は高々と組んだ足先がかろうじて届くような距離に腰を下ろしていく、ばさりと音を立てながら新聞をめくつた。

「本当に呑気な男だな。おまえが一度寝している最中に地震があつたんだ。危なかつたぞ、私がとつそに受け止めなかつたら鉱水のビンがおまえの頭に直撃していた。濡れる程度で済んで良かつたじゃないか」

「ほおおう～……」

ルルーシュは、組んだ腕をふるふる震わせながら、しゃあしゃあと嘘をつくし・し・の顔を横田に睨んだ。

その正面では、やはり居心地悪そうに肩をすくめている口口とナリーが、わずかな音も立てないようにしながら静かに食事を続けている。

メニューは定番のブレークファストだ。すり潰したジャガイモの隠し味が口当たりをまろやかにさせているプレーンオムレツ、トマトと数種類のハーブのサラダ、ポークに穀物を混ぜたソーセージのホワイトピティング、そしてブラウンブレッド。パンなどいかにも焼き立てで、千切るとほかほか湯気が上がった。

し・し・はその方向を見もしないで、新聞の上に熱心に視線を走らせている。

「気持ちはわかるが、朝っぱらからそんなに熱心に見つめるなよ。照れるじゃないか」

「だれがツツ！…！」

「いちいち叫ぶな、怒鳴るな、テーブルを叩くな。可愛い妹と弟が真似をしたら困るだろ？」「

「ツツツ！…！」

どれだけ真剣に怒つても一向に歯牙にもかけられないルルーシュは、それ以上の無駄な抵抗をあきらめると無言でし・し・の手元から新聞を取り上げた。

「何をする？」

し・し・は冷静な声で怒つていたのだが、それには目も向けないで折り畳み沿つて綺麗に畳んでしまうと、ポイッとテーブルの端に投げ捨てた。

「おまえのマナーがいちばん悪いだろ？が。食事のときは食事に集中しろ、足を組んで座るな、どうして朝食ぐらい一緒にものを食べられないんだ？ 朝からピザ？ ハツ、見ていろこっちの胸が悪くなる」

「ぐぐぐ」ともじり言葉を並べるルルーシュを、し・し・

は一瞬横目で見ただけで口クに耳を貸すともしなかった。

完全にあてつけるのが目的で、かたわらの口口とナナリーに向かつてニーッコリ微笑んだ。

「どうだ、口口、ナナリー、美味しいか？」

もちろんルルーシュは目を三角にして怒ったが、問われたほうの二人はそれには構わず機敏な反応を示した。

「はいっ、とっても美味しいですっ。以前はあんまりホワイトプリンセスが好きではなかつたんですけど、C.C.さんが作ってくれたすると風味が良いのでついついたくさん食べてしまいます」

「僕も。朝はあんまり入らないほうだったんだけど」

「駄目ですよ、口口兄様。しつかり食べないと、女の子のように細いんですから」

「ナナリーに言われるほどじゃないから。僕のほうが身長も、体重も…」

「当たり前です。お兄様なんですから」

妙な自信を示して断言されてしまうと、常からそうしたやりとりに慣れていない口口は黙ってしまうよりほかなかつた。

なんとなく横目でルルーシュのほうに助けを求めたが、ルルーシュはそれに気付いていないフリを装つた。

C.C.は、年少ふたりに見えない場所でそんなルルーシュの足を踏む。

「そうだよなア～、うかうかしていると身長はともかく、体重ではナナリーに抜かされるぞ？」

「もうつじ・じ・さんつ！！」

「本当のことだろ？ 赤くなる前に、休日だからってサボらずリハビリに行って来い。今日なら口口が付き合つてくれるそつだから」「えつ？ でも、せつかくのお休みなのに…なんだか悪いです」

その頃ルルーシュは、踏まれた足を取り戻すのに躍起になつたのだが、ナナリーが期待に満ちた表情で口口に顔を向けているには気付いた。

口口はむしろルルーシュの視線を意識しながら、ナナリーに向かって笑つた。

「だいじょうぶだよ、今日なら特別に予定も入つてないし」

そしてまた一度、チラツとルルーシュに視線を注いだ。

おそらくルルーシュにも一緒に来て欲しいと思っているのだろう。もちろんルルーシュも、誰に言われなくてもそのつもりでいたのだが、いざ口を挟むより先にナナリーがパンツ！ とうれしそうに両手を顔の前で打ち鳴らした。

「うれしい！ それでしたら…ふふつ、今日は口口兄様とふたりつきりでデートですね！」

「はア？」

思わずとつさに不満ありありの声音で言つてしまつたが、そこにまた踵落しが降つてきた。

ルルーシュは声も出せず身悶えながら、こ・こ・の膝の上にギリギリと抗議の爪を立てた。

それにはやつぱり年少ふたりは氣付かずに、あまつさえ口口のほうは真っ赤に顔を染めている。

「…でも兄妹なのにデートなんて…」

「言つんじゃないのか？ 親子だろうが兄弟だろうが、ふたりつきりで出掛けるときにはデートだ。それより食べてしまつたんなら、付き合つてないでいいんだぞ？ 早く出掛けたら、そのぶん後で長く遊べる」

「そうですね！ では、お兄様、お先に失礼します」

笑顔を弾けさせながら言つたナナリーが、クルクルと巧みに車椅子を操つてルルーシュに近づくと、頬の上にキスをひとつ落してさっそく部屋を後にした。

それに比べるとずいぶん気まずそうにすこし遅れて席を立つた口口が無言でルルーシュに視線を注いだが、それを見ているこ・こ・が隣から殺人光線を発しつつ軽く踵を持ち上げているのに気付いて、仕方なくルルーシュは無言で自分の頬をツンツン突いた。

口口は一瞬で真っ赤になりながらも、おずおずとナナリーがしたのと同じようにキスを落した。

「「めんなさ」… それじゃ、お先に…」

気恥ずかしさと、動搖と、喜びと、兄のそばから離れがたい未練を忙しく同時にかもし出しながら、口口はナナリーの後を追いかけてた。

どうやら口口の来るのをテラスの入り口で待っていたらしいナナリーが、なんだかひどくうれしそうに会話を弾ませながら嬌声を上げていた。なんだか兄妹というよりも、姉妹が騒いでいるようなふたりの声が歩みに合わせて次第に遠のいてゆき、廊下に面したドアの閉まるのと同時に辺りには再び静寂が訪れた。

○・○・は何事もなかつた様子で辺りの景色に視線を注ぎながら、無表情に足を組み替えた。

「食べないのか？ セっかく私が作ったのに」

ほかほかと湯気を上げていたオムレツ。香ばしい匂いを辺りに漂わせていたブラウンブレッド。

そのひとつにもルルーシュは手を伸ばさず、漠然と冷めてゆく様子を見守った。

そしてかたわらでは○・○・も、自分用に用意したピザには一切れも手を付けていないのだ。

ルルーシュはそれに答えもしないで、かたわらの新聞に手を伸ばした。

次の瞬間には○・○・にすばやく奪われてしまつたが。

「ああ、元の世界に戻れなくなつてしまつたら困るからな」確認したい部分には既に目を通していた。

新聞に刻印されてある日付は9年前 母が死んだ日だ。

軽く鼻で笑い飛ばしながら、○・○・の表情を流し見る。

「現実にはありえないもてなしで、人を籠絡するのは悪い妖精のようやる手段だ。魔女のおまえらしいがな」

しばらく○・○・もその視線を睨み返していたのだが、やがて忌

々しげに視線を逸らした。

「妖精？……呆れたロマンティストだな」

「おまえにだけは言われたくない。　口口は正式に兄弟なのか？」

そつなく問われて、C・C・はひととを固く唇を結んだ。

けれども、ルルーシュが席を立ちかける気配に気付いて、観念して口を開いた。

「ああ、養子縁組をしてみた。おまえは今アッシュ・シユフォードを卒業していて、向かいの大学に通っている。口口とナナリーはアッシュ・シユフォードで高校生だ。仕方がないから、私は家政婦の真似事をやっている」

「なるほど？　おまえの世界では、家政婦が足蹴で起こすのか？」

「らしいだろう。気に入れよ」

高飛車に決め付けながら、それでも一瞬たりとも視線を寄越そうとしない。

ルルーシュはしばらくのあいだ沈黙を保つて、やがておもむろに問いを発した。

「で？　ナナリーの足は治りそつなのか？」

「おまえ次第だな。なんなら田も治してやってもいい。あれくらいの年齢なら、今からがさぞかし嬉しい人生だろう」

問われながら同意を求めるように視線を向けられたが、今度はルルーシュが顔を逸らした。

すこしトーンダウンさせた声音で問いかける。

「……口口ともずいぶん仲が良さそうに見えたんだが？」

C・C・は軽く笑つて、テーブルの上に片手を突いて頬杖を。

淡く吹き付けてくる風の流れが、C・C・の縁の長い髪をサラサラと揺らしている。

「気に入らないか？　口口はまだずいぶん遠慮をしているがな。どちらかと言えば、ナナリーのほうから積極的に受け入れの態度を示している。元々血の繋がらない兄弟が多かつたんだ。いまさらひとりくらい増えたところで気にもならないのじゃないか？」

ルルーシュはテーブルの上で固く握った自分の拳に視線を注ぎながら静かに呟いた。

「……口口はそれで本当に満足しているのか？」

「ああ。あいつはおまえのそばにいられるなら、どんな満足でもするだろう。もつとも、放つておいても打ち解けるのは時間の問題だと思うがな。なにしろナナリーはおまえと違つて本物だから何を『本物』呼ばわりしているのかとしさに気付いたルルーシュは、射殺すような視線でC・C・Cを睨んだ。

しかし、飄々とした態度を変えないものだから、ルルーシュは言葉の毒を吐き出した。

「で？ どうせ俺の心配をするのなら、別に恋人役でも構わなかつたんじゃないのか？ 相変わらず素直じゃない女だな」

「素直になつたら受け入れてくれるのか？」

ゆっくり身体を起こしながら訊ねると、C・C・Cはルルーシュの瞳に視線を重ねた。

ルルーシュの視線の先に広がるのは、どこかしらアリエスの離宮を思わせる自然に満ちた庭園。

いかにも幸福そうな空間だ。

太陽の明かりが燐然と辺りに満ちている。

小鳥の鳴いている声が聞こえている。

風はあまねく新緑の香りを大気に振りまいて、それを受けて揺れる花々がかぐわしい香りを漂わせている。

それらの光景をじっくり眺めてから、薄い笑みに交えてルルーシュは呟いた。

「懺悔のつもりか？ 僕を中途で置き去りにしたから」

C・C・Cは視線を逸らすことなく答える。

「おまえが受け入れてくれるなら、私は別にそれでもいい。謝罪でも、嘆願でも、何でもいい。おまえにここに居ついて欲しいだけだ」「お断りだ」

ルルーシュは至極冷静に呟くと同時に、頭上に持ち上げた指をぱ

ちつとひとつ鳴らした。

一瞬で、砂が流れ落ちてゆくように消えてしまつ色彩。

数多にあふれていた暖色の風景が一瞬のうちに消え失せて、ただ真つ白なだけの空間にふたりだけが取り残された。

明るいけれども、影も落ちはしない異様な空間。

C.C.は悔しそうな表情でグッと唇を噛み締める。

それを見ながらルルーシュは、場違いなほどやさしく笑った。

「何もおまえが気に病む必要はないんだ。おまえが何をしなくとも、俺はいずれこれとそつくり同じ運命を辿るつもりでいた。時期が早いか、遅いかだけの違いだ」

「……ルルーシュ……」

「それに、おまえが言つたんだろう？ 人には死が訪れるからこそ、生きている自分を実感するんだ。……口口は、死を望んだ気持ちの弱い俺の変わりに死んだ。だから、俺は何があつても生きていなければならない。すくなくとも、もうしばらくのあいだは」

「いいじゃないか、もう、自分のための人生を歩み始めても。ここにはナナリーも口口もいる。必要なら今すぐマリアンヌも呼び寄せるさ。いくらでもおまえが望んでいる幸福がここには用意されているんだつ！ ……だから、お願いだから：ルルーシュ……」
今まであんなに冷静だった女が、人の違つたように激して頬には幾筋もの涙を流している。

それを冷静に見つめ返していたルルーシュは、無言で自分のために苦しむ女の身体を抱き締めると、その耳元にやさしく囁いた。

「……すまない。……でも、もう…決めたことなんだ」

呟くのと同時に、手を持ち上げて指を絡める。

それに気付いたC.C.が慌てた様子でそこに手を伸ばしたが、到達する寸前にルルーシュは指を鳴らした。

暗転。

ルルーシュは、口口の墓の前で目を覚ました。

掘り返したばかりの土の表面は柔らかく、埋めたときの手形がまだいくつも残っていた。

爪の間に小石や土が詰まつて痛んだが、眠つているうちにそれも感じなくなつていた。

小さな木切れや石の破片で切つてしまつた指先の痛みも今は大して感じない。

それよりも、やさしい夢に慰められた心のほうが痛かつた。

「…だろうか？ それともナナリーか？ やっぱり口口なんだろうか？」

誰の仕業かは知らないが、ずいぶん的確に急所を突いてきたものだと皮肉に思つた。

せめて眠つている口口に海を見せてやりたいと思つたから、墓標は海の見える場所に築いた。

白々と輝く月の光を受けて、穏やかなさざなみが淡い明滅を繰り返している。

明るいうちは動くと目立つと思つていたから、夜になつてから移動することに決めたのだ。

まさかにも待つてゐる間に眠つてしまつとは思つていなかつたが。それこそ悪い妖精の仕掛ける甘い罠のように激しい強制力をともなつて、意識が絡め取られたような感覚だけがわずかに残つている。

「…心配するな」

誰に向けるでもなく、やがて小さく呟いた。

ゆづくじ身体を起こして、改めて口口の墓の前に腰を下ろすと、

柔らかな土の表面をやさしく撫ぜる。

「……心配するな。俺は、俺で、いつの世界で今までどおり好きにやってゆく。……俺が自分で始めたことだから……後悔なんかしないわ。」

ナナリーの望んだやさしい世界。

やさやかながらに日常に絶えず笑いが存在していて、家族がそばにいるだけで満足できてしまう。

きっとそんな世界を望んでいたのだろう。

きっとそんな世界を望んでいただけなのだろう。

でも、俺は、

でも、俺が、

たったそれくらいの幸福では満足することができなかつたんだ。もつとおまえにはふさわしい世界があるはずだと思つていた。

俺ならその世界をおまえに譲えてやることができるはずだと信じて疑いもしなかつた。

そして、今もまだ戦う意欲を失くしていない。

おまえがいなくても、俺は、戦うことを見止めるわけにはいかないんだ。

実の父、シャルル・ジ・ブリタニアの息の根を止めてしまつまでは。

「……それとも、ああ…母さんか？　だったら俺に気を回す前に、ナナリーを精一杯褒めてやつてくれ。わがままな兄のおかげで今までずいぶん苦労をかけたからな。俺の気付かないところで、きっと山のように気苦労を背負わしていただはずなのに、文句のひとつも言わずに俺の帰りを信じて待ついてくれたんだ。……それなのに、ずっとそばにいてやると誓つたのに、俺はたつたそれひとつを誓いも守ることができなかつた。だから、今頃ずいぶん怒つているはずだと思つから、なんとかして慰めてやつてくれないか？　ナナリーに嫌われてしまつたら…、俺はもつ…満足に死ぬことすら…できな…ッ」

身体の底からこみ上げてくる感情の高ぶりに、咳いていた唇を慌ててきつく噛み締める。

人並みの幸福を与えてやりたいだけだった。

それなのに、与えた現実がこの代償か。

すべてを失くして足搔いている俺だけがここに居る。

おそらくこれは罰なんだろう。

生きながらにして地獄を、せめて見届けろといつ殺してきた命に対する贖い。

だつたら、死ぬまで甘んじて罰を受け続けるまでだ。

「……だから俺は逃げない……逃げるわけにはいかないんだ。

……ナナリー……ああ見えて口口はけつこう淋しがり屋で、そのクセ甘えべタなほうだから、できれば素直な甘え方でも教えてやつてくれ。……口口、おまえもな、言いたいことがあるなら笑つてるだけじゃなくて、まず思つていてることを口にするといいんだ。ナナリーは口調は穏やかだが、けつこう思つたことをそのまま言ひ。きっとあのまま成長していたら、俺程度では太刀打ちできなくなつていたんじゃないのかな？……まあこれから先はいくらでも話ができるだらうから、まずは手始めに俺の悪口でも始めてみるといい。話題は尽きないだらうと思うから…」

ひとしきりクドクドと言つても返事の返らぬ会話を続けて、最後に一度だけ口口の墓の土をさらつと撫でてから立ち上がる。

森の奥に隠してある蜃気楼に近づくと、月の明かりを受けた装甲が光を宿していく鏡のようにルルーシュの瞳を映した。

まがまがしく赤く輝いているその瞳。

なんとなく先に見せられた夢の中のC・C・の涙を思い出す。

もつともC・C・の身体だけはイカルガに残してしまったわけだから、C・C・がそれを見せたと思つのは單なる思い込みなのかもしれない。

だが、そもそも不思議な力を持つ魔女だったのだから、それくらいのことは他愛のないようにも感じた。

どつちこしろ最後まで魔女らしき意地の張り方に、ルルーシュはすこし笑つた。

「……おまえには……またいすれ、会えるかな?」

現実にはもう一度と、その姿をみると叶わなくとも小さく囁いてからロシクピットに向かつた。

数時間前まで、ロロはこの座席の上で生きていて、自分を守つてくれたのだなと思いながら腰を下ろした。

ルルーシュ以外は唯一ロロが騎乗したナイトメアだ。

ほかにもいろいろ騎乗する機体は選べただろうに、わざわざ乗り慣れない蜃氣楼を選んでくれたロロ……

そう思つた瞬間に、また意識がくらりと遠のく感覚に襲われた。

サラサラサラと水の流れる音を聞いている。

頬に触れる風の温度が冷たくて、さつきとは季節が違うのだなと眠りながら思つた。

風の音、水の音、野鳥のさえずりが先ほどまでと同様で。

ただ、ベッドではなく草の上に身を横たえてくるのを感じた。

全身に降り注いでいる太陽はどこか木漏れ日のようにまばらな感じで、慕わしさを感じながらそっと目を開くと、10センチと離れていない場所から自分を見つめている瞳と目が合つた。

「ロロ……」

寝起きでかすれた声で名前を呼ぶと、ロロはうれしそうに顔中をくしゃくしゃにして笑つた。

何がそんなにうれしいのだろうかと不思議に思いながら、なんと

なくその笑顔を見つめていた。

気付いたときには、また蜃氣楼のコックピットに戻っていた。全身に突き抜けてゆく感情のマグマ兄であつたこと 자체が最初から嘘で、ナナリーの代わりに宛がわれた偽りの弟。

それに気付いて以来、ルルーシュは口々の存在を憎んでいた。愛したことなど一度どこるか、一瞬もない。本気で何度も殺してやろうと思つていた。

シャーリーを殺されて以来は特にひどくて、「兄さん」と呼びかけてくる馴れ馴れしさすらも汚らわしいと思つていた。

なのに今日までずっと生き長らえてきた所以は、本当に単に、事が上手く運ばなくて失敗しただけだ。

それでもなお、最後の瞬間まで自分の弟でありたいと望んでくれた口々の心意気に免じて、せめて贖罪のつもりで兄の演技を続けていた。

結局、出会いから別れまでもが全部嘘だったのだ。

だったら、最後まで嘘を貫き通すべきだと思つた。

悲しいと、いまさらのように思つていい自分の本心などには従つてはいけないと思つていた。

どこまで都合の良さげる男だ。自分の感情にばかり素直に従つのか？

失くしてからばかり後悔するのか？

何度同じ真似をすれば気が済むつもりだ？

それでも、全身に突き抜けてゆく感情のマグマ

唇を強く噛み締めるあまりに、鉄の味が強く香った。

両手のひらに爪を食い込ませるほどに強く握っている。

それでもバタバタと足の上に降り注いでゆく涙が止まらない。

「……ツツツツ！」

助けてくれ、ナナリー……

俺はどうしてやるのが正解だったんだ？

おまえにも、口口にも……。

それとも、最初から何もしないでおくべきだったのか？

そんなことすら結論を出せないでいるような今の俺を、むやみに甘やかさないでくれ。

そんなに簡単に許したりなんかしないでくれ。

俺はもつと責められるべきなんだ。自分の犯した罪をもつと正面から受け止めるべきなんだ。

これから先、残りの人生で、せめて懸命に贖うべきなんだ。

「……聞こえているかツ、シ・シ・ツ……だからこれ以上余計な真似はするなツ！ ビツセ俺にはもう……ツツ

死んでも一度とは会えない相手だ。

ナナリーにも、口口にも、……そして母にも。

父王、シャルル・ジ・ブリタニア

あいつだけは必ず俺が、地獄に引きずり落してやる。
決して一度と、おまえたちの元には送りはしない。
だから死んだ先でぐらいは安心している。
この命に代えてでも、必ず俺が。

涙を消した両の目にギアスの紋章を宿して、ルルーシュが激しく空を睨んだ。

[ende]

TURN 21・125 「熱砂の薔薇（前編）」（前書き）

ルルーシュ×C.C.を前提とした、スザク×C.C.的な表現が含まれます。苦手な方は要注意。

「頼まれてくれないか？ 枢木スザク」

神聖ブリタニア帝国・帝都ペンドラゴン。

ブリタニア皇族の根城とも言えるその皇宮で生活を始めてから早いもので数週間が経過しようとしていた。

さすがに世界の半分を牛耳る超大国にふさわしく、豪奢な皇宮のどこもかしこもが常にキラキラと磨き立てられている。

働いている人の数も尋常でない人数で、この場所だけでも一日のうちにどれくらいの経費が費やされているのだろうか。それを考へるたびにちょっと意識が遠のくような途方の無さを感じる。

それでも数多の変遷を経ている男にふさわしく、新しい環境にもすっかり慣れた様子で過ぎてしている枢木スザクは最近新調したばかりの執務服の脇の部分に大量の文書を挟みながら直線的な回廊を闊歩していた。

その間にも取り急ぎ用を通す必要のある書類の確認を進めていたのだが、ある部屋の前を通り過ぎたところでその背中を呼び止められたのである。

ひどく霸氣のないその聲音は、この数週間のうちに集中して聞き慣れたものだつた。ひょっとするとこの帝都ペンドラゴンで自分が一番に耳にしているかもしれない女性の声。

本音を言つと、少々うんざりしつつあるスザクは、既に3メートルほど開いていた距離を埋めるために急ぎ足で部屋の前に戻ると、開け放しのドアの内側を覗いた。わざわざそうする必要があつたのは、声をかけてきた張本人が部屋から顔も出していないせいだった。

「なんだい、Ｃ・Ｃ・？ 今ちょっと忙しいんだけど

決して部屋に招かれたわけではなかつたから、無粋にならない程度に視線を走らせて C . C . の姿を捜した。

そこは皇宮に訪れた客人を待たせるときに使用している控え室で、大きく窓を取られた部屋の中心には意匠を凝らした庭園をゆつたり眺めていられるようにソファがずらりと据えてある。

部屋の要所にふんだんに飾られている生花はもちろん日替わりで用意されているもので、季節を先取りした華麗な花々が慎み深く甘い香りを漂わせていた。

この数週間というものとにかく職務に忙殺されている毎日だから、なんだかその空間だけすいぶんとおだやかな雰囲気に満たされていいるようだ。

それでなくとも疲労を色濃く感じていたスザクだったから、もういつのことしばらくソファにでも腰を落ち着けて身体を休めるのも悪くはないかと考えた。

もてなし用のテーブルには清潔なクロスの上に花器を飾つてあるだけで菓子のひとつも置いてはなかつたが、帝国唯一の騎士ナイトオブゼロを拝命している今のスザクだったら、適當な誰かにひと声かければ好きなだけ贅沢な食事を愉しむこともできるのだ。

だが肝心の C . C . は窓際のソファには見向きもしないで、わざわざ入り口に面した壁際に椅子を置き、膝を抱えて背中を丸めて座つていた。

異様に椅子の高さが低いのは、本来は足を置くためのフットスツールなんかに腰を下ろしているせいだ。

まるきり床の上に座り込んでいるような格好で、伏し目がちに自分の足元に視線を落としている。

スザクはその様子をしばらく眺めると、おもむろに氣の抜けたような息を吐き出した。

本当に忙しいのは事実だが、それを理由にここに適当に C . C . を振り切らうものなら、後で必ず自分が後悔するのがわかつていて。そんなことに時間を浪費するくらいなら、ここで数分付き合つてや

るほうが懸命だ。だつたら素直にスザクの休憩に付き合つてくれれば良いのだが、どうみてもそれが許されるような雰囲気ではなかつたので、仕方なく溜息ひとつで未練を振り切ると、何も言わずにC・の足元付近にどっかり腰を下ろした。

部屋の前を行過ぎる別の執務官の視線が気になつたが、中から確認した限りでは意図的に覗き込みでもしなければ目に入らないような場所だった。念のため視界の端では常にその方向に注意を向けながら、手早く用件を片付けるために自分のほうから切り出した。

「なんだい？ 僕にできることなら聞いてあげるよ。と言つよりも、聞くまでもないような気がしているんだけどね」

変声期はどうの間に過ぎてゐるのだが、ほのかに少年の声の甘やかさを残しながら成人男性にふさわしい穏やかさを心掛けているスザクの話法は、特に女性事務官のあいだで紳士的と評判が高かつた。本人には別段フェミニストを気取るつもりはないのだが、名譽ブリタニア人としてブリタニア軍に入軍して以来「とりあえず女性の話には耳を傾ける」というのが自然身についてしまった処世術だった。もちろん、聞いた話を叶えてやるのはまた別の話だが、それでも人の話を口クに聞きもしないブリタニア貴族たちに比べたら、放つておいても好感度が上がってしまうのは至極当然のことだった。

そして、その物腰の柔らかさを最近とみに独立しつつある。

小さく丸めている身体に着ているのはスザクと初めて会った時に
も着ていたブリタニアの拘束衣だった。

アーカーシャの剣にいた時の元気な小学生のような格好に比べたら、たつぱり幅の広い面積で全身を包み隠しているのだが、華奢な印象は少しも変わらず記憶にあるよりもずっと細い感じがした。過去に何度か対面したときの印象では、今よりずっとたくましいような感じがしていたのに、あれはきっと意識的な部分で圧倒されたのだなど今更のように考へる。

位置的にC・C・のほうがスザクを見下ろしているはずなのに、

なんだか自分のほうが足元に見下ろしているみたいだなとスザクは思った。

「……別にそこまで大仰に構えてもらう必要はない。頼まれていた資料が完成したから、それを渡したいだけだから」

以前と比べれば別人のようにボソボソと不明瞭な聲音でそう言って、目線で促した書類はC・C・のすぐ隣にある本来の椅子の座席部分に乗せてある。

もちろんこの部屋に足を踏み入れた瞬間からその資料の存在にも、表紙に書かれたタイトルにもスザクは気付いていたのだが、あえてすぐには手を伸ばさずに逸らしていた視線をC・C・の元に戻した。「ありがとう、助かるよ。きみの知識じやないと作成できない資料だからね。でも、これを作れと頼んだのはルルーシュなんだから、彼に直接渡してくれたらいいのに」

C・C・はそれには答えず、また伏し目がちに視線を落とした。スザクは内心思わずルルーシュに対する恨み言を十ほど瞬間的に吐き出した。

「気持ちはわからぬくないけどね、でもきみのほうから避けてる限りルルーシュは絶対に心を開きはしないよ？」

C・C・の視線がさらにひときわ下方に落ちてゆく。

「…………知ったようなことを」

「当然じゃないか、伊達に長い付き合いじゃないからね。だからと言つて今の僕たちは、以前のような友好関係に戻つたわけでもない。きみにも話したと思うけど」

ナナリーを助けるために一度は実を結びかけたふたりの譲歩を、第一皇子シユナナイゼルの仕組んだ奸計が断ち切つた。

結果ルルーシュはナナリーを失い、黒の騎士団からも放逐され、しがらみをすべて無くしたルルーシュは、むしろ当初の計画通り父王シャルルの打倒に専念することで目的を完遂することが適つた。その後に積極的に玉座を勧めたのがスザクだつた。

コーエミアを殺された恨みのあるスザクは、あくまでエリアー

ーを日本に戻すための手段として、第99代ブリタニア皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの騎士ナイトオブゼロの称号を手に入れた。奇跡を起こすゼロとして、今まで吐いてきた数多の嘘を現実にしてみせるとあのときスザクは強要した。

いささか形は違つてしまつたが、その約束をルルーシュに実行させるために身近で見張つているようなものである。

「だから誰より一番長くそばで過ごしているからって、きみが妬くようなことは何もないんだ。表面上おだやかに見えるだけ、かえつて気持ち的には殺伐としたものなんだし。だからと言つて彼の命は、僕が命に代えても必ず守つてみせるわけだけど」

しかし、それすら目的を遂行させるために必要だから行つているだけだ。

今現在のふたりが最優先の目標に掲げているのは、奪つてきた命に対する贖罪。

ルルーシュはブリタニアを打倒する目的で、あまりに多くの命を犠牲にした。

だが、その点に関しては、今ではスザクも似たようなものだった。スザクの放つた一発のフレイア弾頭。当初は1,000万人超と発表していた死者数は、その後の負傷者と行方不明者数の大半がそのまま移行して、現在では3,000万を超えるとも予測された。

唯一の慰めは、死滅したはずのトウキョウがわずか1ヶ月の間に復興開始できたことぐらいだが、それすら皮肉な結果に違いはない。たとえば大型の地震や台風だったら、復興の前に必ず瓦礫の撤去作業が必要になってしまつわけだが、今回の一件ではフレイアのコラプス効果により一時制圧圏内に含まれる物質は完全に消滅してしまつたから、最初からサラ地に復興工事を進めているようなものだつた。

先ほどスザクが目を通していた資料の中でも、かなりシビアに見積もつていたはずの工期が最低でも3割は削減可能なスピードで作

業が進められているとの報告がされていた。

ルルーシュが皇帝に即位すると同時に、エリアーは元の『日本』として解放されていたから、今はまだ国中が喧騒に包まれている状態ではあつたが、ルルーシュの立てた計画に従つて内政の復興を進めれば早晚この国には恒久的な平和が訪れるはずだつた。

そこに、今では私怨の集団と化して反旗を翻しているのが黒の騎士団だつた。

日本の解放を行動の基盤に置いていたはずだから、今となつては存在自体が意味をなくしてゐるはずだが、ゼロとして自分たちを騙し続けてきた現皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの命を奪うまでは、どうあつても收まりが付かなくなつてしまつてゐるのだ。

そして、第一皇子シユナイゼルも。

彼もまたルルーシュの統治する神聖ブリタニア帝国に離別を果たして、対決の姿勢をとり続けている。

だから日本を解放した後もふたりは容易に目的を見失つてしまつわけにはいかなかつた。

本当の意味で恒久的な平和を手にするためには、なんとしてでもこれらの双璧を打ち崩してしまわねばならないわけだから。

「だから本音を言つたら、いつまでも意味の無い意地を張り続けていいないで、きみにもルルーシュの補佐役を努めてもらえたならありがたいわけなんだけど。気持ちの整理が必要なのはわかってるつもりだから、なるべくならあんまり口を挟みたくは無いんだけど、でも悠長に構えてられる時期でもないんでね。きみが割り切るためにあとどれくらいの時間が必要かい？」

もう何度目になるのかはわからない。それくらいスザクがここ最近頻繁に口にしている促がしだつた。

Ｃ・Ｃ・はやはりいつものように少しも気持ちを動かしはしないで、ただじつと心の内だけに沈んでいる。

だが、Ｃ・Ｃ・がそうしてしまつにも理由は存在していた。

アーカーシャの剣から移動する前からルルーシュとスザクの間で

始められた話し合いは、それまでの離別の期間を取り戻すかのように熱心に時間をかけて��けられていた。

その際ルルーシュの独断で帝都ペンドラゴンに移動してからは対面上C・C・は虜囚扱いが決まっていたから、それをわかりやすく意味する拘束衣を用意して、ルルーシュは自らC・C・に手渡した。

C・C・は無言でルルーシュの意に従つた。

以後、用のあるときはルルーシュのほうから接触を図つてくるのだが必要最低限の言葉を交わすだけで、今後の動向を訊ねることもしなければ、解放することもしなかつた。言つてみれば生殺しの状態だ。

「……まあ、今はまだ利用価値があるからな。なにしろ私は唯一残されたギアス関係者だ」

ルルーシュが皇帝に即位してまず先に行動を起こしたのは、ギアス教団残党の完全駆逐だった。

▽・▽・と教団関係者の残した資料は元より、組織の末端要員に至るまで徹底して地上からギアスに関する情報を抹殺してしまったのだ。

「用が済んだら私も始末するつもりでいるのだろう。そんな女が必要以上にそばに寄るのは不快なだけさ。……だから待つていいしかないだろう……私には」

近い将来ルルーシュがこの身を永遠に葬り去ってくれる日の到来を。

スザクは無言でC・C・の姿を目に収めていたのだが、ふいに片手をC・C・の長く綺麗な緑の髪の先端に絡めると、それを弄びながら囁くように呟いた。

「……やっぱり、きみと僕は似てなんかいないよ」

C・C・はハツとした様子でスザクに視線を投げかける。

それはアーカーシャの剣の前でも言われたセリフだった。

今まで何の目的でルルーシュのそばに居続けたのかと問われたので、利用していたのだとC・C・は答えた。自分自身の『死』とい

う果実を得るために、ルルーシュがその力を手にするまで待つていたに過ぎないと。

そしたら、どうやらそれがスザクの意には沿わなかつたようであ、そのときも「似てない」と言われた。

そして、また一度その言葉を繰り返しているスザクは、ゆっくり指先にC・C・の髪を巻きつけながら続けた。

「むしろ、きみはルルーシュに似てるんじゃないのかな?」

「ルルーシュに? バカな、それだけはあり得ないよ」

「そうかな?」

「決まってる。あいつほど前向きに生きることに執着している人間はない」

「本当にそうかな? きみには今のルルーシュが『生きてる』ように見えるのかい?」

「え…?」

スザクの指先に巻きつけられてゆく髪の束がちょっとした団子状態になつてゆく。

限界に達したところでぱらりと一気に解けてしまつたので、スザクは何食わぬ表情でふたたびイチからC・C・の髪の束を指先に巻きつけ始めた。

「人はなぜ嘘をつくのか? それは何かと争つためだけじゃない、何かを求めるからだ。 覚えるかい? ルルーシュがアーカーシャの剣で皇帝に言ったセリフだ。彼にはその思いがあるからこそ、今もまだ自分の本心を偽装して、望みもしない人生を生きる覚悟を決めている。そして僕もまた彼にそれを強要した。ルルーシュは僕に対して負い目があるから、決してそれを裏切れない。それがわかっているからこそ、僕も彼の騎士なんて道化役を引き受けることにしたんだ」

「……すいぶんだな」

「本心だよ。僕はナナリーを殺した。たとえルルーシュのギアスに従つただけの結果でも、僕のこの指先がフレイアの発射ボタンを押

した事実に変わりはない。でもルルーシュは、ナナリーを含めた3,000万人分の贖罪まで全部ひとりで抱える覚悟を決めている。これが道化でなくって何ていうんだ?」

いつしか弄んでいた指の動きを止めて拳をギュッと握ったが、その際C.C.の髪も引き連れていつたので、痛みにC.C.は軽く眉をひそめる。

当然スザクもそれに気付いていたのだが、なぜだかそれを離しもしないで二ヶコリ人の良い表情で笑つた。

「でもそんな彼だからこそ他人の嘘にも寛容にならざるを得ない。何かの結果を得るために吐いた嘘なら、彼には責められないんだよ、C.C.」

言つて手の力を緩めると、しなやかなC.C.の縁の髪が水を得た魚のように勢いよく空に踊つた。

スザクの手元に抜け落ちた数本の髪の毛を無感動に払いのけながら、当然のようににC.C.の髪に指を絡めた。

「始めてのうちはルルーシュに嘘をついたことを悔いでいるのかと思つたけど、どうやらきみは戸惑つてているみたいだね。計画では嘘がバレた後には自分は死んでいるはずだったから、予定が狂つた?」

「……関係ないだろう、おまえには」

「そうだね。でもルルーシュが関係していることだからあまりに悪気なく言われる言葉の連續に、むしろC.C.のほう

が返す言葉を失つた。

こんな場合にC.C.はこの相手のことがすこし怖くなる。ルルーシュが同じような表情をした場合なら、『また口クでもないことを考えているのだな』と放つておけるのに、スザクの場合は本当に何を考えているのか掴めない場合が多いので、人心を扱うのに慣れているつもりのC.C.でも時折底の知れない恐怖を感じた。

C.C.は無造作に頭を振つて自分の髪を取り戻すと、わずかに動搖している自分を誤魔化すために意味もなく拘束衣の足元の金具に手を伸ばした。

「……憎んでいたくせに」

「ちがうよ、僕は今でもルルーシュを許した覚えはない。許そうとする努力を始めただけだ」

許せないことなんて無いよ、それはきっとスザクくんが許したことないだけ。

シャーリーが死ぬ前に残してくれたその言葉。

その言葉があつたからこそ、とりあえず無理は承知で、もう一度だけルルーシュを認めてみようと思った。そのために必要な努力をまず始めてみようと思った。だから決してまだ許したわけではない。ルルーシュの本気を誰より間近で観察しながら、自分の心に問い合わせかけ続けている。この男を信じても本当にだいじょうぶなのかと。そうするうちに、気が付いてみれば1ヶ月が経過していたわけだが、いまだにはっきりした確証は得られていない。

Ｃ・Ｃ・の手元からチャリチャリと金具を弄る音が響いていて、絶え間なくスザクの意識を刺激している。

「まあ、そういうわけだから。とにかくルルーシュの得にもならない態度は止めてくれ。と言うのが本心で、騎士としての表向きには、きみもそろそろ政務に精を出してくださいってところかな。ここのこところずっとルルーシュも満足に眠る時間がないくらい忙しくしているのは事実だし」

先王シャルルが『ラグナレクの接続』だけに一心を傾けていたおかげで、それまでのブリタニアでは皇帝の政務は事実上あつてないようなものだった。

その爛れた状況を立て直すのがルルーシュに課された重責のひとつでもあつたので、どれだけ眠る時間を削っても追いつかないような状況が連日連夜続けられているのだ。

しかし、だからと言って口々に話もできないでいる今の自分にいつたい何をしてやることができるのか。

とつさに何も言い返すことができなかつたので、興味も無いのに「忙しいのはおまえも同じはずだらう?」とスザクの近況に話を振つたがヤブヘビだった。

「おかげさまで」

スザクは付き合いの良い表情で軽く微笑んでから、

「誰かさんがつるさく構えと甘えてくるからね」と続けた。

少なからずその自覚のあつたC・C・は視線を逸らしながら、ほんのり頬の上に赤みを加えた。

「……別に、私は……いつもおまえが勝手に長居をしているだけだ。資料を渡したいだけなんだから、早く持つて行けばいいだらう」

「冗談だよ」

そしてまた悪気なく言つて微笑んでみせるのだ。

こんなところがルルーシュには決して無いところだつたから、いまいちスザクのテンポに慣れかねているC・C・は戸惑つてしまつた。物腰の柔らかなスザクの口調に流されてルルーシュと過ごしていた頃のように突つ張り通すこともできないから、時々どうしていいのかわからなくなつてしまつ。

仕方なく、また足元の金具を指で弾いてちゃらりと鳴らした。スザクはそれを見てもまだクスクス笑つてゐる。

「お世辞にしろ心配してくれてうれしいよ。でも、あいにく僕とルルーシュでは基礎体力がちがうから。言つても聞かないのはわかっているし、その他大勢には立場上口を挟むことができないけどね、あの調子では早晚ルルーシュが倒れるこじへらい、こじへいる人間なら誰でも知つてるよ」

「わかつてゐるなら言つてやれよ。おまえはあいつの騎士なんだろう?」

「騎士はあくまで補佐を勤める立場にあるのであって、彼の健康管理まで任されてるわけじゃない」

まっすぐにC・C・の瞳を捕らえて見つめ返しながら、スザクは暗にC・C・にその役割を促した。

あの鈍感なルルーシュの友人だつたとは信じられないくらいにスザクはそういう方面への観察力が優れているから、C・C・Cがひたすら隠し続けている気持ちにも簡単に気付いてしまったのだ。

だからなおさら対処法に困ってしまう場合も多くて、らしくもなC・C・Cは極端に口数が減つてしまつ。

言われなくてもルルーシュの心配をしているのは当然だ。でも、いつたいどうすれば、この胸元に突きつけられている断罪の剣の切つ先を忘れていられるのだろう?

現実を見る事もなく、高みに立つて俺たちを愉しげに觀察
し　ふざけるなッ!!

あの言葉は、シャルルとマリアンヌに向けて放たれた言葉なのであつて、C・C・Cに対しても言われた言葉ではない。

だが、C・C・Cの気持ち的には同じことだった。ルルーシュが行動を起こす前から自分はすべてのカラクリを知っていた。にもかかわらず、それら一切を隠してルルーシュを暗黒の道行きにへと案内し続けていたわけだから。

そして、スザクの指摘したように、その断罪の剣が振り下ろされる瞬間には、自分は既に死んでいるはずだった。

今いる状況をまったく想定していなかつたものだから、正直この先どうしていいのかわからない。

生殺しの状態はたしかに辛かつたが、しかし、魔女として生きながらに身体を焼かれる苦痛に比べたら、やつぱり甘いなとルルーシュの相変わらずの詰めの甘さに苦笑する零れる。

特に表情を動かしもしないで、それをじっと眺めていたスザクは、やがて呆れたように肩を落とした。

「こう言つては何だけど、けつこうきみも面倒臭い人だよね?　僕はルルーシュの世話を焼くので慣れてるからいいけど」「だから似てないと言つているだろう?　しつこいぞ」

「ほら、そういうところが本当に良く似てる」

言つて、スザクは何を思つたか、ふたたびC・C・の髪に指を絡めてそれを軽く手前に引き寄せた。

ただし、先よりも少々容赦のない感じで、思わず引かれるままにC・C・も上体を前に傾けてしまったのだが、危うくキスされそうになり慌ててスザクの肩を押し返した。

「何をするッ？」

かなり乱暴に突き飛ばしたつもりだが、ルルーシュとは比べものにならないくらい厚みのある胸板はC・C・が押した程度ではビクともしなかった。平然とした様子で険を含んだC・C・の表情を見上げてくる。

「ちがつた？　てっきりこいつやって慰めて欲しいのかと思つて」「だれが…ッ」

「うん、ルルーシュだつたらまず間違いなくそう言つね。でも、たいていの男はいくらでも自分に都合良く誤解しちゃうよ。ただでさえ可愛くて魅力のある女性なんだ。そんなきみが弱つているのは一目瞭然なんだから、男なら誰だって親切ごかしにかこつけて、ちょっと遊んでみたくなるんじゃないのかな？　その気がないなら、もう少しシャンとしていたほうが身のためだ」

本当にどうしてこんな男がルルーシュの友人でいられたのかと不思議に思う。

C・C・のほうこそルルーシュの鈍感ぶりに慣らされているうちには感情の抑制が効かなくなつていてことに気付いた。自分ではいつも変わりなく冷静でいるつもりなのだが、ルルーシュが関係してしまうと以前のように冷徹には徹しきれない。きっとスザクの目から見る限り、今の自分は心の弱さが駄々漏れになつてしまつているのだろう。

だつたらいつそスザクとの関係を断ち切つてしまえば良いのだが、それができずにいるのはどこにも居場所が無いからだ。

今の状況でルルーシュの元に舞い戻ればこうなるのがわかつてい

たから、シャルルにコードを渡さないためにも魔女としての自分をCの世界に封印した。

しかし結果的に強引なマリアンヌの要求に抗えなかつたものだから、いまさら気鬱に塞いでCの世界に逃げ出すこともできない状況に追い詰められてしまつてゐる。

決してスザクの言うような行為を求めているつもりはなかつたが、明らかに身の置き所をなくしてゐるのも事実だつたのだ。

そんな本心をあつさりこの男なんかに見透かされ、C.C.は居たたまれない気持ちで唇をギュッと噛み締めた。

ふたりが同時に黙つてしまつと、嫌でも外の喧騒が窓の外から漏れてくる。

皇宮の外にも中にも人の往来は頻繁で、特にここ最近は一気に人口密度が増していた。

この皇宮を中心に世界中が喧騒に包まれてゐるわけだつたから当然のように思えたが、それでも落ち着かないことに変わりはない。だが、ルルーシュにしろ、このスザクにしろ、必要に迫られて勤しんでいたことだつた。

今まであまりに多くの人命を奪つてきたふたりだが、これら先もふたりが働くなければそれ以上に莫大な人命が犠牲になつてしまつのだ。だから口クロク死んだ人間にに対する後悔を抱えている暇もなく、今現在生きている人々のために心血を注ぎ続けている。自分の居場所が見付けられないなどと私事にかまけている自分とは根本的に違うのだ。

さすがのC.C.も次第にスザクを引き止めているのが申し訳ないような気持ちになつてきて、「もう本当に行つてくれ」と追い返そうとした時だつた。

人の往来の絶えなかつた部屋の外からひとりわ颯爽と歩く人の靴音が近づいてくるのに気付いて、ハツとしたC.C.はとつさに扉のほうを窺つた。

その瞬間、あつという間にスザクの腕の中に抱き込まれ、C.C.

は口クに抗つことも、声を出すこともできずにつ、ただスザクの成すがままにその身を空中に踊らせた。

「おー、C・C・？ 先日依頼した資…ツ？！」

もちろん事前に察していたとおり部屋に入ってきたのはルルーシュで、C・C・を抱き込むスザクの背中を田にするなり声をなくしてその場に立ち尽くした。

スザクは床の上に膝立ちする格好で胸元に抱え込んだC・C・の口元を片手で押さえ付けていた。その上から傾けた自分の顔を重ねているわけだったが、ルルーシュの位置からは見えないのは計算の上だった。

スザクは何度も角度を変えながら自分の手の甲に口接けて、いかにもそれらしく時折チュツチュと舌を鳴らした。

身動きのできないでいるC・C・は、どうにかして企みを阻止しようつと背中に回した腕で必死にもがいたが、かえつて信憑性を高めてしまつたことに気付いたのはそれから間もなくのことだった。

「…ツ…！」

ルルーシュがかすかに舌打ちを残して、何も言わずにそのまま部屋から出て行つてしまつたので。

たしかにルルーシュの位置からは、闖入者にも気付かずに激しいキスを交わしているようにしか見えなかつただろう。

スザクはC・C・の抵抗を容易に受け流しながら決して腕の中から離さず、ルルーシュの足音が完全に消えるのを見届けてから、ようやくC・C・を離した。

「…おまえは…ツ…！」

解放されると同時にC・C・はためらいなく平手打ちをお見舞いしたのだが、それを受け止めてくれるほどスザクは甘い性格をしていなかつた。

最小限の動きで難なくかわして、かえつて申し訳ないような表情でC・C・の顔を見る。

「いい機会だと思つけど。あれで何も言つてこないよつなら、早めに見限つたほうがきみのためだ。結局あいつは自分が一番可愛い男なんだから」

「そんなことッ……いまさらッ！」

叫ぶと同時にC・C・は身体を起こすと見せかけて、スザクの横腹に鋭く曲げた膝を突き入れた。

見るからに非力でしとやかそうにも見えるC・C・が、まさかそんな攻撃を仕掛けてくるとは思つてなかつたから、完全に油断していたスザクは見事に膝蹴りを食らつてしまつ。

「く…ッ」

とはいえて軽く呻いただけで、後はようめきもしなかつたが。

そんなスザクには構わずに、とっさにC・C・はルルーシュの後を追うために部屋から駆け出して

結局そのまま止めてしまつた。

追いかけてどうするというのだ？　自分はあいつをずっと騙していたのに。

ルルーシュの望みを叶えてやると見せかけて、自分の望みを叶えるためにずっと騙し続けてきた。

マリアンヌ殺害の真実を知つたのはまだ最近のことだつたが、それでもルルーシュが知るよりずっと以前に自分はその真実にたどり着いていたのだ。ルルーシュが人生を投げ出してまでずっと追い続けていた真実に。

だが、それを教えてしまうとルルーシュは自分を殺すための条件から遠ざかってしまうから。

だから、隠した。

ルルーシュの行動の源になつてゐる父親に対する憎しみ。けれども、それは愛し慕つていたからこそだ。「どうして母を助けなかつた？」と問い合わせ続ける一方で、あんなふうに自分を利用していふことは最後の最後まで予測すらしていなかつた。

絶望の温度が高じただけの一律背反。いつだつて憎悪と愛情は表

裏一体に存在している。その事実をC・C・は知っていた。シャルルの目的を誰より詳しく把握していた。

ルルーシュが母マリアンヌに対して抱いていた思慕の情と激しい憧憬。

そこにマリアンヌの気持ちは決して同じ温度で寄り添っていないことを知っていた。

ナナリーも、どうして自由を失ってしまったのかC・C・は知っていたのだ。

だが、すべてを知つていながらC・C・も自分の欲、『死にたい』欲求に逆らうことができずについた。

その欲を満たすために結局はシャルルたちの元から去り、未然に計画を防ぐ努力もしないで、自分はただ楽な方向に逃げ出しただけだった。

そしてまたルルーシュの行動も、決して止めようとはしなかった。彼が流している数多の人の鮮血がすべて無駄であることを、流す必要のない悪であることを知っていた。にも関わらず、ルルーシュの手元からすべてのカードを奪い去り、彼の人生からすべての希望を奪い尽くしてしまったのはC・C・だったのだ。

そんな自分に

いまさら何が言えるというのだ？

「ここまで来ても、やつぱり追いかけられないのかい？　この1ヶ月ずっとだよ、きみだけが過去にずっと踏み止まつたまま『いる』長い回廊の果てにルルーシュの背中が消えてしまつまで、その場にたたずんだまま見送つて。

悄然と肩を落としながら振り向いた先にはスザクが立つていた。当然のような仕草でC・C・の肩に腕を回して、C・C・の細い身体をその胸元に抱き込んだ。

主にメイドや女官などではあつたが回廊を歩む人の姿は絶えず、見る者の目があるにもかかわらずC・C・の頭に添えた手のひらで自分の胸元にそれを押し付けた。

抵抗の意思すら全部なくしてしまっていたC . C . は、ただされるままにスザクの腕の中にその瘦身を預けていた。

「…………やさしくするな。…私には…そんな気持ちを受け取る価値も…資格もないんだ」

水分を失つてカラカラに乾いてしまつている細い声が、泣く力すら失つて回廊の床に頬りなく落ちてゆく。

「だつたら、俺に命令する権利もないはずだ」

対してスザクの聲音は力強い。C . C . を風に例えるならば、まるきり大樹の中から響いてくるような声だった。断固とした決意を宿した声だった。

「俺は今でもユフィイの騎士だ。身も心も本当はユフィイだけに捧げる。でも、ユフィイはまた…俺が過去に縋り付くばかりで何もせず、じつと立ち止まっていることを望んでいなかつた。どんな場所でも構わないから、自分の目指す方向に歩み続けることだけを最後の瞬間までずっと望んでくれたんだ。だから、きみが僕を必要としているなら、きみにひととき優しくしてやることぐらい今の僕には造作も無いことだ。選ぶのはきみ自身の意思だけどね。

さあ、きみは僕とルルーシュどどちらの優しさを必要としているんだい？」

悪魔の声。

なぜならC . C . は、ルルーシュの手元に優しさなんて欠片も残つてないことを知つていて。

彼の生き血を啜るようにして、自分が最後の一滴まで奪い尽くしてしまつたわけだから。

だから選択肢など…最初からひとつしか存在していないのだ。

「…………おまえでいい」

C . C . は自分のほうからもスザクの胸元に手を添えると、たくましい胸の筋肉に頬を押し付けながら呟いた。

スザクの声の響きは微塵も変わらない。

「後悔だけはさせないよ」

指先がC・C・Cの頬を撫ぜ、C・C・Cの顔の大半を覆つても余つてしまふ手のひらが優しい仕草でそれを仰向けた。

唇に、スザクのそれが落ちてくるのを知つていても、C・C・Cはそのまま動きはしなかつた。

〔 end e 〕

TURN 21・125 「熱砂の薔薇（後編）」 [R - 15] (前書き)

ルルーシュ×C.C.を前提とした、スザク×C.C.的な表現が含まれます。苦手な方は要注意。

「遅くなるけど、待つてくれるなら僕の部屋のマスターキーを渡しておくれど」

「どうする？」と問われて、自分はそれを受け取ってしまったわけだから、どう考へてもそうなることはわかつていたはずだった。魔女として過ごしてきた数百年、相手から求められることのほうが圧倒的に多かつたが、それでもあえて自分のほうからも人肌を求めて誘つたことならある。

人の心の何が反応するのか知らないが、そうした行為は確かにひととき忘れないことを忘れさせてくれる浄化作用のあることを経験したこと・C・は知っていたのだ。

だが、唯一想定外だったのは、榎木スザクという男の本質と、彼が何を求めていたかの真実

「あ、気が付いた？」

自分が氣絶していたことに気付いたのは、ひたいや頬の部分に触れてくる手のひらの温もりを感じたせいだった。

一瞬、どうしてズザクが枕元から覗き込んでいるのか理解できずにギョッとして、とつさに声が出なくてその原因を思い出し、自覚した途端にドツと襲いくる疲労に任せて思わずカツとした。

全身に激しい緊張を強いられ続けた影響が至るところに残つて、常にはない姿勢をとられた内腿が身体を伸ばしているのに巻つていて、腰といわば身体全体が筋肉疲労にぐつたり重みを増していた。

それより切実だったのが喉の渴きで、さんざん良いように鳴かされてしまつた後遺症で黙つっていても喉の全体が痛痒いようにひり付いた。

返す刀で激しくスザクを睨んだら、そこから何を読み取ったのか
スザクは機敏に頷いて、C.C.に見えない場所で何かをして、ま
た顔の上に屈んでくるとキスをした。

押し当てられた唇の隙間に舌の先がねじ込まれてくるのと同時に、
ほどよく冷えている水が流し込まれてくる。

喉が渴いているのは事実だったが、あまりに手馴れた一方的なや
り方に一瞬殴つてやりたいほどの怒りを感じたが、仰向けに横たわ
っている状態のそれでは危うく溺れてしまいかねない。仕方なくこ
くりとそのまま瞼下したのだが、とっさに飲み込み切れなかつた水
が唇の端からツウと伝い落ちてゆき、枕元のシーツを濡らした。

ほんの一瞬だとばかり思つていた経過時間を裏切るようにして、
肌に触れているシーツはどこも乾いている感触で、口元から滴つた
水分も枕元のシーツが一瞬で吸い込んでしまつっていた。おそらく意
識を飛ばしている間に新しくシーツを張り替えたのだろう。

意識が冴えてくるのと同時に、身体のほうにも残つてるのは倦
怠感だけで、どこにも濡れた感触がないのに気付いた。明らかに汗
も残滓もすっかり拭われている様子だ。

意識を飛ばしている最中にまで好きなように身体を扱われたのか
と思つたら、なおさら苛立ちが高じてきて、唇を離すと同時に平手
でスザクの頬を張る。

それでもスザクは何食わぬ表情で顔を戻して、濡れたC.C.の
口元をやさしい仕草で拭つた。

「どこも痛くしない?」

問い合わせてくる聲音はいつもと同じ表情で、どこにも氣負つた様
子も、悪氣もない。

C.C.は自分の認識の甘さにこまちら呆れたように息を吐く。
「おまえ…ちょっと慣れすぎていやしないか?」

事後にこうして世話を焼かれるのは決して初めての経験ではな
つたが、スザクの歳を考えるとあまりに違和感がありすぎた。
だが、スザクは人の良さそうな表情でニコリと笑つて「まあ、年

頃だし」と的を外した答えを返していく。

おかげで、連鎖的にルルーシュのことを思い出してしまったC・は、自己嫌悪に唸りながら氣だるく身体を起こした。口クに力の入らない腕で這うようにベッドの上を移動して、壁を背に四肢をだらりと投げ出した。

身体を隠す必要がなかつたのは、上下共に男物のノシヤマを着せられていたせいだった。

「男臭い」
その大きさからどう考えてもスザクのものだつたが、新しいものを用意したわけではないのはまた別な部分でわかつた。

「ごめん、洗い替えをまだ用意していなくてさ。昨夜一晩着ただけなんだけど、気になるかな?」

男の体臭独特の汗の臭い程度でそれほど臭うわけではなかつたが、それより『スザクの匂いに包まれて』いるという状況に眉を顰めた。

「そこまで厚かましくはないからな、別に構いはしないが。それより、おまえワザとだらう?」

「いまさら善人ぶるな、この偽善者が。私にマーキングするのが目的で、ワザと優しくしたんだろう？」と訊いているんだよ、榎木スザク

獣猛に喰るよ」として指摘してやると、スサクはたゞまち満面に笑みを浮かべた。

まるきり聖人君子のように温容に微笑んで見せる姿には思わず手のひらに顔を埋めてしまつた。

本心がわからなかつたはずだつた。感じていた恐怖は『用心しろ』と経験が鳴らしていたエマージェンシー。それを判断する理性の部分があまりに脆く弱つていたものだから、こんな稚拙な罠に嵌つて

この男の本当の目的は、ルルーシュから自分を奪うこと。それだ

け、だつたのに。

「……おまえ……手段を選ばないにもほどがあるぞ」
言葉を発するたびに、癒えない渴きにひりつく喉がC・C・の声
を掠れさす。

それがいかにも情事の後といった風情で恋々しく、C・C・は仕草で水をくれとうながすと、スザクはベッドサイドのナイトテーブルからペットボトル入りのミネラルウォーターを素直に手渡した。そのついでにさりげなく、C・C・と向かい合つ格好でベッドの上に腰を下ろした。

どうやらこちらはシャワーを浴びていろらしく、乾き切つていな濡れた髪がクルクルといつもより多めのカールを作り出していて客観的に見ている限りは無垢な少年のようだったから、とんでもない詐欺もいいところだ。

スザク自身も濃い灰色のパジャマを身に着けていて、リラックスした様子で胡坐を組み、また一度無垢な表情で笑つた。

「でも、騙したつもりもないんだけどな」

「ハツ、この期に及んでまだそんな」

「かなり本気だよ、本気で僕はきみが欲しい」

「……はア？」

C・C・はペットボトルの蓋を外したところで、肝心の中身を飲むのも忘れてしばらくスザクの顔を凝視した。

スザクのほうでもしばらくの間はそれに正面から視線を返していたのだが、やがてふと息を吐くように微笑むと、らしくなく曖昧に視線を逸らした。

ふたりが黙つてしまつた空間に、カチコチと時を刻む時計の音だけが響いた。

「……ねえ、C・C・？ 王になるルルーシュと、騎士止まりの僕との違いがきみにはわかるかな？」

またずいぶん唐突な質問だとは思つたが、迂闊に興味を誘われてしまつたのでC・C・は問い合わせ返す。

「何だ？」

すぐにはスザクが答えようとしなかったので、苛立ち紛れになんとなく視線を巡らすと、時計の針が指していた時刻は午前4時。

「のままではスザクは徹夜になつてしまふなと思つていた矢先に、よけやく重い口を開いた。

「……日本は王制を敷いてなかつたから、強引に並べるなら総理の息子と、皇帝の息子、どちらも似たような立場だと思うんだけどね、それでも僕には王の器はない。その理由がきみにはわかるかな？」

「……は一瞬素直に黙考しかけたが、あつさり止めてしまふと喉を鳴らしながら水を飲む。

スザクが答えを求めてないことはなんとなく気付いていたからだ。一息で飲み切つてしまつたペットボトルをグツと握り潰すと、静寂のしじまに似つかわしくない破裂音がグシャリと響いた。

中身の無くなってしまったそれには興味をなくして、適当にベッドの端に投げ捨てる。

「話せ」

「ん？」

「聞いてやるから、焦らしていないで早く話せと言つている」

「どうでも良さそうにうながらすと、スザクもさすがに苦笑を洟らした。

幼少の時分から武道を嗜んでいる人間らしくなく、常ならずつきり伸ばしている背中を丸めて、視線を落としたままスザクが述懐を続けた。

「……僕とルルーシュの最たる違いはね、犠牲の精神だ。僕は父を殺した。その負い目があるものだから、今はこうして国のために働いてはいるけれど、はたしてあの一件がなかつたら僕はここまで他人のために自らを犠牲に差し出すことができただろうか？ 僕にはとてもそうは思えない。そこがルルーシュには絶対に適わないところだ」

一番初めはナナリーのため。

いつしかそこに生徒会のメンバーが加わり、黒の騎士団が加わり、超合衆国に批准した国々が加わり、今では強者に虐げられている弱者、つまりは世界中の国民がルルーシュの守るべき対象に加わった。「いつだってルルーシュに行動をうながす源は『誰かの力になりたい』という自己犠牲の精神だ。他人のために自らを犠牲にすることに疑問を感じない、どころか喜びすら感じている。そんな彼だからこそ、ギアスの力に頼った魔の権威でありながら、ギアスを掛けられていない人間までもが、何の疑問もなく彼を慕つてついてゆく。頭から彼のやり方を否定し続けてきた僕ですら、今はこうして彼に従っているみたいにね。きっと、もっと慎重に時間さえ掛けていれば、ギアスの力に頼らなくても彼は今と同じ地位に上り詰めていたんじゃないのかな？」

スザクの求める論旨が理解できなくて、C・C・は小首を傾げながら冷静に問いを重ねた。

「おまえも王になりたかった、ということか？」

「ちがうよ」
スザクは言って視線を上げると、ほろりと情けないぐあいに表情を崩した。

「その逆さ。僕はもう……他人のためなんかに自分を犠牲にするのがうんざりなんだ」

「…………枢木……」

C・C・はそのまま絶句した。

ふたりが黙ってしまった空間に、カチコチと時を刻む時計の音だけが響いた。

考えてみればずいぶんな違和感だ。

典型的なブリタニア仕様の室内装飾、壁には淡いグレイッシュブルーのクロス張り、銀細工でさりげなく植物を模した意匠が凝らしてあり、昔ながらの粋を選びすぐつて集められたイギリストの調度類、それらの品々の要所にあしらわれた繡子やビロード。まったくこの部屋ときたら、ありとあらゆる物が栄華の極みを凝らした様式

美でもつて整えられているのである。

そんな部屋の主が、この枢木スザクだ。

たつた18歳の、日本生まれのこの少年。

「……でも、どうやら人生のほうが僕にそれを許してくれないみたいでね、僕の思いとは裏腹に僕を今の状況に誘導した。自分の人生は、自分の意思で選んで歩んできたつもりだけど、結果的に僕が置かれた立場は僕個人の倫理的には、絶対有り得ないはずなんだよ……ブリタニア皇帝の騎士なんてね」

Ｃ・Ｃ・はスザクの話に耳を傾けながら、嫌でも激しい眩暈を覚える。

「こいつはどうして私を相手にこんな本音を話して聞かせるのかと。そう思つたら、聞いているこいつのほうが動搖してしまう。」

「……後悔、しているのか？」

「え？」

「マリアンヌの誘いを断つたことだ。……おまえ、本当はコーフェミアと話がしたいと……話せば良かつたと……後悔しているんじゃないのか？」

そのときスザクが見せた笑い方と言つたら。

「冗談は止めてくれと叫んでしまったそつだつた。

私にそんな弱気を見せ付けないでくれ。

自分と、ルルーシュのことだけでも精一杯なのに、おまえの弱気まで背負えるかッ！

けれども、スザクはなおも陶然としているようにすら見えてしまう偽り表情で笑つて、「そうかもしないね」と続けた。

「……でも求めてるのは弁解かな？　ユフィイを好きな気持ちに変わりはないけど、そのうち浮氣するかもしれないからつて。事前に許しを請いたかったのかもしれない。ちょっと最近いろいろ辛いからつて……言い訳を……」

微笑が別の表情に移り変わりそうになり、その寸前でスザクはむしろ目に力を込めて無理矢理微笑んだ。

「……たぶん俺は一生、コワイに対する気持ちを変えられない。彼女の存在が、あんまり心中に居心地が良すぎて、忘れることが出来そうにないんだ。……それなのに俺は生きているから、時には心が脆くなる。心中に存在している彼女よりも、間近にある温もりを求めてしまいたくなる。そんなことをしても彼女以外の誰もあれほど純粋に俺の心を満たしてくれるはずなんてないのに、……わかっているのに、それでも俺は……」

ついには堪え切れなくなつた様子で、ズザクはグッと唇を噛み締めるとい顔を伏せたまま黙り込む。

「マリアンヌ……。

Ｃ・Ｃ・はそっと心中でその名前を呼びかけた。
もちろん消えてしまつたわけだから応えのあるわけでは決してない。

それでも、そうせざるを得なかつた。

Ｃ・Ｃ・も唇をギュッと口の内側に巻き込んで、眉間に激しく皺を刻んだ。

おまえのほうが、よっぽど魔女の名前にふさわしい。

苦々しい毒を飲んだような気持ちでそう呟つ。

人の心を容易にかき回し、消えた後になつても呪いの言葉で人の心を苦しめる。

そして、この相手がルルーシュなら簡単だつた。

こんな場合には、何も言わずに抱き締める。

……しかし。

まるきつ自分のほうへ瀕踏みを迫らされているような心境でＣ・

・はきつゝ田を開じると、田々しづく感動にも聞こえる聲音で淡々と呟いた。

「泣いたことがあるのか?」

「……当然だらう、それくらい」

「コーフィニアが死んだ後に、泣いたことはあるのかと訊いている。

最近の話だ」

「……最近なら……まあ、泣くのも忘れてる感じかな？」

「ふざけるな。誰がそこまで心を鍛え上げることができるんだ？そんなのは最初から涙の存在を知らない人間が決まって口にするただの詭弁だ。周りの人間に共感して生きている限り、人の心は嫌でもかき回されずにはいられない。ましてや、今のような状況でそんな世迷言が通用するとも思うのか？ 自分を追い詰めてマゾヒステイックな愉悦に浸るのもいい加減にしろ」

感情の揺り幅が自分自身で制御することができない。

流される。この男の仕組んだ罠に迂闊に嵌つてしまつたときのようだ。

感情に身を任せて捨て鉢になつてている人間相手に、情で答えてどうする？ そう、思うのに。

「……どうしてきみが怒つているのか、よくわからないんだけど」

「知るか。私に聞くな」

邪険に突き放すように言ひて、これ以上むやみな情が移る前に部屋から去つてしまおうと思つた。

だが、いざそれを行動に移そうとした瞬間にスザクはそんなC・Cの肩に腕を回してきた。

とつさにC・Cはスザクの腕を払い除けていたのだが、まるきり天から降つてきた柔らかい衣が纏いつくよにして、背中からスザクの両腕がやさしく、容赦なく、胸元にC・Cの瘦身を包み込む。

「……きみがやつやつて……誘うから」

「はア？」

「誰でもいいわけじゃないんだ。コフィーの存在を認めてくれる相手じゃないと僕のほうが困るから。その点、きみなら理解してくれるんじゃないかと思った。……僕と一緒にならないかい？」

言われるだろうと思つていた。

だから、それを聞く前に逃げ出しちゃうと思ったのに。

C・C・はそれでもまだ逃げようとしたのだが、身体に回されているズザクの両腕がなおさら力強く抱き締めてしまったので、C・C・は身じろぐことすら儘ならない。

そんなC.C.の背後からスザクは自分の頬をC.C.の頬に押し付けて、小さな子供に言い聞かせるようにやさしく囁いた。

「極論を言つてしまえはね、ルルーシュは單に自分の欲求に従つて
いるだけなんだよ。『他人のために力になつてやりたい』、そうして結局は自分の存在を相手に認めさせたいだけなのに。そんな彼の本心には気付きもしないで、周り中の人が彼を支えようと力を貸している。それなのに当の本人は大してありがたみも感じずに当然のように受け取つている。自分は人生を引き換えにしている気持ちもあるのかもしれない。でも、それこそが傲慢だよ。たしかに彼のおかげで助かる人たちはいるのかもしれない。けれども、彼がいくつも人はみんなそれなりに生きてゆくことができるんだ。でも、それを言つてしまつたら、僕の殺した人たちが浮かばれないから、僕はこれから先も他人の命を守るためにルルーシュを助けるよ。そこの代わり、きみは僕がもらつてしまおうと思ったわけだけど。勝手かな？」

「ああ、開いた口が塞がらない気分だ」

「でも、どれだけ待つても、ルルーシュはきみだけのものにはなら

ないんだよ？」

悪魔の声。

そんな」と、今更言わねなくともどうの昔に気付いてる。

それでも戯れに、時折ルルーシュが口にしてくれる優しい言葉はあまりにも甘やかな呪縛で…を絡め取り、もつと欲しいと願

たしかに、この1ヶ月というものは臆して意識的にルルーシュを

避けていた部分もあったのだが、そうすることでルルーシュのほうから何かしら言ってくるのを期待して待っていた部分も少なからずあつたのだ。

どれだけ待つても決して、個人の所有に收まる程度の相手でないと知つているはずなのに。

「……きみはもうどれだけ彼を待ち続けた？　あとどれだけ待つつもりでいるんだい？　どれだけ待つても、彼は決してきみだけのものにはならないよ。彼の視線はいつだって世界を見つめてる。世界を救うためだつたら、彼はこれから先もどんな犠牲も厭わない。本当に欲しいものが手に入らない絶望に、これから先もきみは『死にたい』と思い続けて生きるのかい？」

「 枢木…ツ」

「僕だったら、今すぐきみを変えてあげられる。きっと、本当の意味では、僕にはきみを幸せにすることはできないかもしない。でも少なくとも『死にたい』なんて一度とは言わせない。そのうち僕の力で必ずきみに生きる氣力を与えてみせる。こんな世の中でもね、目標さえ見つけられたら、生きていること自体に喜びを見出すこともできるんだ。僕はユフィからそれを学んだよ。だから今度はきみに、以前の僕と同じように死の魅力に取り憑かれているきみに、その喜びを教えてあげたいと思っている。言つたろう？　後悔だけはさせないと」

ほのかに含んだ笑いに紛らわせてはいるけれど、絡み付いている腕の意思の力が言葉よりも如実に本心を物語つてしまつていて。

この男には本心を隠せない。隠そともしていのかもしけない。

素直に心をさらけ出すという行為はある種の快感を覚えさせてしまふものだから、この男はそのとき味わう快感に対してもう少し従順なのだ。

そしてC・C・Cにも見せ付けられる本心は心地好い。あれこれと頭を悩ます必要なく、安心してその人物のそばで過ごしていればいい。

いわけだから。

それでも。

「大事なことを忘れているぞ、板木スザク」

喉の奥から搾り出すようにして囁いて軽く身じろぐと、スザクの両腕は薄絹が滑り落ちてゆくようにして簡単に外れた。

C・C・は借り着の胸元にギュッと激しく爪を立てると、背中を向けたまま続けた。

「誰かでなければいけないのは、おまえだけではない。私も一緒に、ということだ」

たとえ一生ルルーシュが自らのためだけに幸福を追い求めるはずはないと知っていても、それでも、慕ってしまう気持ちは変えようがないわけだから。だったら自分が開き直るしか方法はないのだろう。そういう相手であることを認めて、自分が割り切ってしまうよりほかにない。

「残念だな」

スザクはあっけなく答えたが、淡く微笑みを含んだ瞳の表情がまたそれを裏切っている。

何より先に個人の情が優先する男だ。

世界の平和か、個人の幸福か、どちらか一方を選べと迫つたら迷わず後者を選ぶ男だ。

ルルーシュは、一見似ているようでいて、個人の対象が一個人には收まりきらない。

ひとつ幸運を叶えることが適つたら、またすぐに別な対象を求めて大局を見渡してしまつのだ。

その意味では、女としてどちらを選ぶほうが無難か、あまりにも差は歴然としている。

きっとスザクのような男に惚れることができるなら、そして惚れられることができるとしたら、自分のような人間でも幸せになれるのだ

ううなとし・し・はなんとなく考えた。

それでも。

「……期待させるようなことを言つてすまなかつた。やはり私には
……あいつ以外は選べそうにない」

それ以上は何も言わずにスザクはし・し・の背中にひたいを押し
付けると、やがてこくじと小さく頷いた。

そうして、ふたりのあいだで始まつた関係はたつた一日で終焉を迎えたが、いかんせん人目につく場所で始まつてしまつたのが悪かつた。

結果的に徹夜で執務に戻ることになつたスザクは、悪いが一日くらいは適当にやり過ごすつもりで皇宮に出向いたが、とてもそうは言つていられないくらい露骨に自分に対する風当たりが変化しているのに気付いた。

帝国ブリタニア唯一無二の騎士・ナイトオブゼロとしての権威に^{へつら}諂い媚を売る者、名譽ブリタニア人上がりの蛮人と露骨に蔑む者。それが前日までのスマザクに対する評価の総括だったのが、さらにそこに、陛下のひそかな愛人である虜囚に手を出す狼藉者、相手が虜囚でも関係なく眞実の愛を貫き通す人格者、という新たな評価が加わつた。

まさかにもし・し・にそうした噂が浮上しているとはスザクも気が付いてなかつたから、その噂を覆す結果に繋がつたのは好都合だつ

たが、主に女性たちを中心後に後者に対する一極化が完全に出来上がつてしまっているのには少々閉口させられた。

昨日まで親しくしていたはずの相手に毒虫の如くに接せられ、かと思えば、意外な相手から声援を受けたりしてしまった。いずれにせよ行く先々で婉曲な質問攻撃に晒されてしまったが、迂闊に口を開けば自分より立場の弱い C . C . に攻撃の矛先が一極集中してしまったことはわかりきっていたので、最初から無視を押し通すつもりでいた。

だが、問題はそう簡単に済みそうにないことを、その日の午後には痛感させられた。

いまだに迂闊にさまよえれば迷路のように思うことのある皇宮だが、政務に使用される場所はもちろん限られていた。

とりわけ時間の浪費を嫌つたルルーシュが機動性を一番に考えて選んだ執務室は、従来高官たちが使用していた手頃な部屋をそのまま流用していたが、ルルーシュが皇帝に即位するのと同時にずいぶんシステムティックな改革が進められていた。

内装的には中華連邦領事館に用意されていた執務室をそのまま規模拡大した感じに近い。

部屋の正面に据えられた大型スクリーン、左右の壁にずらりと配されたデスクトップ型のパソコン、簡単な謁見と会談を同時に実施することができるよう区画を分けた別室には会議用のスペースも設けられている。ただ以前と違つて指示を待つ人間が圧倒的に増えているから、部屋の内部にも執務官が 10 数人常勤していた。ほかにも事務官、近衛兵なども加えるとちょっとした大所帯である。身分を隠す必要のなくなつたことによる何よりの変化だが、利点であるのと同時に常に規律を重視する必要にも迫られたので、この部屋でルルーシュに謁見を求めている最中は、スザクも完全に彼に仕えるナイトオブゼロとしての規範を示して振る舞つた。

部屋の最奥、大勢の人員が詰めついてもざわめきの届かない広大な一室に、報告書を読み上げるナイトオブゼロの声だけが朗々と響

く。

「 と、別紙の報告にもあるとおり超合衆国から日本への帰還者受け入れも順調に進んでいます。ただ、黒の騎士団内部からの瓦解を危惧する動きも目立っていますので、警護の強化は引き続き必要かと。現地における対応はジョレニア辺境伯を筆頭に陛下直々の指示により動かせる人員が揃っています。残りの目立った懸案事項は別紙『アンガージュマンに関する報告書』と『シビリアンコントロールに関する今後の展望と代替案』をご覧ください。私のほうでは引き続き現在の任務を継続して行う予定でありますが、陛下のほうから特に何がござりますか?」

マホガニーのこさか『ラティブな執務机はルルーシュの好みには合わないものだったが、機能面を重視してそのまま使用することにした。それに合わせて用意されていた椅子も革張りの幅の広い大変大きなもので、こちらは従来の皇帝たちに比べると極端に細身であるルルーシュが座ると違和感を感じえなかつたので、取り急ぎ専用のものを作らせている最中だ。

そこに深々と身を預けているルルーシュは、こちらも最近新調したばかりの白と藍紺を基調とした皇帝の衣装に身を包んでいる。金糸で施された意匠が纖細で、眉目秀麗なルルーシュの姿を殊更に引き立てる役割を担つてゐる。

だが、今はスザクに一瞥も与えもしないで報告だけに耳を傾けていたのだが、スザクが口を噤むのと同時にわずかに身じろぎ、背後に控えていた近衛兵を呼び寄せると厳格とした態度で人払いを命じた。

「 …は、全員でございましょうか?」

「 そうだ。すまないがこの樅木だけを残して、あとは私が呼ぶまでこの部屋には誰も近づけないように図つてくれ

「 イエス、コア・マジェスティ!」

そうしてしばらくは人の退出に合わせてざわめきが続いたが、数分で元の静寂に包まれた。

天井の高い広大な空間に、ひつそり闇と染み入るように満たされてゆく濃厚な静けさ。

執務室の扉が近衛兵の手により厳重に閉ざされるのを確認したところで、ルルーシュはゆっくり視線を巡らすと、ようやくスザクのほうに視線を移した。

執務中の緊張を解くようにして机の上に片肘を付き、純白の手袋を嵌めた手のひらにゆつたりとその頬を寄せたが、スザクの目から見る限りラックスには程遠い意志の力がみなぎっているように感じた。

ゼロの田だ。

据えられる視線の冷徹さをスザクはそんなふつに理解した。

だが、今までそれに一度も臆した経験のないのも事実だった。

「どうしたんだい、ルルーシュ？　あえて今はこう呼ばせてもらいつけど」

「ああ、そのための人払いだ」

「怖いな。なんだか今にも僕に掴みかからんばかりの田をしているね、きみ」

「ああ、おまえがそう見えるというならば、まさにそうなんだろうさ」

言つなりルルーシュは身体を起こすと、またゆつたりと椅子の背に背中を預けた。

見上げているのはルルーシュのほうなのに、彼が生来持ち得る気高さゆえに見下されているような錯覚に陥る。

この感覚があつたからこそ、幼少時代の自分は彼に対して反発心を抱いていたのだろうと今となつては理解できるのだが、現在はより正しい認識の下により完全に対等の立場であることを知っている。対面上、彼に仕える立場であるのは事実だが、心まで彼の家臣に成り下がつた覚えはない。

むしろ実質的に、彼を使っているのは自分のほうなのだから。

「今朝方、おまえと C . C . に関する不埒な情報を耳に入れたんだがな」

ルルーシュは視線でスザクを見下しながら豪胆に冷えたナイフのようないい言葉を発した。

「耳に入れた？　きみがその日で見たの間違いじゃないのかな？」

対してスザクの声音は、真夏の昼下がりに時折吹く深山風みやまのしのよ

うな爽やかさ。

ルルーシュは不快気に目の人下に皺を刻んで、それでも冷静に追求を続けた。

「自覚しているなら話が早い。おまえ、C . C . 相手に何をしている？　どうしてあいつに構うんだ？」

「構う？　ちがうよ、ルルーシュ。むしろ僕は彼女の期待に応えてあげただけだ」

「期待？　おまえに？　何の？」

言つて、鼻の先で笑つたが、目の下に刻んだ皺の影が範囲を増すのを見て、スザクも追従して笑つた。

「驚いたな、こんなプライベートなことまできみに報告する必要があるのかい？　それとも、ピーピングの趣味があるのはきみのほうだつた？」

「何…？」

「真意を訊ねたいのはむしろ僕のほうだよ。　ルルーシュ、どうしてきみは C . C . を遠ざけるんだ？　皇帝を倒して彼女の力が不要になつたから？　まさか彼女の好意に気付いてないわけでもないんだろ？」

「こころもち上を向いている顎の下、ルルーシュの喉仏が感情の波を押さえ込むようにグッと動いた。

まだそんな見栄を張る余裕が残つているのかと思ったら、スザクは自分でも止めようのないくらいに冷え冷えと腹の底が冷めてゆくのを感じた。

ルルーシュの貴族的に整つた低い声音が、天井の高い空間にひとりわ凜と響いた。

「おまえには関係のことだ。それなりに考えあつてのことだからな。それこそ、おまえに説明する義務はないと思うが？」

微塵の隙なく整えられた執務室。自分と同じ18の男でありながら、ルルーシュは既にこの空間を王者の風格で自在に支配してしまつている。

たしかに優れているのだな。あらゆる面で自分よりも存在価値の高い人間なのだろう。

それでも。

「あるよ。むしろ、今の僕以上に彼女に関係している人間もほかにはいないと思うけどね」

「……どういう意味だ？」

ギアス抑止用のコンタクトレンズを嵌めていない右目に、きらりと水が流れるような光が渦を巻く。

今までずっと彼の表面的な穏やかさに騙され続けてきたスザクの目には、今の憤りのほうがいつそ心地好い。

その心地好さをもつと味わつてみたいと思つた。

「僕はね、ルルーシュ。昨夜、C・C・にプロポーズしたんだ」

「なん……だとッ？」

うつとり陶然と頬を緩めながら囁くように呟くと、高じゆく感情の波に合わせて目で見る愉悦も飛躍的に増えてゆく。

まだ一度もこんなふうな絶望は味わつた経験もないクセに。一人前に…何が皇帝だ　ふざけるな。

「返事は一応保留にしてあるけど、けつこういい感触だと思つてる。今晩にでもまた僕の部屋で会う約束をしてるけど」

「スザク…おまえ…ッ」

「ルルーシュが話してくれないからさ、驚いたよ。きみたち丸一年

も一緒に暮らしてたんだってね？ アッシュフォードで。あのとき
きみの影に見え隠れしていた謎の女性が彼女だつたなんてね、ふふ
…これも運命の悪戯つて言うのかな？」

ついにはルルーシュの瞳が赤みを帯び始めるが、既に一度ギアス
の支配を受けている自分にはわずかな恐怖も感じさせない。むしろ
コントロールを失いつつある感情を露骨に確認できるだけ。

俺など足元にも及ばないくらいに、おまえは奇知に富んでいるつ
もりでいるのだろう。

けれども、俺にはまだ一度もおまえが勝つたことのないのもまた
事実だ。

スザクが憐れむように失笑を洩らすと、さりに露骨にルルーシュ
の面に焦りの色が浮かんだ。

「いまさら焦つても、もう手遅れだといつにもかかわらず。

可哀想に。

「おまえには関係のない話だッ！ そんな話を、いまやあいつか
ら聞き出して何の目的が」

「ちがうよ、ルルーシュ。聞き出したんじやない、単なる寝物語の
一貫さ。するだろ？ ベッドの上で昔話くら」

「スザク…ッ！」

「ああ、ごめんね。一年も一緒に暮らしてて、一度も手を出さなか
つたんだよね。尊敬するよ、あんなに可愛い女性を前にして」

「黙れッ！！ きさま……こ…こ…に…ッ」

「いいじゃないか、僕たち友達だろ？ ピーピングが趣味なら、
今夜にでも僕の部屋に遊びにおいでよ？ 声だけなら聞かせてあげ
るよ。彼女、イイ声で鳴くんだ」

「…………スザクツツッ！！！ わたまどこいつ男はアアアッシュ
！！！」

「どうして拘束衣を着ているの？」

寝不足が祟つてどうにも作業に集中することができなかつたので、眠気覚ましのつもりで庭園をひとりで散歩していた。C・C・は、薔薇の垣根を越えたところでおもむろに声を掛けられた。

「……アーニャ」

声の方向に振り向くと、そこには天蓋を備えた小さな四阿あずまやがありアーニャがひとりで座っていた。

身に着けているのは見慣れたナイトオブラウンズの騎士服ではなく、皇族たちが着ているような華美なドレスでもなく、アッシュフード時代のナナリーが着ていたような素朴な白のブラウスと、髪の色に合わせた淡いピンクのワンピースだ。

活発な格好を見慣れている田にはこさか少女趣味のよつにも映つたが、アーニャの雰囲気にとっても合つていて黙つて座つているとまるで人形のようだつた。

「おまえ、アリエスの離宮に籠つていたんじゃなかつたのか？」

問い合わせながらC・C・は、アーニャの隣の席に腰を下ろした。

アーニャの前には黄金色の焼き菓子と紅茶が出されてあつたので、焼き菓子のほうを一口摘んだ。

「無断で」

いつも感情を表に出さない少女は、やはり無感動にひとこと呟いた。

「いいじゃないか、疲れているときには甘いものが恋しくなるだろう」

「疲れてる？」

なにげなく言つてしまつてから、昨夜のアレコレを思い出してしまつた。C.C.は、ひとり気まずげに目を伏せながら視線を外した。

「まあ……いろいろあつてな」

「ふうん」

「……そんなことより、おまえ」

気まずい話題を避けるためにC.C.は話を元に戻したが、アーニャは紅茶を一口飲んでからぽつりと呟いた。

「スザクが」

「えつ？」

「たまには顔を見せに来いつて、電話を掛けてきたから」

「あ、……ああ、そうなのか」

思いがけなく動搖に煽りを受けてしまつたが、話を聞いてしまつとまったくマメな男だなと感心した。

皇宮ではルルーシュとC.C.の世話を焼き、そのかたわらではアーニャを心配して多忙な時間を使い分けている。

口クに掛かってきた電話も取らないルルーシュに比べたら、本当に対照的なふたりだなと思つた。

アーニャが紅茶を飲み切つてしまつたので、C.C.はやはり無断で紅茶のポットに手を伸ばすと空のカップの中に紅茶を注いだ。焼き菓子の甘さの残つた口の中を洗い流すために、飲み頃だつた紅茶をゴクゴクと一気に飲み干した。

「それで？ 少しは落ち着いたのか」

マリアンヌのギアスにより幼少の時分からひそかな干渉を受け続けていたアーニャは、マリアンヌの存在が消失すると同時にラウンズから脱退した。

そもそもアーニャがラウンズの一員となつていたのは、深層意識に憑依していたマリアンヌが行動起こしやすくするためだ。皇帝もそのほうが何かと都合が良かつたため、皇帝直属の騎士であるナイトオブシックスにアーニャを任命した。もちろん内からは彼女をその道に仕向けるためにマリアンヌからの干渉も受けていた。

だから晴れてマリアンヌの呪縛から自由になつた今、アーニャは改めて自分の存在を見つめ直すための時間を必要としていた。

むしろ彼女には実感のともなわない真相だったから、彼女の意思ではなく、スザクの判断で彼女にそれを勧めたのだ。

そしてアーニャもスザクの勧めには素直に従つた。

滞在先にアリエスの離宮を選んだのはルルーシュだが、そこにアーニャとナナリーが一時期滞在していたことをスザクから教えられていたからだつた。

アーニャはふたたび空になつてしまつたカップの底を見つめながら、こくんと冷静に頷いた。

「ナナリー…皇女殿下の日記を見つけた。だから退屈もそんなに悪くない」

「ナナリーの？ おまえ、それは盗み読みだらう？」

「…が驚きを露わにして訊ねると、アーニャはまた一度こくんと頷いた。

「ルルーシュ…皇帝陛下が読んでもいいと言つてくれた。何かを思い出すきっかけになつてくれたらいいからと」

マリアンヌのギアスに支配されるのと同時に、マリアンヌ殺害の前後の記憶を先王シャルルにより塗り替えられてしまつたアーニャは、6歳以降の記憶があまりに曖昧だ。

その記憶を補うために自らも頻繁に日記をつけていたわけだが、マリアンヌが表層意識に出ていたときの記憶だけは今更どうにも取り戻ししようがない。

実子であるルルーシュとナナリーを除けば、今回の一件で一番の被害者とも言えるだらう。

「それで？ ジェレミアの話は聞いているんだらう？ ギアス・キンセラーを受けてみる気にはなつたのか？」

賤の記憶に翻弄されているせいで、今のアーニャの精神状態は不安定だ。

元々気丈な少女だったので、何かを怖がつたり、不安に泣いたり

するわけでもないのだが、依然として感情があんまり表には表れない。長年にわたって深層意識をマリアンヌによつて操られていたために、感情の起伏 자체が極めて少なく押さえ付けられてしまつているのだ。

だが、ギアス・キャンセラーを受けるということは、元々あつた記憶を取り戻す的同时に、マリアンヌの殺害光景を思い出させてしまうことにも繋がつたので、判断に迷つたルルーシュがアーニャ本人に判断を任せたわけだつたが。

アーニャが黙り込んでしまつたので、仕方なくC·C·は焼き菓子をパクパク口に運んだ。

おかげでまた喉が渴いてしまつたが、あいにくポットの中は空だつた。

いつそ自分の分もまとめてお茶の追加を頼もうかと思つたが、仮にも虜囚である自分の立場を思い出し、テーブルの上に両手で頬杖を突くと氣だるくハアと息を吐き出した。

皇宮の複雑な人間模様に巻き込まれるのはごめんだつたが、今は今ですいぶんと息の詰まる立場だなと今更のように実感した。

サワサワと淡く吹き付けてくる向かい風が、薔薇の生垣をたえまなく緩やかに揺らしている。

その風に乗るような小さな聲音で、やがてアーニャが呟いた。

「……C·C·? あなた、何百年も生きていくて本当?」

「ああ、本當だ」

C·C·は薔薇の匂いをほのかに含んだ風を顔の表面に受けながら伏し目がちに答えた。

「記憶がたくさんあるとうれしい?」

「は?」

「私はよく……わからない」

頬杖をついている状態そのまままで、田線だけを動かしてアーニャの様子を覗き見た。

アーニャは背もたれのない四阿の椅子に深く腰を下ろして、淡い

風に前髪を揺らしながら少し陶然とした表情で呟いた。

「昔のことは覚えてない。なのにアリエスの離宮で過ぐしていると、時々ここが温かくなる」

言つてアーニヤは両手で自分の胸の小さなふくらみを押された。「ナナリー……皇女殿下の日記を読んでいるときもそうだった。私の記憶にない人の記録のはずなのに、心が勝手に疼き出す。私にはそれがなぜだかわからない。でも、あとで教えられたマリアンヌ后妃が私にしたことは、その温かな部分と一致しない」

「……アーニヤ……」

「人の記憶なんて曖昧なもの。信じるほどの価値はない。私がそう言つたら、スザクはそんなことはないと言つた。……あなたは自分の記憶が大切？」

位置関係よりもそれがアーニヤのクセで上田遣いに問われて、C・C・C・Cはなんとなく頬杖をついているのすら氣だるく感じてしまつて、広いテーブルの上に上半身をくたりと乗せると、直接頬をなめらかなテーブルの表面に押し当てた。

目の前に数多に降り注いでいる木漏れ日。

けれども、ここには届かない。

大理石のテーブルの冷えた感触が心地好かつた。

「……そうだな。私はかなりいい加減なんだ。覚えているのがつらいのに、とっさに思い出すのは苦しい記憶ばかりで。愉しい記憶、やさしい記憶もあるはずなのに、決まってそういう記憶は心の底のほうに沈んだまま出てこない。だからもううんざりしているのや」

生きること自体に。

悲しい記憶をこれ以上紡ぎ続けるのが嫌だから、『死にたい』とずっとと思い続けていた。

それがあまりに習慣化してしまつていてのだから、ルルーシュのために前向きに『生きたい』と思う気持ちもあるはずなのに、心

がとつさにそつちの方向に動かない。もう何百年もずっと生き長らえているクセして、いつまで経つても生に対しても慣れないものだから、どうやって気持ちを前向きに動かしたらいいのか方法がわからないのだ。

そんなC.C.をじっと見つめていたアーニャは何を思ったのか、ティーカップを載せたソーサーと菓子皿を机の脇に寄せてしまうと、自分も同じようにテーブルの上に頬を乗せてきた。

淡いピンクの髪の毛からふわりと甘くフルーティな香りがC.C.の鼻腔をくすぐり、赤みを帯びたアーニャの大きな瞳が間近から自分の顔を覗き込んでいる。

そして、先に言つた言葉を繰り返した。

「だから拘束衣を着ているの？」

C.C.はすこし驚いて目を見張つて、ふわりと感情を緩めるようにして目を細めて笑つた。

「自分でわからぬ。どうしてなんだうつな？」

「記憶を失くしたの？」

「いや、そうではないんだが」「知つてているのはルルーシュだ。

ルルーシュが自分にそれを強制したわけだから。

そして、恐れていた言葉をルルーシュに直接認められるのが怖くて、ずっと臆していた自分は一度も理由を聞けずにいたものだから、1ヶ月も経つというのにいまだに理由がわからない。

今までずっと真実から逃げ回つていたからだ。

「……でも、そんな私が言つのもなんだが、記憶にはそれなりの価値があるはずだ。記憶を全部失くしてしまったら、同じ間違いを何度も繰り返してしまいかねないだろ？」「記憶があつても、繰り返す人はいる」

「そうだな。そういう奴は、馬鹿な自分を許せる心の広い奴なんだろ？さ」

だが、自分は

もう一度と間違いたくはない。
あのときだつてそうだつた。

迷いに迷つて結局は、自分では結論が出せずに曖昧なままマオを放逐して、やがて自分の手で葬り去らねばならなかつたように。

そんなふうに馬鹿な間違いをもう一度とは繰り返したくない。

そう、願い続けているはずなのに、もどかしいまでに自分の心すら思い通りには扱えない。

どれだけ苦しい経験を重ねようとも、手に入れたいと思うものが存在するならば、歯を食いしばってでも自分が頑張るしかないはずなのに。

「元気になつた？」

「え？」

突然問われて、C.C.はとつそに自分の胸の内を覗き見て、仕方がないなど諦めの息を洩らした。

「ああ、元気になつた。これからそつなるように努力する」
いつまでも過去に留まつていても、絶対にあの男は迎えになんて来てくれない。

なにしろルルーシュの過去は、あのときアーカーシャの剣ですべて砕け散つてしまつたわけだから。

もう一度とルルーシュが過去を顧みないことくらい、自分が一番良く知つてゐるはずだった。

だつたら、自分も。いつまでもそんな場所に留まつていいで、嫌でも歩き出すしか方法はないわけだ。

C.C.は、良く眠つた朝ベッドの中であるように両手を伸ばして伸びをして、アーニヤに不思議そうな顔をされながらクスクスとひとりで笑つた。

ところで、いつまでここにこりしているんだと聞いかけたら、アーニャは「スザクが迎えに来るのを待っている」というので、多忙なんだろうと察したC.C.はアーニャを案内するついでにルルーシュの執務室に向かった。

明け方スザクの部屋を去る際に、なんとなく今日の予定を聞いていた。

本心では、さすがに昨日の今日でばったり3人で顔を合わせるのを嫌う思いがあつたから、念のため予防線を張るつもりでいたわけだが、思わぬところでそれが役に立つたわけだつた。

今の時間ならまだスザクも執務室で過ごしているはずだろうと判断して、適当に皇宮の要所を案内しながらアーニャとふたりでプログラと執務室に向かつた。

だが、執務室に近づいてゆくにつれ、廊下や回廊に異様な人数がひしめいているのに気付いた。

C.C.は訝しく思いながら、適当な人間を捕まえて問い合わせてみたのだが、どうにも要領を得ない。

仕方なく、人垣を押しのけながら強引に執務室の扉の前まで到着した。

その一帯の人口密度はさらに異様な感じで、隣にいる人間と触れずに立つてているのが難しいような状態だ。

しかも、集まっている人間の中には悄然と書類の束や携帯用のパソコンを抱えているような人間もいて、ひょっとしてボヤ騒ぎでもあつたのだろうかと思つたが、執務室の扉は堅く閉ざされていて、その両脇に青い顔をした近衛兵が冷や汗を浮かべながら立つてゐる。いつたい何があつたんだ? と怪訝に思つてみると、隣について来ていたアーニャがぽつりと小さく呟いた。

「スザクの声……」

「え？」

「それとこれは…ルルーシュ…皇帝陛下?」

「はア?」

言われてどひさに耳を澄ましたが、何しろ周りがざわついているものだから埒が明かない。

仕方がないので近衛兵に開けろと命令したのだが、かたくなに「陛下のお許しが出るまで開けるなどのお達しだ」と繰り返すばかりで譲らない。

しかし、周りの喧騒に耳が慣れ始めてみると、中から尋常でない衝撃音が漏れているのがどうしても耳についてしまうのだ。

「おい、いいから開ける。中で殺し合いでもやつ正在のんじやないのか？ 皇帝と枢木スザクだけなのか？」

「『命令だ！』

近衛兵自身、判断に自信がないながらも懸命にルルーシュの命令に従う様子を見て、C.C.は軽く舌打ちすると容赦なく頑丈な扉を蹴り始めた。

「お、おいつ何をするッ！ 虐囚の分際でッ…！」

「あいつが死んでからでは元も子もないだろ？がッ…！」

無茶を承知で思い切った暴挙に出てしまつたのは、なんとなく事の成り行きが読めてしまつたからだ。

昨日の今日でルルーシュと枢木スザクがふたりきりで部屋の中で暴れています。

自惚れるなど言つのが無理なくらい、あまりに明瞭簡潔な匂わせだ。

左右から屈強な近衛兵に腕を押さえ付けられながらも、無我夢中で扉を蹴り続けていると、やがて内側に弾けるようにして扉が開いた。

その瞬間、中で繰り広げられていた光景を目にした全員が思わず

「あつー！」と声を上げて絶句した。

整然としつらえてあつたはずの室内がふた目と見られない惨状に

変わり果ててしまっていた。

壁際に置かれていた20台近くのデスクトップ型のパソコンが、すべて床の上に転がっている。しかも机の上からただ落ちているだけでなく部屋中に四散しているのだ。ところどころ壁が抉られたよう凹んでいたから、おそらくそれを誰かが投げつけたのだろう。部屋の中央に据えられていたはずの豪奢なソファも猫足の部分が天井を向いていた。革張り部分の至るところが縦横無尽に裂けていて、おそらくこちらにも何かをぶつけたのだろう。見やれば転々と脚の部分を失くした椅子が転がっている。

部屋の正面に据えられたスクリーンに至っては、まるきり射撃の標的にでもされてしまったような状態だつた。一面にボコボコと穴が開いていて、もうすっかり本来の用途を成していない。

それらの惨状の中央で蠢いている人の影は、床の上で組んず解れつ掴み合つていて、たつた今まで下になつていた人間が、相手の頬に拳を叩き込むのと同時に上になり、ふたりして忙しく上下を入れ替えながら大格闘を繰り広げている最中だつた。

「陛下ッ！！！ 枢木卿ッ！！ 「乱心あそばされたかッ？！」

全員が呆気にとられて茫然と眺めていた中で、さすがに訓練の行き届いている近衛兵たちの復活は早かつた。

叫ぶのと同時に部屋の中に駆け出し、床の上で掴み合つているふたりを引き剥がそうと手を伸ばした時だつた。

「…………邪魔をするなッ！！ おまえたちは外で耳を塞いで待つていろッ！！ 今見たことも忘れるッ！！ ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの命令だッ！！！」

「…………イエス、ユア・マジエスティッ！！！」

ルルーシュの絶叫がそのままギアスの効力を發揮したのは、おそらく格闘の最中に抑止用のコンタクトレンズが吹き飛んでしまったためだろ？

ギアスの力が暴走しているのはまだ左目だけだったが、右目のギアスを制御するだけの余裕が今のルルーシュには残っていなかつた。

たちまち現場に駆けつけた3人の近衛兵に絶対遵守の命令が効力を發揮して、脱兎のごとくに部屋の外に駆け去つた。

バンッと音高く閉められた扉の影に身を潜めていたC.C.は、とうとうアーニャの顔を胸元に抱えてルルーシュのギアスから守つていた腕を離した。

アーニャは不思議そうにC.C.を見上げながら問いかけた。

「今のがそう?」

「……そうだ。あいつのギアスだ。……今はちょっといろいろな意味で暴走しているがな」

言つて、部屋の隅の安全な場所から冷静に辺りを見回せば、天井に備え付けのシャンデリアさえ破壊されてズタボロになつてゐるに気付いた。

おそらく何かを投げつけたのだろうが……想像するだに恐ろしい。ルルーシュもスザクも最近新調したばかりの執務服を身に着けていたはずだが、ふたりともに両袖は肩の部分から引き千切られていて、身頃の部分もカギ裂きだらけでワヤクチャだ。

ほとんど素肌が見えているよつた胸元には、ふたりともまだ真新しい鮮血が滴つていて、遠目に見ても鼻や口の周りから出血しているのが良くわかつた。

そうしてゐる間にも形勢逆転したルルーシュがスザクの腹の上に馬乗りになり、固めた拳を容赦なくスザクの頬に叩き込む。

「……何がギアスのせいだッ!! おまえがわざとナナリーのいる政庁を狙つたんだろうがッ!!」

そして、口から血の泡を飛ばしながら口汚く罵つたが、スザクの両手がルルーシュの頭髪を驚撃むと、そのまま自分の頭めがけて振り下ろし頭突きをお見舞いした。

「ふざけるなッ!!!! だつたらおまえはどうなんだッ!!!! ギアスが暴走したからッ?! そんなくだらない理由で死んでしまつたユトイはッ!!!!」

衝撃に床にドッと倒れ込んだルルーシュを足蹴にしながらスザク

も舌鋒鋭く絶叫した。

だが、一一度田に食らつた足の先を死に物狂いでルルーシュの腕が捕まえて、そのまま容赦なくスザクを床の上に引きずり倒した。

「だから何だッ！――悲しんでいるのはおまえだけだと思つているのかッ！――俺だつてッ！――」

「きさまがどの口でそれを言つのかッ！――！」

「黙れッ！――」このツ父親殺しがッ！――」

「おまえにだけは言われたくないッ！――！」

「止めないの？」

隣りから、こんな時に聞くには初夏の夜風のように爽やかなアーニヤの咳きを耳にして、C.C.はハア～と大きく息を洩らした。なんとなく立っているのが面倒臭いような心境だったから床の上にぺたりと腰を下ろしたら、律儀にもアーニヤも同じように座つてくれたので、ふたりの少女は肩を寄せ合いつぶつにして田前の惨劇を呑氣に眺めていた。

もしも田の前にお茶の用意でもされていたら、遠慮なくそれを愉しんでくるような平和的な雰囲気だ。

「ああ…どうしような？」

「死なない？ ルルーシュ…皇帝陛下」

「なア、さつきから気になつていたんだが、別に敬称は略しても構わないんじゃないのか？ ラウンズではなくつたわけだしな。なんだか言いづらそうだぞ」

「でも、今は皇帝陛下」

「気にするな。なんなら適当に愛称を作つて呼んでやつてもいい」

「たとえば？」

「そうだな…『あなたのたわけ』とか？」

「どうへんぼく？」

「そりそり、どうせなら『坊や』呼ばわりしてやつてくれ。ルルーシュなら泣いて喜ぶぞ」

「変な趣味」

「ああ、馬鹿な男だからな」

喧嘩の原因なんて聞かないでもわかっている。

きっとスザクが昨夜の一件を匂わせでもしたのだろう。

あれがルルーシュにバレてしまったのかと思えば、腹の底がゾツと冷え切るような気もしたが、目前に繰り広げられている光景を眺めれば怖がっている自分があまりに愚かなような気がした。

そして。

おそらく発端はそれだったのだろうが、この一ヶ月というもの極めて平和的に『話し合い』という知的な手段で縮めていたはずのふたりの距離が、実はそんな腹の探りあい程度では収まらないことをふたり共に重々把握していたのだ。

それでも、今のルルーシュはブリタニアの皇帝として、スザクはその補佐を務めるナイトオブゼロとして振る舞う必要に迫られていたから、理性の力で無理にでも押さえ付けていた感情が、降つて沸いた感情的な理由からついには爆発してしまったのだ。

本当になんて馬鹿な奴なのかと笑ってしまう。

こんなにもメチャクチャに暴れ回らずにはいられないくらい互いに激情を隠し持っていたクセに、意地の限りに犠牲の精神を發揮してずっと我慢し続けていた。

まだたった18歳の男の子のクセに。

どうしてこのふたりばかりそんなふうな我慢が必要になるのだろう?

それを思つと、笑つている瞳の端から涙があふれてしまいそうになる。

皮肉な運命だ。

それでも、ふたりは人生を賭して迷いなくその道を選んでいて、歯を食いしばりながら生きている。

生きることを決して諦めはしないのだ。

それに比べて自分は

「……ああ、たしかに情けないな。……ちょっと苦しい経験を重ねたくらいでな…」

口で言つほど簡単な経験ではなかつたけれども、それでも、喉元を過ぎてさえしまえば、熱かつた記憶もいすれは忘れてしまうのだ。しかし、そのときの『熱かつた』という感覚だけが喉に刺さつた魚の骨のようにずっともどかしいような苦しさを与え続けていたものだから、煩わしさに前を向いているのが面倒臭くなってしまったわけなのだ。

もつとしつかり前さえ眺めていたならば、苦しいなりに小さな幸福が数多に転がっていたかも知れないのに。

本当は、たつたそれだけのはずだったのに。

「それは忘れたい記憶？」

思いながらも、また性懲りもなく落ち込みかけていたところを横から声を掛けられて、思わずC.C.は横からアーニャの肩を抱き締めながら笑つた。

「いや、それも全部含めて覚えておきたい記憶だ」

もう一度と、『死にたい』なんて思わないために。

苦しいけれども、心に刻み付けておきたい大切な記憶だ。

「　　あ」

しかし、ひとしきり平和的な雰囲気を満喫していたふたりの目の前で、デコラティブな執務机まで投げ飛ばされたルルーシュが背中と後頭部を強打して、そのままガックリ氣を失つてしまつたのがわかつた。

けれども、すっかり我を忘れている様子のスザクは、そんなルルーシュにさえ掴みかからんと駆けてゆく。

「危ない」

「潮時だな」

C.C.は冷静に呟くと、ちょうど手頃なところに転がっていた見るからに頑丈そうな置時計を掴み取り、手首のスナップを利かせ

て投げつけた。

ルルーシュの前髪をむんずと掴んで、今にも拳を叩き込もうとしていたスザクの後頭部にそれが見事にヒットして、スザクは声も出せずにはざりとルルーシュの上に折り重なって倒れた。

Ｃ・Ｃ・は難しい仕事をやり遂げた人がするようにフウと大きく息を吐き出して腰を上げると、片手でパンパンと服の埃を払った。「すまない、アーニャ。医者を呼んでくるから、あいつらを見張つておいてくれないか？ 板木が田覓めるようなら、そこら辺にある物を適当に投げてもうつて構わないから」

「死はない？」

Ｃ・Ｃ・はその言葉にギュッと眉を顰めながら思案して、ビリビリも良さそうに吐息した。

「この惨状の責任を取らわれるくらいなら、むしろナタのほうが幸せなんじゃないか？」

アーニャは一回り部屋の中を見渡した後で、

「そうかもね」

やはり無感動に答えた。

「起きた？」

軽く身じろいだ後に田を開けようと/orして、それができなかつたスザクは混乱した。

暗闇の中でパチパチと田をしばたたいてから、よつやく田の上に何かが乗せられているのに気付いた。

誰かの悪戯だろうかと疑問に思いながらそれをどうと腕を動

かしたが、今度はその腕が両腕ともに動かない。しかも、こちらは明らかに拘束されている感じがしたので、スザクは次第に焦りを感じながらそばにいる誰かに頼むことにした。

「あの、目の上のものを取つてもらえないかな?」

数秒も待たずに即座に視界を取り戻し、上から無表情に自分を見ている人物に気付いて、スザクはあつと驚きを露わにした。

「アーニャ! どうしてきみがここに…」

おそらく乗せられていたのは濡れタオルのようだった。

それを両手で持つてヒラヒラさせていたアーニャは、無表情ながらもちよつとムツとした様子で呟いた。

「スザクが会いに来いつて言つた。だから約束通り来て、待つっていたのに」

「あ、ああ…ごめん、そうだつたね…」

それなのに今まですっかり忘れていたことに気付いたスザクは動揺しながら視線を外したが、身体にグルグルと縄を打たれているのに今頃気付いてギョッとした。

「なつ、なにッ? なんだいこれ…ッ?!」

アーニャは極めて淡々と事実のみを口にした。

「陛下に乱暴を働いた狼藉者だからって。即刻処刑だつて一部の人間が騒いでて、陛下にお伺いを立てるべきだつてまた別の人間が騒いでて、最後はC.C.が『陛下が目覚めるまで縄でも打つてこいつの部屋に放り込んでおけ』とその場を纏めてた」

あくまで無表情に言われて言葉だったが、なんだがそのときのC.C.の口調までリアルに頭の中で再現できてしまつたスザクは内心ひそかに動搖した。

たぶん相当怒つている。

……まあ当然だろうが。

「あ、ああ、そう…。で、そのC.C.は?」

「ルルーシュが医務室に運ばれたから、その付き添い

「そう…」

だつたら今頃はルルーシュの枕元で献身的に看病でもしているのだろう。

思わずその光景を想像してしまつたら、傷付くといつよりも、あまりの対応の違いにさすがのスザクもムカついた。

自分はしがない騎士のひとりに過ぎなくて、あつちは帝国にひとりしかいない皇帝なわけだから、違ひもわかるような気もしたが、だからといって喜ばしいはずもない。

「アーニヤ、すまない。手間を掛けさせて悪いけど、この縄を外してください？」

ハつ当たりをするつもりはなかつたのだが、言った口調はすっかり不貞腐れた子供のそれで。

それでも本人は大して気にしてなかつたのだが、

「駄目」

思いがけなくきつぱり断言されて、スザクはえつ？と思わずアーニヤの顔を仰ぎ見た。

アーニヤはやはり無表情にスザクの顔を見つめている。

「私がルルーシュに怒られる」

「あんな奴、勝手に怒らせておけばいいんだ」

「皇帝陛下なのに」

「知るもんか。金輪際、あんな奴とはもう縁切りだ」「せつかく」

「え？」

「せつかく『日本』に戻ったのに。また『エリアー』に戻るの？」

暗に責任放棄するのかと責められて、アーニヤがそれを言つこと自体に違和感を覚えながらも、それでもスザクは吐息せざるを得なかつた。

「……またしかにね。……それはそうなんだけだ……」

しばらくしてもう一度縄を解いてくれるようにアーニヤに頼んでようやく自由を取り戻したスザクは、ベッドの上に胡坐を組み、悄然と息を吐きながら肩を落とした。

アーニャの握力では縄を解くことは難しかったので、細かく切り落としたそれをアーニャは適当な箱の中に投げ入れて、しばらくすると「コーヒー カップ」を片手にベッドサイドに戻ってきた。

「飲む?」

「…あ、ありがとう」

「コーヒー カップの中身はただの水で、おそらく部屋に備え付けの鉱水のビンから汲んできたのだろうが、今はその気遣いがありがたかった。

口の中が自分の唾液が染みるくらいに切れているのがわかつていたから、慎重に少しづつ常温の水を口の中に含んだ。

それでもやはりビリリと感電するような刺激を感じたので、イテテと小さく咳きながら喉の渴きを癒した。

「はい」

そしたら、飲み干した「コーヒー カップ」を受け取ってくれると同時にアーニャが手鏡を渡してくれたので、反射的に自分の顔を覗いてみたのだが、自分でもギョッとして笑ってしまうような「ご面相」だつた。

両の目蓋が切れてうつすら血が滲んでいて、眉尻から流れていた血がそのまま固まって赤黒く変色していた。頬を中心に顔の全体が腫れているものだから、とても自分のものとは思えないホラーな有様に思わず「ははは」と乾いた笑いを浮かべてしまつたら、頬の筋肉が引き攣つてひどく痛んだ。

「……ツツ」

痛みに顔を顰めてみるけれども、それすらやつぱり痛くて。

立場の違いは理解しているつもりでも、ここまで露骨に差別化を図らなくても別にいいだろうにくらいは思つてしまつ。毎日一生懸命働いてきたつもりなのに、けっきょくはこの程度の扱いかい、くらいは思つてしまつ。

すると、その横からまたアーニャが唐突に何かを差し出した。

「治療、する?」

アーニャが手にしていたのは、特派時代にも頻繁にお世話をなつていた携帯用の救急箱だった。

おそらく誰かがアーニャに渡してくれたのだろう。

「あ、うん。…というよりも、できるの？」

言つてしまつてからさすがに失言に気付いたが、アーニャはそれでも淡々と治療の準備を開始した。

「私もラウンズ…だつたから。訓練は受けている」

「うん、それはまあ、そうだけど…」

ナイトメアに騎乗する人間は、必ず自分で最低限の治療ができるよう訓練を受けている。

しかし、アーニャが甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている状況がなんだか意外な感じで、だからそんなふうに訊いてしまつたわけだが。

アーニャの助けを借りながら、ボロ雑巾になつてしまつた執務服を脱ぎ捨てて上半身裸になると、意外に慣れた手つきでアーニャが傷口の消毒を開始した。

ただし、そこはやつぱりアーニャらしく容赦がなかつたが。

「い、いて、痛いよ、アーニャ！」

「我慢して」

「つて言われても、ぐあッ、くうう…ッ」

胸も背中も擦過傷だらけで、昔はこうした怪我にも慣れていたはずだったが、最近とみに怪我をするような状況からは遠ざかつていたのに気付いて、思わずズザクは神妙な気分に陥つた。

他人の命を奪い、自分の命も危険に晒している毎日だけれども、肉弾戦をやつしているわけではなかつたから実際の身体には傷ひとつ負わない。怪我をしたときはすなわち、瀕死の状況に追い詰められている時なのだ。

しかし、ナイトメアを使用している限り、人はその痛みから遠ざかってしまうから、いつだって他人の命を安易に危険に晒してしまう。

たとえば、 そう。あのプラットリー卿のように。

「……ねえ、アーニャ？」

「なに？」

消毒を終えて、化膿止めのジェルを塗り付けながらアーニャが淡々と答える。

スザクは自分の足元に視線を落としたまま続けた。

「きみは戦場で……今まで何人殺してきた？」

アーニャはすぐに塗り終えたジェルに蓋をして、次の治療の準備を進めながら答えた。

「それって、悪趣味」

「え？」

「命令だから従つた。それが私の任務だつたから。でも戦つていた相手はいつも一人

「ひとり？」

「そう。自分が死なないために、自分の弱さと戦つた。スザクは、ちがうの？」

言われてスザクは黙然と考え込む。

自分は……いつもどうしているだろう？

むしろ自分が死ぬことは考えずに無茶ばかりを繰り返してきている。

自分は戦場で戦っているわけだから、いつでも死ぬ覚悟はできていると思っている一方で、破れかぶれになりふり構わず戦っているだけなのかもしれない。

それだからこそ、今まで何度も命の危険に晒されて　その結果、自分はナナリーを殺してしまった。

もつと慎重に生き残ることを前提に行動していたならば、悪戯に3,000万人もの命を奪ってしまうことにはならないはずだった。どっちにしろ、今更考えても仕方のないことではあるけれど。

「腕、上げて？」

いつしか背中や腹回りに湿布を貼り終えてしまっていたアーニャ

が、包帯を手にスザクにつながした。

スザクはとっさに指示に従つたが、スザクの胸元に屈みこんでいるアーニャの髪の先がふわふわと頬や顎の辺りをくすぐるので、なんとなくだらしなく笑つてしまつ。

「……アーサー、元気にしてるかな？」

アーニャの髪の感触から連鎖的に思い出してしまつたわけだが、アーニャは少し驚いている様子で、胸元に屈みこんだままスザクを見上げる。

「一緒に居ないの？」

「うん……。世話を焼く時間が取れそうになかったから、温室の管理をしている馴染みのおじさんに頼んで預かってもらつてる。同じ敷地内に住み込みで勤めている人だから、時間の空いたときにはいつでも会いに行けるんだけどね、これがなかなか……。　ああ、そうだ。せつかくだからアリエスの離宮にアーサーを連れて行くかい？　きみならアーサーも気に入つていたし」

「駄目。それだと、あなたに会えなくなる。きっと、アーサーも淋しい」「え？　そ、……そつかな？」

「そう」

なんとなく、変わったなとスザクは思つた。

自分は毎日忙しくしていたから1ヶ月なんてあつという間だったが、ラウンズの一員として毎日戦争に明け暮れていた日々と比べると、アーニャもゆっくり時間をかけて色々考えていたのかもしれない。

見た目の反応は何も変わりないので、いまいち確証は得られないのだが。

「腕、下げる」

「ああ、うん」

素直に従つと、今度は腕の治療を始めたアーニャがぽつりと語り始めた。

「ナナリー 皇女殿下の日記を読んだ。家族と天気と食べ物の話と、そんなことばかり書いてある。でも、何度読んでも嫌にならない。

皇女殿下は小さい頃からあのまま。何も変わってない」

「うん、ナナリーは…… そうだろうね…」

答えるスザクも実際は、ナナリーの幼少時代はあまり知らない。日本に人質として送られてきたときの記憶がわずかばかりあるだけだ。

それでも7年ぶりに再会して、そのときもナナリーは何ひとつ変わっていない。それはすなわちそれだけルルーシュが必死で守ってきた成果ではあるけれども、ナナリー自身も懸命に変わらない努力を続けていたはずだ。

手早く右腕の治療を終えてしまつたアーニャが左腕を貸せというので、スザクは痛む身体を励ましながらなんとか身体を反転させた。消毒前に濡れたタオルで綺麗に拭ってくれながら、アーニャが静かな述懐を続けた。

「皇女殿下の話は苦しい？」

「え？ いや…別に」

たしかに自分が奪つてしまつた命だ。 それでも。

「たとえ苦しくても、意識的に避けることはしたくない。ナナリーは何も悪くないんだから」

良心の呵責は、すなわち命の重さに対する贖罪だ。 だつたら、自分はそれを甘んじて受け入れよ。

「良かつた。あなたが聞いてくれないと、私が苦しい」

「……アーニャ…？」

アーニャがそんなふうに言つのがあまりに意外で、スザクはわずかに目を見張つた。

アーニャはやはり見た目ばかりは淡々と腕の治療を続いている。

「皇女殿下のことを考えながら、いろいろ感じたことがある。でも誰も皇女殿下を知ってる人が居ないから、感じていることが形にならなくて、曖昧なままでこかに消えてしまうから、どんどん私は苦

しくなる。知つてゐる人に声に出して確かめて、意見を聞きたい。

その点、あなたは皇女殿下のことをよく知つてゐる。だから、適任「い、いや、だったらルルーシュのほうがよっぽど適任だと思つけど」

「皇帝陛下のことは、私が知らない」

「それはまあ……たしかに…うん…」

なんとも答えようがなくて言葉を濁すと、タオルから消毒液に持ち替えたアーニャが小首を傾げた。

「迷惑?」

「えつ? いや、そうじやないんだけど、でも、実際問題そうしたくても、頻繁に時間が取れないと思うから。気安く請け負つて、結果的にきみをガツカリさせちやうのは心外だな」

「だったら、簡単。私がここに移つてくる。スザクは手の空いたときには、話に付き合ってくれればそれでいい」

「移つてくるつて……アリエスの離宮から?」

「そう」

「でも、きみ……平氣なのかい?」

正直スザクにも、アーニャの受けた心理的ダメージの全貌が想像できているわけではない。

それでも、どんな意味においても傷付いているのはわかりきつていることだったから、戦争が日常に存在している場所から離れたところで静養を勧めたわけだったが。

アーニャは迷いもなく、こくんと頷いた。

「ひとりで考えられることは、もう全部考えた。あとは退屈。私なら、アーサーの面倒も見てあげられる」

スザクもつられたように意味もなく、うんとひとつ頷いた。

「そうだね、アーサーもきみなら喜ぶよ」

「決定?」

「うん。ルルーシュには僕のほうから話しておぐ」

「そう」

言つても一ひとつとも感情を露わにしないところは相変わらずだが、それでもどこかしら喜んでいる気配は伝わった。

そのうえ、それこそナナリーのよつて笑つてくれるようになるといい。

そんなふうにしみじみ思つていた時だつた。

「それで、どうして喧嘩したの？」

不意打ちで直球の質問を投げられて、思わずスザクは肺が痛むほどに咳き込んだ。

「気が付いたか？」

一方、それと同じ頃、皇族専用の医務室で、眠つてゐるうちに手厚い看護を受けていたルルーシュが目を覚ました。

鎮静剤と痛み止めの注射のおかげで、目覚めてもいささか意識がボウとしている。

だが、スザクがひがんだ理由だけではなく、実際にルルーシュのほうが怪我の程度がひどかつた。

全身打撲と擦過傷、唇や鼻の脇の軽い裂傷に加えて、肋骨が左右合わせて3本折れていた。

もつとも、単純骨折で、危惧された肺からも一番遠い場所だつたので心配はいらないが、本人にとつては痛いことに変わりはない。次第に意識が鮮明に覚醒してゆくほどに、身体中に疼くような痛みを感じた。きつく眉を顰めて、徐々に感覚を慣らしていった。

「平氣か？」

その枕元に腰を下ろしているC.C.が気遣わしげに声を掛ける

と、ルルーシュはゆっくり慎重に息を吐き出した。

「……取つ組み合いの喧嘩など8年ぶりだぞ。スザクは？」

「ああ、アーニャがそばに付いている」

「アーニャが？」

声に力が入らないから、自然囁くようにして問いかける。

Ｃ・Ｃ・はさりげなく、ルルーシュの目に被さっている前髪を邪魔にならないように整えた。

「スザクが一度顔を見せに来いと誘っていたそつだ。私も突然会つて驚いた」

「ふん、いちじちマメな男だ」

吐き捨てるようにして言つて、ルルーシュはそのままつらそうに目を閉ざした。

それ見ていいしかないＣ・Ｃ・は、喉の奥がキュウキュウウッと引き絞られてゆくのを感じながら、からうじて言葉を押し出した。

「……ルルーシュ、私が軽率だった。すまない、本当に反省している」

ルルーシュはちらりと薄田を開けた横田で一瞥を立て、またすぐには目を開じてしまった。

「……別に、おまえに謝罪される筋合いはない」

素直に謝らせてもられないところも相変わらずだったが、こんな場合にはさすがに少し切ない。

Ｃ・Ｃ・はその切なさを埋めるようにして、ルルーシュの髪の生え際付近に片手を添えた。

それを払い除けられなかつたことに勇氣を得て、思い切つて質問を重ねた。

「ルルーシュ……どうして私を遠ざけた？　そばに置いておくのも許せないほど、怒らせてしまつたのか？」

ルルーシュはついぶん長く口を開ざしていたのだが、やがてはつきり「そうだ」と答えた。

想像はしていても、声に出して断言されてしまつと思つた以上に

つらかつた。

心臓がキリキリとリアルに縮み上がり、息をするのすら苦痛に感じる。

「だが、おまえが想像しているような理由じゃない」「……え？」

「おまえの望みは何だ、こ・こ・？」

静かな太刀捌きで一瞬で切り付けるようにして訊いてくる。

私の 望み？

もう『死にたい』と思わないこと。

だが、それは望んでいたことの愚かさを知つて反省しているだけだ。

言つてみれば目標のよつなものだつたから、決して望みに掲げているわけではない。

とつさに返答に詰まつてしまつと、ルルーシュが薄く口を開いて天井を見つめながら瞬いた。

「…………ナナリーは……」

「え……？」

「…………ナナリーは、たつた15年しか生きられなかつた。そのうち五体満足に暮らせたのはわずかに半分だ。守るという口実で実の両親に迫害され、元々あつた自由をすべて奪われ放逐された挙句に、実の兄の思い上がりで儚い命を奪われた。我が妹ながら、さんざんな人生だよ。それでもナナリーは、ただの一度も自分の命を粗末に扱おうとはしなかつた。生きている自分の命に疑問を感じるようなことはしなかつた。そんなことをすれば俺を悲しませることを知り尽くしていたからな、あいつは。永遠の時を生きる魔女にはくだらない話かもしれないが、それでもナナリーは自分の意思で一生懸命に生きる努力を続けていたんだよ。

それに比べておまえはどうだ？ 死にたいだと？ だつたらどう早く言つてくれたら、クロヴィスのやつたように一生寝覚めぬようにカプセルの中に放り込んでやつたんだ。生きる目的も氣力もない

のなら、永遠に眠っていても同じことだろう?」

いつもに比べて張りも艶も失った声音で淡々と、C・C・Cの胸元に断罪の剣を刺してくる。

そして、今のC・C・だつたらルルーシュの気持ちも理解できるのだが、それでも、C・C・にだつてその願いはルルーシュに会うまでの自分には至極正当なものだったのだ。

生きることに絶望しか感じていなかつた頃の自分には。

「…おまえに…なにが」

だから力なく反論を口にすると、ルルーシュはヒュッと短く息を吸い込んで一気に呟えた。

「わかつてたまるかッ!! ナナリーだけじゃない、シャーリーも、ロロもだ! 最後の瞬間まで誰ひとりとして『死にたい』なんて自分を甘やかしはしなかつた。懸命に生きることだけを目標に自分なりの幸福を探して、どうにかしてそれを手に入れたいと足掻き続けていたんだよッ。」

『死ねない』身体だからどうした? いつたい何人分の人生を無駄に浪費してきたのかは知らないが、おまえは『死ねない』からこそそれ以外の人間を生涯通して冒涜し続けているんだ

「ルルーシュ……それはちがう」

「どこが、ちがうッ?」

鎮静剤が効いていても話しているうちに激しく傷が疼いてしまうのだろう。ルルーシュが短く言葉を継いで、ゼイと荒い呼吸で酸素を貪つた。

天井を見つめる両の目が冷徹に笑みを含んでいる。

「……ふつ……『最後くらい笑つて死ね』か? 我ながら何も知らずによく言つたものだよ。おまえが本気でそれを望むなら、今でも叶えてやらなくはない。だが、俺はごめんだね。『死にたい』人間に生きる道理を説くなんて時間潰しは。今の俺にはそんなくだらないことに費やしている時間はない。そんなに死に拘泥していいなら好きにしろ。俺はそんなおまえには用はない。どこへでも好きな場

所に…消えてくれ」

「…………ルルーシュ……ツ」

「 それが嫌ならツ！ 今からでも死ぬ氣で生きる目的を見つけろツ！ 自分の手でツ！！ 自分の力でだツ！！

最後に一度だけ訊いてやるツ！ 本当のおまえの望みは何だツ？！ 心の底から希求して止まない望みは何なんだツ？！」

もう止めてくれと…は思つた。

ルルーシュが痛む身体に鞭を打つてまで心配されるほど重要なことなんかじやない。

そんなに大切にされるほどの価値はない。

それでも、そう思つほどに、真剣に自分と対してくれているルルーシュの気持ちが切なくて。

思い通りにならない感情に、また喉の奥が引き絞られてゆくから苦しい。

自分は身体のどこも痛めてないはずなのに、必要な言葉さえ自由に操ることのできないもどかしさに血が滲むような思いがした。

「…………私は…………私は、おまえさえ…………望んでくれるなら、ルルーシュ…………おまえと一緒に生きていたい」

「だつたらツ！ 少しはそれらしく努力をしろよツ！ 何なんだよ、おまえはツ！ フラフラしているから、スザクなんかに騙されて…ツ！」

「あれは…………だつて、おまえが……許してくれるはずなどないとと思っていたから。私は今までさんざんおまえを騙して、人生を狂わしてしまったわけだからな。憎まれても当然だと思うだろツ？」

「だから馬鹿だといふんだツ おまえはツ！ いつたい今まで俺の何を見て、何を聞いてきたんだ？ 最初から俺のほうこそおまえの存在を利用していただろツ？ 最初からそういう契約だつただろツ？」

俺たちは！」

「 でもおまえは…………まさかこいつまでなるとは想像もしていなかつたはずだ。だが、私は…………最初からすべてを知つていて、それでもおま

えを今の状況に追い詰めた。おかげで何もかも失ってしまったのに……その代わりに残されたのが私では、あまりに割に合わないだろう?」

「……くだらない。だったら、割に合つようじに努力をしろと言つているんだ。それとも自信がないのか? 何百年も生きてきて、人ひとり幸せにする方法も知らないのか?」

幸せ?

そんなものがはたして自分の努力次第で手に入れられるものなのだろうか?

いつだって自分は、他人の幸福を羨ましげに見ていただけだった。幸福はいつだって、他人のものであるはずだった。

そんな自分に。

「ああ、……私はずっとひとりで生きてきたからな」

「だったら、ちょうど良い暇つぶしになるだろ? 僕はこの先も当分は他人のために人生を浪費するので精一杯で、口クに自分の幸福を追求する時間も残つてそうにないからな、暇ならおまえがせいぜい頭を使え」

「おまえを幸福にするための方法か?」

「そうじゃない。あくまでおまえが幸福になるための方法だ」

すなわち俺の幸福が、おまえにとつても幸福なんだろう? と暗に匂わされ、C・C・はくたりと力を無くしたように微笑んだ。

「……この自信家め」

「ああ、悪いがな、俺にはおまえを幸福にするなんて軽々しく約束はできない。むしろ苦しませる自信ならいくらでもあるのだがな。そんな状態が続くと知つていて、おまえに何かを強制するなんてことはできない。だから、おまえがどうしたいかは、おまえが自分で見つけて、選んで、実行してくれ」

ルルーシュの幸福が自分にとつての幸福を意味するならば、すな

わちそれは苦痛に対しても同様だ。

ルルーシュの感じる苦痛は、きっとじ・じ・にじつても同じ分量の苦痛を味わわせてしまうことだらう。

「……安心しろ。それなら私のほうが慣れている。伊達に何百年も生きてないからな」

それでも、望んだ相手に望まれてそばで過ごしていられるなら、一人でひとつのかくも苦痛を分け合つこともできるのだ。

「だったら、そういうことだ。……あとは好きにしてくれ」

ぶつきらぼうに呟いて、疲れたのだろう、慎重に深く息を吐き出して目を開いた。

じ・じ・は少し迷つたが、思い切つて身体を傾けるとルルーシュの肩の上に頬を押し付けた。

「……何だ？」

やれしさの欠片もない声音が無表情に問いかけてくる。

じ・じ・は、そんな聲音にすらどうして自分が笑えて仕方がないのか理解できずに困惑した。

それでも、笑いが止まらないのだから仕方がない。

「……だから、私の好きにしているんだ。……しばらぐの間で構わないから…このままいでさせてくれ」

ルルーシュの体温を間近に感じることができている。

それだけで胸が張り裂けそうなくらいに苦しい。

自分がそれを望んでいる限り好きなだけこの温もりのそばにいられるのかと思つたら、それだけで望みはすべて叶えられてしまったような幸運に感じる。

湿布の匂いがたまらなく目に染みてしまつたが、この格好付けの男が自分のために我を忘れて暴れた結果かと思つたら、そんな青臭いところまで愛しくてたまらないようだに感じた。

ルルーシュは身じろぎもしないでそのまま身を任せていたのだが、しばらくするとフウと小さく吐息した。

指先でじ・じ・のつむじ付近をトントンとノックして呼びかける。

C・C・Cはルルーシュの温もりから離れるのが忍びないような気がして激しく未練を感じたが、呼ばれた手前仕方なく顔を上げると、おもむろにルルーシュの手が強引にC・C・Cの首の後ろを掴んで引き寄せた。

技巧もそつけもないただ触れるだけのキスだつたが、C・C・Cは一瞬で何も考えられなくなつてしまつた頭の片隅で、漠然と幸福の意味を感じ始めていた。

一週間後、C・C・Cはルルーシュに頼まれていた資料を片手に皇宮の中庭をのんびり散歩をかねて歩いていた。

贅沢に人の手間と労力を掛けられる場所だつたから、無駄に殺虫剤などを使用しないおかげで、庭園の至るところに虫やそれを狩る鳥の姿を見かける。歩いている目前に小さな羽虫が飛んできて、それに目を奪われているスズメが鋭く羽ばたきながら横切つていくことなどたびたびだ。

朝からよく晴れている一日だったので、からりと乾いた気候の割りには少し蒸していて、布の面積の広い拘束衣で過ごしているには少々暑かつた。

どう見てもダラダラ霸氣のない様子で、時折ふわアとあぐいを嚙み殺す。

それでなくとも生きる気力をなくしていた魔女の時代にさんざん怠惰を極めていたわけだから、これから先はもう少しシャキシャキ活動に行動しても良さそうなものだが、ただでさえ周り中が非常に殺伐と多忙を極めているこのご時勢に自分まで付き合つて忙しなく

する必要はないよつに感じた。

それでは一緒に居るルルーシュも気の休まる暇がないだろうし、せめて自分ひとりくらいはいつだつてゆつたり構えてあげようと判断した結果だ。

ルルーシュは、わずかに一田ベッドの上で静養しただけで忙しく公務に戻ってしまった。

だが、その間ずっとC・C・Cはルルーシュのそばで過ごしていたので、暇に任せて「どうしていまさら拘束衣なんだ?」と訊いてみた。

そしたらルルーシュは真顔で、「皇帝が直々に捕らえている人間に手を出す馬鹿はいないだろう?」と答えた。

皮肉なことだが、父王シャルルの話した昔話が影響したのだ。

ルルーシュ自身、結果的に複雑な要因が絡み合っていたとは言え母親を皇族関係者に殺されている。

しかし、あくまでそれは母親が平民の出身だつたからと思い込んでいたわけだが、実際は皇族に関係するものならば誰でも簡単に命を狙われる可能性を秘めた魔の巣窟だつたのだ。

知識としてはルルーシュも十二分に知り抜いていたつもりでも、直系の血族であるシャルルの母親ですらそんなふうにあっけなく命を落としていたとはそれまでまったく知らずに過ごしていた。

あの場に限つては、それに構つている場合ではなかつたが、自分がいざ父王シャルルでさえ戦慄させた魔の巣窟に足を踏み入れるのかと思つたら、後になつて危ぶむ気持ちが沸いてきた。

そして自分の命だつたら自分自身で守れるし、いざとなつたらスザクがいる。

だが、C・C・Cは?

スザクと相談を重ねた結果により、言葉で皇族たちの説得が成功しない場合には「我を認めよ」とギアスの力で強制することが決ま

つていた。

まさにその力でユーフェニアを殺された恨みの消えないスザクだったから、基本的に今でもルルーシュがギアスを使用することを嫌っていた。だから何度も話し合いを重ねた末の最善の妥協案だった。そのため、ルルーシュ個人の安全は保障されたようなものだつたが、今となつては率先力として起用することもできないC・C・の立場が微妙な存在になることは初めからわかつていただつた。だつたら、常に目の届く場所に置いておくのもひとつの防衛手段かもしれない。

けれども、それでは自分にとつて大切な相手だという印象を強めてしまふだけだつた。

「我を認めよ」というギアスにより帝位を争う自体は避けられるだろうが、それでも人の世には立身出世を願う欲だけは変えられないものだつた。その欲に関しては人の業であるのと同時に、確かに現状からの成長をうながす行動の原動力でもあるから、むやみに押さえ付けてしまふわけにもいかなかつた。

結果、存在価値が高まるほどに身の危険が高じてしまふと考えたのだ。

だから最初から一切の権利を剥奪した。皇帝に囚われている虜囚の身分なら、C・C・に害を与えて出世を目論む輩は減るはずだ。万が一にも、虜囚という身分を蔑んで手を出す不遜な輩が現れても、その程度の安直な相手だったらC・C・が単身排除できるはずだと考えた。

そうしてルルーシュは独断でC・C・の処遇を決めてしまつたわけだつたが、いかんせん人の興味が発するエネルギーを侮つていたものだから、ルルーシュの感知しないところで噂は漫然と広がりを見せていたのだし、そもそも理由を肝心のC・C・に伝えなかつたのが間違いだつた。それでもなんとかして自分にできる方法で未然にC・C・の身に降りかかる危険を避けたいがために考え出した方策だつたのだ。

「しかし結局は、俺の真意も理解できない天然バカが一番身近にいたわけだがな」

ルルーシュは説明の際、そうして思い出した怒りに静かに憤慨していた。

それを言われると、さすがにC・C・も反応に困ってしまったが、あれはあれであるときの自分たちには必要だったのだ。

今の幸福を認めるならば、どんなに愚かな過去の過ちも否定したくはない。

それが苦しいと思うならば、一度と道を踏み外さぬように大事な轍にすればいいわけだ。

とはいってもなかなか実際は割り切るのに時間が掛かりそうではあつたが。

散歩の途中でアーニャに出会つて、お茶に誘われたのでしばらくアーニャの部屋で雑談に励んだ。

三日前に一度アリエスの離宮に戻つて荷物を片付けてきたアーニャは、今ではスザクの部屋の真向かいに用意された自分の部屋でゆつたり流れる時間を過ごしている。言つてみればC・C・と唯一暇を分かち合える相手だつたから、顔を合わせれば頻繁に話に花を咲かせていた。

最近アーニャは心理学の勉強を始めたらしく、自分の内面を見つめ直す努力の一環に知識を用いるのと同時に、できればそつした分野にいざれは進むつもりでいるようだ。

ひとしきり話して、腹の具合も気分も満たされたところでもC・C・はアーニャの部屋を後にすると、ようやく当初の目的の場所に向かつた。

件の執務室は結局、全面改修するしかなかつたので、別の部屋が新たに執務室として用意されていた。

執務室前の近衛兵に用件を告げると、しばしの間があつて中から扉が開かれた。

皇族以外はギアスの力でなく自由意志に基づく忠節心でルルーシ

ユに仕えている者が大半だつた。だから一時期は枢木スザクの愛人として噂の流れてしまつた自分が平然と皇帝に謁見を求めるのに難色を示す者も多かつたが、直接文句を言ってくる連中もいなかつたので、今回の件に憲りたルルーシュがおそらく裏から何らかの手を回しているのだろう。

C.C.はいつもどおりに注がれる視線の意味には気付かぬフリを装つて、ブラブラと執務室の中に足を踏み入れた。

中の配置は以前と若干違つていた。まず入つてすぐの壁の両側に設けられたスペースで皇帝の指示で迅速に作業を進める事務従事官、その奥にかなり広めに取られた会談スペース、別室に大会議室を備えているところまでは同じだが、皇帝の執務スペースが別室に分けられているのが変わつた点だつた。

万が一にも、ふたたび執務に必要な品々を壊されではたまらないと配慮した結果だつたが、なんだか小さな子供を危険な場所から遠ざけるようなやり方に、皇帝として大切に扱われているのか怪しいところだなどC.C.は苦笑を洩らした。

皇帝の部屋の扉の前に陣取つてゐる直近の近衛兵に用件を告げる
と、C.C.は自分で扉を開けて部屋の中に足を踏み入れた。

ルルーシュがひとりで過ごすにはずいぶんと贅沢な広さだつたが、皇帝としての威儀を保つためにも多少の演出は必要だ。重厚にしつらえられた室内装飾は、一昔前の王様が過ごしていいたようなゴシック調で整えられていたのだが、三方の壁に映し出されているスクリーン、それを操るコンソール。イカルガの通信スペースを知つてゐるC.C.の目にはなんだか郷愁を誘われる雰囲気だつた。

もつぱらルルーシュはこの部屋でひとりで過ごしてゐるわけだが、必要のある際にはこの部屋にも要人を招き入れてゐるようだつた。

今はスザクが何かの報告をしてゐる最中で、例の一件以来初めて顔を合わしたC.C.は自分のほうから挨拶した。

ルルーシュに比べたら怪我の程度は笑つてしまふくらいの軽症だつたが、それでもまだ頬の腫れは引いておらず、普通でいるのにな

にやら拗ねて『いる』ように見えてしまったので笑ってしまった。

そしたら、どうやら本当に拗ねていたらしく、いつになくぶつきらぼうにスザクが声を掛けてきた。

「『機嫌だね、C.C.？』

「それはもう、おかげさまで」

「C.C.と機嫌良く微笑みながら、スザクには一瞥を『えただけでまつすぐルルーシュの元に向かつた。』

ルルーシュは革張りの大きな椅子に深く身体を預けているのだが、別に威張るのが目的でなく、怪我の影響でどうしてもその体勢をとらざるを得ないだけだった。

だからC.C.も気にした様子もなく持ってきた資料を渡して、手早く説明を加えて用件を済ませると、そのままぐるりときびすを返した。

だがその際、あまりにさりげなくルルーシュの肩に触れていたので、そのさりげなさゆえに余計に目に留まってしまった親しげな接触に、ワザと当たられていたことを察したスザクが思わずふりに目を眇めた。

C.C.が通り過ぎてゆく瞬間を狙つて、ルルーシュに田線を合わせながら訊ねた。

「ところで、きみたちも『寝たの？』

「なッ…！」

瞬間沸騰する勢いでルルーシュは顔を赤くして固まってしまったが、C.C.はけろりとした表情で振り向くなり笑顔で答えた。

「いや、まだキスだけだ」

「馬鹿かッ！ おまえも答えるなッ！」

あまりに大きな声を上げてしまったものだから、怪我に響いたルルーシュが顔を顰めた。

しかし、スザクは見るからに不貞腐れた様子でフンッと鼻を鳴らした。

「キスだけでそれじゃア、これから先が思い遣られるね」

「スザクッ！」

顔を顰めながら尚も怒鳴るルルーシュに、C・C・は軽く肩をすくめると歩いた道をまた戻った。

なにげない様子で激昂しているルルーシュの肩に手を置いて、軽く上体を傾けると唇の上に触れるだけのキスを落とした。

「ツ！」

なおさら赤くなるルルーシュの肩をポンポンと数回叩いてから、そのまま外野に田を合わせもしないで真っ直ぐに執務室を後にした。呆気にとられた様子のスザクを前にして、どう反応したらよいのかわからずルルーシュは頑なに沈黙を守った。

やがてスザクが嫌そうに肩から息を吐き出すのと同時に問い合わせた。

「幸せかい？」

ルルーシュはグッと言葉に詰まって視線を外した。

「…わ、わからん。…まだ考えている最中だが、むやみに疲れるのだけは事実だ」

「認めなよ。言つておくけど、僕もまだあきらめたわけじゃないからね」

「おま…ツ、スザクッ！」

「では、陛下」

切りつけるように言つて、スザクはルルーシュの追求を遮ると、迫力のある瞳で微笑み。

「今しばらくは我々の幸福を追求して頂くとしまじょうか、世界の幸福を」

騎士の立場に帰つてうながした。

「ende」

TURN 21・555 「猫が飼いたい」（前書き）

ルルタニア@準備中。むしろじんな感じでほのぼのしていく欲しかった願望篇。

「なあ、ルルーシュ、猫が飼いたい」

「……今なんだか激しく幻聴が聞こえたような気がするが、気のせいか？」

「枢木スザクが連れていた猫がいただろ？ アーサーとかいつたかな。あんなに大きな猫じゃなくても構わない。もつと小さい猫で良いんだ。毛色はそう…純白か、ブルーグレーというのも豪奢で可愛いな」

「知っているか、C・C・？ 大きい猫よりも、小さな猫のほうが世話に手間隙が掛かるんだぞ？ それに毛色まで指定すると面倒だとは、」

「ああ、オスとメスのどっちのほうが可愛いかな？ まあ、どっちでもいいか。世話をしているうちに愛情が移ってしまうからな。どっちだつて可愛いに決まっている」

「……おまえには、人の話を最後まで聞くと言つ最低限の礼儀も通用しないのか？」

「だからな、ルルーシュ。私は今ものすゞく猫が飼いたい」

「……ああ、わかった。皆まで言うな。それはつまり、俺に毛色は白かブルーグレーの子猫を探してこいと言つことで、なおかつエサの用意も、トイレの始末も、寝床の洗濯も俺の仕事。子猫のうちは活発に動き回るのが仕事だから、飽きさせないよう手ごろな遊び道具を見つけてくるのも俺の仕事で、もちろん定期的に動物病院に連れて行くのも俺に課された任務で、万が一体調を崩したときは、当然俺が徹夜をしてでも看病する。ただおまえは気が向いたときだけ子猫の相手をして、可愛いなア」と猫可愛がりにしていられる状況だけを用意しろと俺に求めているわけなんだろ？」「

「ふふつ、良くわかっているじゃないか、ルルーシュ」

「ふつ、あんまり褒めるな。うれしくないからな。そんなおまえに最後にひとつだけ聞いてやる。どうして、俺が、そこまで、おまえに、近くさないといけないんだ?」

「だつて、おまえは私の笑顔が見たいんだら?」
(こいつ)

「……(結論的には決して間違ひではないのだが、たゞがにそれは要約しすぎでこやしないか? たしかに俺は『おまえに笑顔をくれてやる』とは言った。だからと云つて、近くしてやるなどと言つた覚えはカケラもないわけだが)……

「どうした、ルルーシュ? おまえらしくもない。言いたいことがあるなら、ハツキリ言えばいいだろ?」

「……や、そんなに、どうしても猫が飼いたいのか?」「うん? 別に犬でもいいけどな。何かをおまえと一緒に育ててみたいと思つただけだ」

(れひこいつ)

「…………(こいつまつ。素直になつたらなつたで、どうしてわがまま度合いがアップしているんだ? どいつも、どうして俺はこんな責められ方で追い詰められなきゃいかんのだ? 落ち着け、俺!)……わかった、やはり毛色は白がいいんだな?」

「いや、別に本当はなんでも構わないんだ。おまえが好きな種類を選んでくれ」

「そういうわけにもいかないだろ、仮にも言つ出したのはおまえだ。そうだな、さく週末にでもブリーダーのところに見学に出かけてみるか?」

「私はいつだって構わないが、本当におまえはそれでいいのか?」

「……(はつ)……こ、いいに決まつている」

「せうか、やつぱりおまえは頼りがいのある男だよ。ルルーシュ」
(ものす)く幸せそうにこいつ)

出かける約束を交わしたついでに、いそいそと他にも見て回りた

い店のラインナップを始めたC.C.を目前に、ルルーシュは今頃ここに至った経緯を茫然と反芻し始めていたのだが、なぜだかC.C.が一コリと微笑むたびに頭の中で何かがリセットされてしまうので、最後にはあまり深く考えないことにした。

どのみち、こいつの笑顔は金では買えないわけだからな。そんなことを思つて、後でこつそりひとりで赤面した。

〔 end 〕

TURN 21・655 「彼女の好み」（前書き）

ルルタニア@準備中。むしろいじつな感じでほのぼのしていくと欲しかった願望篇。

「なあ、C・C・? ゼひとも単純に答えて欲しいんだが」

俺はおまえにとつてタイプなのか? ルルーシュが藪から棒に真顔で訊ねてきた。

そのときひょうひ食べていたピザの最後のひとくちに齧り付いていたC・C・?は、一瞬で味などわからなくなってしまった腹いせに、眉間にギュッと深く皺を刻んだ。

それはまあルルーシュという男は、本人的には理路整然と思考を重ねているつもりでいて、それを全部露わに口に出すわけではなかつたから、一部分を訊かされてしまふ方にしてみれば時にはかなり突飛な奴だったが。

「単純に答えてやりたくとも、あまりに唐突過ぎて困ってしまうわけだが」

そのまま見た目ばかりは冷静に咀嚼してから飲み下すと、C・C・?は空いたピザの皿を折り曲げながら少し憮然と、いつもの態度でやり返した。

ルルーシュは「まあ、そうだろ?」と神妙に頷いて見せている。「いや、おまえが記憶を失くしていた時期があつただろ? 実際にそばにいた時間はほんのわずかなはずだつたんだが、おまえがあまりに簡単に俺に懷いていたのが不思議でな」

「待ってくれ、ルルーシュ。その言い方にはかなりの語弊を感じるぞ? 懐いていたのは私ではない、あくまで記憶を失くしていたほうの私が」

「別に意味が通じれば言い方など気にする必要はないだろ?」「うの?」

「大いに気にするぞ。あれには私の記憶がなかつたように、私にはあれの記憶がないわけだからな。ただ、時々気になつて覗いていたおかげで、多少は事情に通じているのは事実だが」

適当なサイズに小さく折り畳んだところで、珍しく律儀にダストボックスまで歩いて行つて始末した。

その背中にルルーシュが、淡々とした調子で突っ込んだ。

「そうか。やっぱり覗いていたのか」

「ツ、…し、仕方がないだろう？ 考える時間が欲しかつたとは言え、おまえに無断で入れ替わつてしまつたわけだしな。ただ、記憶が無いなりに私的な観点で言わせて貰えば、あれは懐いていたというよりも、新しい主人が優しい奴だつたので単純に安心していたのだろう」

□早に言つて元の場所に腰を下ろすと、ルルーシュが食事の最中は避けて置いてくれたチーズくんの人形を渡してくれながら続けた。「だから、そこだよ。俺には安心されるようなことは一つもした覚えがないんだが」

「あつたじゃないか。

第一に、遺跡からあいつを連れ出す際に、おまえもまだ動搖していたはずなのに、怖がらせないように何かと声をかけていた。

第二に、イカルガに戻つたおまえは文句も言わずに、私の散らかしていた部屋を片付けた。その際、極力大きな音は立てないように気を配つていただろう？ そうした細かい気遣いには慣れていなかつたから、それだけでも第一印象はかなり違つたはずだ。

第三に、私もしてもらつたことがないくらい親切にピザを食わしてやつていたな。あんなに上手いものを食つた経験は皆無だつたらうから、あれだけでもかなりの高ポイントだ。

第四に、たしかに仮面で殴つてしまつたのは頂けなかつたが、その後のフォローは満点だった。あいつの話を聞いても、安っぽい同情の言葉一つ掛けはしなかつただろ？ むしろあのときはおまえのほうこそ、なんだか無性に守つてやりたい感じだつた。

第五に、やつぱり絆創膏だな。衣食住を世話してもらう以外に人から物を貰つたことがない様子だつたからな。珍しさも手伝つて、単純にうれしかつたんだろう。

第六に、掃除の道具を渡してやつたのが正解だつたな。おまえは特に何も言わなかつたが、あれひとつがあいつに居場所を与えてやつたんだ。

とまあ、総体的に考えて、私から言わせて貰えば、あれならあいつでなくとも安心して当然だと思うわけなんだがな」

滔々と流れるように流暢に語り終えたC・C・は、ルルーシュの差し出してくれたミネラルウォーターを素直に受け取つて、何も考えずに口に含んで嚥下した。

ルルーシュは心底感心している声音で呟いた。

「で、結局俺と一緒にいた時間は、たまたま全部覗いていたわけなんだな」

「ツツグ…ツ！…ツ！…ツ！」

飲み込んだばかりで充分に潤っている口腔内の水分にすら思わず咽てしまつたC・C・は、ルルーシュにしばらくのあいだポンポンと背中を叩かれながら苦しんだ。

「…ぜつ、ぜつたいつ、ワザとだらう…ツい、今の…はツ！」

「バカか。そのつもりなら飲み込む前にするだらう？…ところで、落ち着いてからで良いんだが、ひとつ折り入つてお願いしたいことがあるんだが」

「…は、…はア？」

「いや、おまえの事情は深く訊ねると嫌がるだらうから何も訊かない。それでも、けじめをつけておきたい用件があるから、今からおまえをあいつだと思って言わせて貰つても構わないか？」

そういうと同時に神妙な表情で顔を覗き込んでこられて、C・C・はらしくもなくとっさに返事も出来ずに軽く目混ぜで頷いた。

ルルーシュは、律儀にも声音の調子までわずかに変えて言った。

「あのときはたびたび大人気ない真似をしてしまつて悪かった。で

も、だからこそ、俺にはおまえの気持ちがありがたかったよ
やさしげに微笑さえ浮かべて、最後は子供にするようC.C.
の頬を片手で包んで撫で上げた。

その感触を追うようにカア…と赤面してしまったC.C.は、やはり何も言つことはできなかつたのだが、手を離すと同時にいつも調子に戻つたルルーシュは、皮肉に笑んで言つた。

「だから、どうしておまえが赤くなる?」

C.C.は、中身が半分以上残つたペットボトルを投げつけながら、「知るかッ!」と怒鳴つた。

〔 end 〕

TURN 21・755 「双眼ギアス」（前書き）

ルルタニア@準備中。むしろいじつな感じでほのぼのしていく欲しかった願望篇。

ロイドに乗馬に誘われたので着替えるために部屋に戻ってきたC・C・は、洗面所でじつと自分の顔に見入っているルルーシュの背中に気付いて思わずしばらく凝視した。

基本的に視線は自分の顔の上に据えたまま、上下左右に忙しなくわずかに顔を動かし続けている。

いつたい何をしているんだ？ とは思つたが、しばらく見てもわからなかつたので素直に訊いてみることにした。

「ルルーシュ、美顔体操でも始めたのか？」

「バカか」

一瞬だけ眉間に皺を刻んで、けれども視線はやつぱり自分の顔を見つめたまま動かない。

どこからどう見ても、今はおまえのほつがよつぽど馬鹿だらうと思ひながらC・C・は軽く嘆息すると、好奇心に負けて自分のほつからルルーシュの背後に近づいた。

「だつたら、何をしているんだ？」

ルルーシュは眉間に皺を刻んだまま、低く唸るようにしてそれに答える。

「…さつきから妙に違和感を覚えているんだが、見た感じゴミが入つている風でもなくってな」

「なんだ、それなら眺めているより洗つたほつが早いだろ？。舐めてやろうか？」

「ばつ」

「冗談だ。いいから、ちょっとこっちを向いてみる」
言うなり、ルルーシュの細くとがった顎に手を掛けて、なかば強引にクリツと顔を捻じ曲げさせた。

とは言え、身長一六〇センチ台のC・C・C、一八〇センチ台のルルーシュでは、この体勢にはかなりの無理が生じた。

結局、少々行儀は悪いが洗面台の上にルルーシュを軽く腰掛けさせて、C・C・Cは正面から両手で顔を挟んでマジマジと瞳の奥を覗き見た。

「おい、顔を顰めるな。見えないだろ?」

「おまえがちょっと顔を近づけ過ぎなんだ」

「近づけ過ぎないでどうやつて覗き込むんだ? いいから、もうちょっと可愛くぱっちり目を開けてみる」

「……いちいち癪に障る奴だ」

そうは言いつつも、よっぽど正体不明の不快感に難儀をしているのだろう。ルルーシュは割合素直にC・C・Cの要求に従った。

まだまだ少年期の姿かたちから完全な脱却を図つていよいよルルーシュだから、顔の輪郭も造作もどちらかと言えば美少女的に整い過ぎている。そんな男が、本当に可愛くぱっちりと目を見開いてみせたものだから、思わずC・C・Cは吹き出した。

ルルーシュは、それはもう嫌そうな表情でそれを睨めつけた。

「おまえは……喧嘩を売りたいなら、今なら喜んで買つてやるが?」

「お、怒るな。悪気は無かつたんだ」

さすがにC・C・Cも慌てて謝罪を割り込ませはしたのだが、内心では、本当に男にしておくのが勿体ないくらいだなど今更のように関心を深めていた。

特に手入れに気を使っている風ではないのに、頬はツルツルと白桃のようなすべらかさ。もちろんシミのひとつも見当たらない。

軽く息を吹きかければ顔の産毛に当たってしまいそうな間近から覗き込んでいるにも関わらず、まったく毛穴が目立つていないのは、少々女性の視線的に嫉妬を覚えてしまいそうなほどだった。

上下の睫毛も綺麗に生え揃つていて、その上にクッキリ影を落としている眉の形も整える必要がないくらいだ。

そういうえば、こいつは両親共に美形だったからな……。

なんとなくそんなことを思つたC.C.は、良心の呵責からわざかにツクンと胸の奥に刺激を感じたが、見た目ばかりは何事もない様子を装つて、眼科医きどりの診察を終わらせた。

「ああ…たしかに『ミミ』らしきものは見当たらぬ。ひょっとして、角膜でも傷付けてしまつたのじゃないのか？ 汚い手でしょっちゅう触るから」

「誰の手が汚いんだ？」

ルルーシュは軽く頭を振つて顔の自由を取り戻すと、それが常態であるかのように眉間に再び皺を刻んだ。

「触つてるじゃないか。ギアスを使う前には必須だろ？」「C.C.は軽く指先でルルーシュの鼻梁の線を撫で下ろした。

あと数年もすればここらあたりを中心に、ぞぞかし精悍に成長しそうな予感を秘めていたので、内心では思わずふふっと少しほころんでいる。

ルルーシュは、図星を言いつぶてられてしまつた様子で、ムツと口を開んでしまつてゐる。

仕方ないなアと思ひながら、C.C.は自分のほうから助け舟を漕ぎ出した。

「どうしても困るようなら、制御の方法を教えてやつても構わないが

「そんなことができるのか？」

たちまち驚愕の表情を露わにして見せるのに、こんなところは本当に歳相応だなどC.C.は思った。

「ああ、今なら大して難しくは無いはずだ。右目はまだ発現したばかりだからな、暴走している左の分を意識的に右に少し渡す感じで

「…充分難しいように聞こえるんだが？」

「御託を並べてないで、まずは先にやつてみろ」

問答無用でC.C.は再び両手のあいだにルルーシュの顔を挟んでしまうと、親指をそれぞれ左右の下睫毛の下に押し当てた。

「ほら、左のほうに力が集まり過ぎてゐる。少しづつ右目のほうに

分散させてみるんだ」

「……やつてはいるが…しかし」

「だったら、左は忘れて右だけでギアスを使ってみる。それならで
きるだろ？」「

「うん？ …あ、ああ」

とりあえず素直にギアスを発動させたルルーシュだが、間近
から顔を覗き込まれている状態で目の前にいる相手にギアスを使つ
ているという状況に気後れを感じているようだ。集中力が足りなく
て、すぐさま使い慣れている左田のギアスばかりが発動した。
意外な不器用さに業を煮やしたC.C.は、なおさらルルーシュ
の頬を驚掴みながら密着の度合いを深めてゆく。

「ほら、左は今はしばらく休憩だと言つていいだろ？」「

「…わ、わかつてゐるから、少し落ち着け！」

「見ていろ」ツチのほうが、イライラしてくるんだから仕方がない
だろ？」「

ほとんど洗面台奥の鏡にルルーシュの背中を押し付けんばかりの
勢いで迫つてくるC.C.に、呆れた様子で軽く嘆息したルルーシ
ュは、ごくごくさりげない仕草でチュツとC.C.にキスをした。
「いいから、ちょっと落ち着け。おまえが怒つたからと言つて、俺
のギアスがどうにかなるわけでもないんだろ？」「

冷静に諭されて、しばらくしてC.C.はムツとする余裕を取り
戻す。

「…………だからといって、どうしてキスなんだ？」

「ああ？ ああ、まあ物のついでだ」

何ついでだ？！ C.C.はもちろん激昂したのだが、唇の
上にはまだリアルにルルーシュの唇の感触が残っていたので、なん
だか迂闊に動かす氣になれなかつた。

なんかこう…ふにゅつてしたぞ。ふにゅつて。

よせばいいのにオノマトペ。なおさら感触がリアルに尾を引いて
しまつて、C.C.は意識的に不機嫌な様子で続けた。

「……ああ、ほら、まだ左に力が入っている」

「それのどこがおかしかったのかは知らないが、たちまちルルーシュが肩を震わせながら笑い始める。

「お、おまえは…」

「バカ、笑うな。目を閉じたらギアスが使えなくなるだろ？？」

「おっ、おまえのほうこそ、い、いつだって、す、好き勝手にツ「ヘンな言い方をするな！ たつたの2回だろ？ しかもあれは、ただの記憶の更新だ！ キスの範疇には入らない！」

「ふんっ、じゃアこれでおおいこだ」

クスクスと笑んだままの唇が、再びチュツと…・・の唇に触れてきた。

一瞬だけの接触に過ぎなかつたが、なぜだかとつさに目を開じてしまつたのがマズかった。

唇を離してからしばらくして、ひどく恐る恐るの心境で目を開けた時には、ルルーシュはもう笑つていなかつた。

視線を注いでいる感じから、目を閉じている最中の顔を見られてしまつたことに気付いたが、あんまり眞面目に見つめてくるものだから迂闊に動き出せないでいるうちに、フツヒルルーシュの瞳の幅が狭まつて、わずかに傾けさせた顔を再び寄せてきた。

我慢できる限界までそれを眺めていたC・C・は、唇の上に軽く吐息を感じてしまったところで、思わずギュッと目を瞑ってしまったが。

ガチャ。

すぐ右手側の扉が開けられると同時にスザクが部屋に一步足を踏み入れて、髪の毛一本の距離を残すばかりの二人と目が合つた。

「……邪魔したね」

そのまま数秒経過したところでスザクが無表情にそう言い置いて、入ったばかりの部屋から出て行った。

その背中に、我を取り戻すなりルルーシュが叫んだ。

「～～ス、スザクッ！ こつ、これはちがうッ！ ギアスのッ！」

「！」

「おいつ、ルルーシュ……」

「ツほがつ」

だが、首をもぎ取るような勢いでC.C.に顔を引き戻されてしまつたものだから、ルルーシュは首の筋を違えるかと思った。

「乱暴に扱うなツ！！」

「バカツ、できてる！ できてる！」

「……はア？」

満面に笑みを浮かべて言うC.C.の様子に、ギュギュッと眉間に皺を寄せながら、示されるがままに鏡のほうを返り見た。

「おおツ！」

「なつ！」

「成功だツ！」

鏡の中のルルーシュは、両眼ともに平常時の美しいアメジスト色の瞳をしていた。

歓喜のあまり一人で抱き合って喜んでいるのにも気付けない。

そこにまたスザクが、今度は明らかに意識的な無表情でドアを開いた。

「ツツ？！」

思わず抱き合つたまま固まる一人には構わずに、淡々と用件だけ伝えた。

「C.C.、忘れてるみたいだけど、ロイドさん待ってるから

「……あ、あああ、わかった。すまない、先に行ってくれと伝えてくれるか？ 後からすぐに追いかける」

「お安い御用だ。それとね、ルルーシュ、さつきから僕は、きみを待つてたはずなんだけれどね」

「わわわかった。先に行ってくれ、後からすぐに追いかける」

「後からねエ」

しみじみ嘆息しながら言い置いてスザクがドアを閉めて去つてゆく。

とりあえず後に残されてしまった二人は、この腕の始末をいつたいどうすればいいんだ？ としばらく悩んでしまったが、ややあってどちらからともなくぎこちなく腕を放した。

「……まあ、なんだ。とりあえずは、おめでとうルルーシュ」

「……いや、まあ、なんだ。……ありがとう」

なんだか目線を合わせられないような感じで、いかにも不自然にたがいに顔を反対の方向に向けながら、先に若干の冷静ぶりを取り戻したCCCが続けた。

「と、当分の間はその方法でなんとかできるはずだ。じきに右目のほうも力を増してくるとは思うが、今のうちにその感覚を身体に馴染ませておくことだな」

それにはさすがにルルーシュも真面目に反応した。

「その程度で、制御し続けられるものなのか？」

「人によりけりだが、まあおそらくは」

「ふん？」

言つて、鏡を覗き込んだルルーシュは、しばらくそうして意識的にギアスのオンオフを繰り返していたのだが、やにわにニッコリ笑つて振り向くと、

「さすがは俺のセンセイだ」

とワケのわからないことを言い、表情だけは嬉しそうに笑つた。

「ツだ、だれが誰の先生だつ」

とつさにそう憎まれ口で返しつつも、なぜだかルルーシュの笑顔

を直視できない自分に気付いていた。C
着替えるために奥の部屋に向かった。

・C・は、逃げるようにして

〔 ende 〕

TURN 22・025 「午後のひととき」（前書き）

ルルーシュが皇帝時代、つかの間の休息。ほのぼのです。

冬の陽射しが温容に、皇帝専用の休憩室の飾り窓越しに差し込んでいる。

変わりのない多忙に明け暮れている日々ではあるけれど、意識的に精神的な休息を必要としたルルーシュは、軽く吐息しながら窓際のソファに身体を横たえると、持参していたペーパーバックの本を開いた。

内容は、W・S・モームの短編集だ。

特に愛好しているわけでもなかつたが、他愛無い日常に起こつた些細な出来事を、いさかシニカルに描いてある単調な文章には、思考するのに疲れた脳細胞を心地よく癒す効果に富んでいた。

それほど込み入った内容でないのを良いことに、頭の片隅では別なことを考えながら文字の羅列を読み流す作業に打ち込むうちに、ふいにルルーシュは、傍らに人の気配のあるのに気付いた。

「何だ？」

薄いガラス窓の向こうから小鳥のさえずりが聞こえる以外は、無音に近いような静かな空間。

ページを繰る音をパラリと響かせながら、ルルーシュが目線も向けずに訊ねると、相手のほうからも、まるきり言葉を惜しんでいるような短い返事だけが返された。

「邪魔だ」

「何が？」

「おまえの足」

言われてルルーシュは素直に自分の姿に目線を落とすと、たしか

に三人掛けのソファをひとりで占領しているのに気付いた。

「別の場所に座ればいいだろ？？」

言いながら、それでもあつさり場所を融通してやつたのは、下手をすると「おまえがあっちへ行け」と強引に追い出しかねない相手であるのを知つていいからだ。

ほとんど無意識に氣のない動きで、片方の足だけ床の上に下ろすと、もう片方を邪魔にならない場所まで折り曲げた。

すかさずC.C.は、ルルーシュの立て膝をクッショング代わりに酷使できる場所に、ドサリと音を鳴らして腰を下ろしてきた。

それにはルルーシュも、思わずムッと顔を顰めながら苦言を呈した。

「ほこりが立つだろ？ もう少し女らしく振る舞えないのか」「何が可笑しいのか知らないが、C.C.はクスクスと喉を鳴らして笑っている。

「女らしいのが好みか？」

「別に？」

「言つていることが支離滅裂だな」

「ああ、見てのとおり読書中だからな」

結局そのまま、その場所に落ち着いてしまつたC.C.は、興味深げにルルーシュの手元を覗き込みながら訊ねた。

「何を読んでる？」

ルルーシュは、やつぱり視線も返さない。

「見ればわかるだろ？」「？」

「私の本を勝手に読んでる奴が、えらそつと言つた」

「正確には、ジョレミアの本棚から勝手に拝借してきた本だがな。いつからおまえの本になつたんだ？」

「前にあの男が、好きに読んでいいと言つたんだ。退屈な本ばかりだがな」

「難しい本が好みなら、ロイドもあれで結構な読書家だぞ？」

「ああ、ジャンルが多岐にわたり過ぎていて、一体どういうア見で

集めているのか逆に疑問に思つたが。アレはなかなか面白かった

「フン、暇人め。とうの昔に攻略済みか」

「おまえの命令で、仕方なく暇人に甘んじてやつているんだ。ところで、どこまで読み進んだ?」

「今、主役の男が、ある芸術家の屋敷に訪ねて行つている最中だ」

「ああ、あの話か。オチがなかなか、おまえみたいで笑つたぞ?」

「言つたな、馬鹿。読んでいる最中だ」

「だつたら、早く読め。それより、ルルーシュ? 忘れない

ちにスザクから伝言だ。ジョレミアの到着が予定より遅れるから、自分達は先に試運転のほうを片付けたいのだそうだ

「知つてゐる。さつき通りすがりにロイドを見かけた

「何だそれは? スキップでもしていたか?」

「セシルと一緒に、いつもより三割増し歩くスピードが速かつたからな。奴らの言動に慣れていれば、誰でも容易に想像がつけられる。そつけなく言つなり、ルルーシュは唐突にバタンと音を鳴らして本を閉ざしてしまつた。

そして、眉間に皺を刻みながら言つたものだ。

「俺は、こんなに間抜けな男ではない」

「そうか? 案外そのままだと思うがな」

そのとき初めてC・C・の格好に気付いたルルーシュは、そのまましばらく呆気に取られた様子で口を開ざした。

C・C・は、そんなルルーシュを横目に流し見ながら、耳の上を飾つた小さな羽根飾りを思わせぶりに指で弾いた。

「どうだ? なかなか似合つだろ?」

ルルーシュは愕然と、眉間の皺を量産しながら叫んだ。

「……………どうして、そんなに大きく胸元が開いているんだ?」

つい一時間ほど前まで、いつもの拘束衣姿でゴロゴロ退屈を余していたC・C・は、ルルーシュの執務室を訪ねて来た女官たち

に連れられて、じばらく姿を消していた。

時期的なことを考へても、おそらく作りおいたドレスが完成したのだろうと予想して、忙しさにかまけていりつちに、今まですっかり忘れていたのだが。

たしか俺の考えた「デザインでは」と怪訝そうに咳く様子に、C・C・C・は初めて気付いたような仕草で、自分の胸元に視線を落した。
「ああ、これか。おそらく誰かの命令で、女官たちが気を利かせたのだろうさ。対面上、私は独り身の皇帝を慰める立場にあるからな」とつさに意味の理解できなかつたルルーシュは、怪訝そうに眉間に皺を刻んだ。

「だからと言つて、どうしてそんな部分の布を節約する必要があるんだ？」

「さアな、私はむしろ、おまえの反応を問い合わせたい気分だが？」
さすがの私も、返答次第では容赦しないが？ とソファに腰を下ろしたまま、両手を腰に大威張りで胸を張るC・C・C・の姿に、ルルーシュはさんざん思案した後で感想をポツリと口にした。

「まあ、馬子にも衣装だな。もつとも、俺の「デザインなら……つて、いてッ」

「せつかく一番に見せに来てやつたのに、言つに事欠いてそれか！」「人の頭を殴るな！」

と、ほんと条件反射で返したまでは良かつたが、ルルーシュはふいに眉をひそめながら訊ねた。

「……ひよつとして、他にも誰か見せて回るつもりか？」「いけないか？」

きょとんと目を瞠る女の様子に、ルルーシュは思い切り憮然と顔を顰めた。

仮にも自分の口で、「独り身の皇帝を慰める立場」を認めておきながら、ソレ用に「デザインされたドレスを嬉しげに見せて回る女」の心理が理解できない。

が、その気持ちを無難に言い表す言葉が見つからなくて。内心で

舌打ちしながら視線を逸らすと、ふとC・C・Cの肩口が血で汚れているのに気付いた。

「おいまさか、その格好で喧嘩でもしてきたのか？」

「はア？」

驚きながら、示された場所に視線を落としたC・C・Cは、すぐに思い出した様子で吹き出した。

「バカ、違う。おまえが勝手に執務室から姿を消しているから、仕方なくこっちに向かっている最中に、木の上からアーサーが降ってきたんだ」

「アーサーが？」

「そうとも。飾りの部分が、どうやら氣に入りの様子でな。ときどきスザクも同じように襲われているぞ？」

ルルーシュは内心で、『スザクには嚴重抗議だな』と咳きながら、純白の皇帝服のポケットから取り出したハンカチを軽く唾液で湿らせて、既に止血して乾いてしまっている肩口の血を拭い落とした。

おそらく肩の上で一度着地して、驚いたC・C・Cの動きに合わせて傷の面積が広がってしまったのだろう。小枝で引っかいたような傷跡は、薄く滲んでいた血痕さえ綺麗に拭い去ってしまえば、後には毛筋の傷跡すらも残つていなかつた。

ただでさえ傷の回復スピードが常人離れしている彼女のことだ。これしきの傷など本人にはなんともない様子だったが、なんとなく以前の不手際を思い出してしまったルルーシュは、C・C・Cの左手をそつと掴むと、しばらく何も言わずに記憶の場所を観察した。

「……何の真似だ？」

ややあつて訊ねたのは、C・C・Cが無言でルルーシュの頭をヨシヨシと撫でてきたからだ。

「おまえが、らしくない真似をするからだ。それとも、こっちのほうが良かつたか？」

言つなり、強引にルルーシュの首の後ろに手を回して、胸元まで抱き寄せてしまったC・C・Cは、まるきり子供にするようにルルー

シユの頭を腕の中に抱きしめた。

もちろん子供ではないのだから、一連の行為・自体に不満のあつたルルーシュは、「保護者ヅラをするな」とまたいつものように反論しようとしたのだが、デコルテの部分が大きく露出しているドレスの胸元に鼻先を押し付けられている格好では、何を言つてもサマにならないことに思い至り、そのまま無言でC.C.の身体を押し離した。

「 ん？」

しかしその際、目線の位置の加減で、乳房と脇の下の境目にボツリと薄い影のようなものを見つけたルルーシュは、『アーサーは、一体どれだけ暴れたんだ?』と思わず目を凝らしたが、それは傷ではなくホクロが完成する寸前で時間を止めてしまった、『ぐぐぐく小さなシミ』だった。

ルルーシュの様子でそれを察したC.C.は、自分もその位置を覗き込みながら、苦笑混じりに心配性の男をからかう。

「何だ、ホクロが珍しいのか?」

「別に? ……単に、初めて見つけたので感心しただけだ」

「感心? ならついでに、背中のホクロも見せてやろうつか?」

「 要らん!」

「というよりも、「どうしてそんな場所にあるホクロを、自分で知つているんだ?」と、疑問に感じたままを問い合わせ返すと、クスクス笑い出してしまっているC.C.は、

「どこにもホクロが見当たらないといって、以前マリアンヌに押し倒された経験があるだけだ。息子のおまえなら、特別に許可してやるからありがたく思え」

言うなり、さつむとうなじの部分で長い髪をかき上げながら、既にルルーシュに背中を向けてしまっている。

どうして俺が、と内心では愚痴を呴きながらも、その昔、母親が見つけたのだというホクロの位置には、逆らいがたいような魅力を感じた。

仕方なく、そつけない手付きでC.C.の背中に手を伸ばしたルルーシュは、『捜す』という名前で従つて、遠慮なく背中のファスナーを10センチほど引き下ろした。

しかし、見える範囲に田舎てのものが見付からないものだから、そのうち意地も手伝つて同じ行為を三度ばかり繰り返して、ようやく腰骨に近い背骨の部分に微小なホクロのようなものを見つけた。

「……ああ、これが

見つけた安堵にホッとしながら思わず咳いてしまったが、それ以外には、本当にシミひとつ見当たらない雪原のような肌だった。

「どんなホクロだ?」

「別に? 普通に小さなホクロがポツンとあるだけだ」

むしろ、こんなものをよく見つけられたな? と感心しながら咳くと、ルルーシュが背中のファスナーを元の位置まで戻すのに合わせて、さりげなく服の乱れを直したC.C.は、

「あのときは私も、本気で貞操の危機を心配したぞ?」

と思い出した記憶にクスクスと喉を鳴らしながら笑つた。

一体、どういう付き合い方をしていたんだ? とルルーシュは疑問に思つたが、それを問いただすより先に、思わぬところから邪魔が入つたので驚いた。

「むしろ僕はキミたちの反応に、呆れて声も出ない気分なんだけどね?」

「スザクッ?!」

「何だ、いつから居た?」

別に見られて困る真似など一切していないと知りつつも、条件反射で焦るルルーシュとは対照的に、平然と訊ねるC.C.に向かつて、ほとんど扉の影に姿を隠していたスザクも平然と姿を現しながら答える。

「えっと、『馬子にも衣装だな』って、ルルーシュが答えて殴られたところから?」

「……おまつ」

だつたら、その段階で声を掛けろッ！ と憤るルルーシュを軽く無視して、スザクは続けた。

「というよりも、『背中のホクロも見せてやろうか？』つてものすゞーく直球な誘い方だと思つんだけどね、僕は。ルルーシュって、あそこでファスナーを上げられちゃう人なんだ？ てっきり出歯龜になる覚悟をしたのに、心配して損したよ」

「…………はア？」

何を言つているのか理解できないルルーシュの隣りで、Ｃ・Ｃ・ガクスリと愉しげに微笑んだ。

「コイツにそんな甲斐性があるものか」

「おい、何の話だ？」

「ハイハイ、邪魔者は退散しますよ」

結局、部屋の中には半歩だけ踏み込んだ形のスザクは、言つなり本氣で扉を閉ざしてしまった。

しかし、きつかり一秒後に扉を開けたスザクは、

「たびたび変更して悪いけど、午後から予定していた会議は、明朝早くまで延期したからね、よろしく」

と、今度はわざとらしく扉の影から用件だけを伝えてきた。

要するに、自分の与り知らないところで、残りの仕事的一切が明朝まで延期になってしまったわけだから、ルルーシュも、さすがに焦つた。

「しかし、それでは後の予定が！」

「だったら、鶴の一聲でロイドさんを止めてくれる？ セシルさんも一緒になつて、田の色を変えてしまつてるけどね」

「…………」

思わず歯噛みするルルーシュの隣りで、やはりＣ・Ｃ・は呑気にクスクスと笑つた。

「いいから、連中がおまえを連れ戻しに来る前に、持ち場に戻れ。そのために、こっちには私が派遣されているんだ」

「うん、わかった。 そうそう、Ｃ・Ｃ・？」

新しいドレス、よく似合つてゐるね。綺麗だよ。と歯の浮くようなセリフを残して、スザクは急ぎ足で持ち場に戻つた。

ひとり取り残された形のルルーシュは、返す刀で横田にC.C.を睨んだ。

「 派遣？」

しかし、そんなルルーシュには慣れているC.C.は、構わず鷹揚に足を組んでルルーシュと向かい合つと、クスクスと妙に色っぽい表情で含み笑つた。

「連中なりに、おまえの身体を心配しているのさ。私が言つのも何だが、最近のおまえは働きすぎだ」

「だからといって、ビうしておまえが俺のところに派遣されて来るんだ？」

淡々と齧しつけるようにして訊ねると、C.C.はクスリと鼻を鳴らしながら、思わずぶりにうなじの髪をかき上げた。

「たとえば今のタイミングで、私が全裸でおまえを訪ねて来たらどうした？」

露骨に言われて苦虫を噛み潰したルルーシュは、よつやく話の道筋が見えた様子で傲慢に鼻を鳴らした。

「 何だ、そういう話か」

へソで茶を沸かすといった態度で言つなり、そつけなく背中を向けてしまったルルーシュは、そのまま口口口と怠惰に寝転んだ。C.C.が訪れる直前と、ちょうど上下の位置を入れ替えた形だが、唯一違つのはC.C.の膝を強制的に枕にしていることだ。

C.C.は若干驚きの表情を浮かべながら、しばらくルルーシュの表情を覗いたが、何食わぬ顔つきで既に読書を始めている男の姿を眺めるうちに、納得するものがあつたのだろう。

「 おまえは本当に、負けるのが嫌いだなア」

クスクスと呆れ半分で苦笑を洩らす女の反応に、ルルーシュは気

にした様子もなく平然と受けて流した。

「 要するに、今のおまえは貢ぎ物なんだう？ だったら、一日く

らいは文句を言わずに働け」

「フン、そして明日の朝には、せいぜい氣だるげにアクビの一つも洩らしながら過ごしていればいいのか？」

「演技の必要があるのか？ どうせ毎朝見慣れた光景だらう」「まったく…。實際は、この程度の関係とも知らずになア、よくよく連中も余計な氣を回せるものだ」

客観的には、たしかに文句なく女らしさを強調してあるドレスの胸元を眺めながら、しみじみ呆れた口調で言つて「…」を、ルルーシュはふいに視線を上げると何も言わずにじっと見つめて。窓から差し込む太陽光線に、紫水晶色の瞳を思わせぶりに光らせながら、人の悪い表情で微笑んだ。

「本当にア、實際は、この程度の関係とは誰も知らずに」先に自分が言つたセリフとは微妙に違つてユアンスで重ねて言われて、とつさに言葉の意味を図りかねたC・C・は、思わずしみじみルルーシュの顔を覗き込んでしまつたが。

その頃には、やつぱり何食わぬ顔つきで既に読書を始めている男の姿を眺めるうちに、なぜだか知らず笑えてしまつた。

ルルーシュの顔の輪郭に被さる黒髪に、さりげなく指の先を絡ませながら訊ねた。

「ところで、どの話まで読み進んだ？」

ルルーシュは答える。淡々と。

「今ちょうど主人公の男が、旅先のスペインで医者を」

「あ、駄目だ、言つた！ 私はまだそこまで読んでない！」

「おまえ、異様に読むのが遅くないか？」

「当然だろ？ 一晩に読むのは一話だけだと決めているんだ」

「ふうん？」

氣のない返事を寄越したルルーシュは、それから4、5分ほどで残り全部を読んでしまうと、バタンと閉じた本を手渡しながら、「しばらく寝る」とアクビ混じりに呟いた。

C・C・も、さすがに呆気に取られながら男の顔を覗き込んだが、

その頃には、とっくにルルーシュは寝息を立てていた。

なんとなく手慰みにルルーシュのひたいに被さる髪を搔き分けていたC.C.は、一瞬眠りの邪魔になるかと躊躇してしまったが、ほとんどルルーシュのトレードマークでもある眉間の皺が確認されなかつたので、そのままペタペタと満足するまでルルーシュの顔の輪郭を触って愉しんで。

仕方なく、ルルーシュが目覚めるまでの時間潰しに、本の続きを読み始めた。

〔 end 〕

TURN 22・025 「午後のひととき」（後書き）

この二人はあくまで「共犯者」です。

当人たちにはその自覚が無いのに、傍から見ていると眼のやり場に困ってしまう二人が好き。
ありがとうございました！

TURN 24・125 「魔女の願い」（前書き）

魔女の願いを叶えてくれるのは、ルルーシュではなくスザクです。

「おい、ルルーシュ？ 枢木スザクを知らないか？」

そう言いながら、おもむろに皇帝専用の執務室のドアを開けて入ってきたC・C・は、ルルーシュのことを口々に眺めもしないで、部屋の中をキヨロキヨロ眺め渡した。

ルルーシュは、自分で判然としない理由で、とつやに憮然としながら返した。

「さアな、俺はアイツの見張り役ではない。それより、おまえがアイツに何の用なんだ？」

C・C・は、ほとんど上の空の様子で「ん？」と小首を傾げると、結局そのまま踵を返してしまった。

「いや、別に大した用件ではないんだが……」

言葉半ばでバタンと閉ざされてしまった扉を、ルルーシュは何ともいえない心境で、しばらく無言で睨んだ。

「……大した用件でも無いのに、おまえがアイツを捜すのか？」

どうでもいいけどな。

内心で呟きつつも、思わず眉間に皺を寄せてしまう自分が不快だ。ルルーシュは、意識的に溜息をかみ殺すと、憮然とした表情のまま手元の書類に視線の先を戻した。

その、およそ三時間後。

C・C・が、またおもむろにルルーシュのところに訪ねて來た。

「なア、ルルーシュ？ 枢木スザクを見なかつたか？」

さつきと微妙に訊ね方が変わつてゐるだろ？

とつさにそれを思うルルーシュは、C.C.の発言を逐一覚えて
いる自分に気付いて、条件反射で顔を顰めた。

「さつきも言つたと思うが、俺は」

「そりや」

「　　おい、C.C.！」

ルルーシュが言い終えるより先に、閉ざされてしまつたドアを眺
めながら、慌ててそう呼び止めてしまつたが、しばらく待つても、
閉じたドアは一向に開かれる気配もなかつた。

「……まったく、いつたい何の用なんだ？」

憤然と苛立ちながら舌打ちして、そんな自分の反応に、またルル
ーシュは不快指数を募らせる。

それから、ふたたび三時間後。

「ルルーシュ？ 枢木ス

「知らんッ！」

今度はルルーシュが、C.C.の言葉を遮るように声を荒げると、
C.C.は驚いている表情で大きな瞳をパチクリと見開いた。

「なんだ、何をそんなに怒つている？」

「怒る？ フン、おまえの目は節穴か？ 俺は、至つて普段どおり
に冷静沈着だ。おかげで、仕事がはかどつて」

「そりや？ さつき通りすがりに文官たちが、『今日の陛下は一段
と人相が悪い』とぼやいていたぞ？」

「しつこいぞ！ そんなに俺を怒らせたいのかつ？」

「どうしたんだい、ルルーシュ？ そんなに怖い顔をして怒つて」

そのとき C . C . の背後から、ひょっこり顔を覗かした枢木スザクが、不思議そうな表情で小首を傾げた。

ワケもわからず、一方的にルルーシュに怒鳴り散らされてしまった C . C . は、露骨に迷惑そうな顔付きで眉間に皺を刻んだが、待ち人の出現に、あっさり興味の矛先をスザクに移した。

「お、スザク、ちょうど良いところに帰ってきたな」

「フツ、帰ってきた早々大変だな。この女に厄介事を押し付けられて」

「何を言う？ 私は別に」

「別に？ 大した用件でも無いのに、本気で6時間以上もスザクの帰りを待っていたのか？」

「まあまあ、二人とも。ルルーシュの言い方だと、大した用件でも無いがぎり、C . C . が僕の帰りを待つてちゃいけないみたいだけど。なんだい、C . C . ? 僕に頼み」とって

「おい、あんまりこの女を甘やかすな」

「ん~、きみがそれを言つちやう？」

「どういう意味だ？」

「そうとも。私はルルーシュに、ただの一度も甘やかされた経験など無いぞ？」

「真顔で否定するな。冗談に聞こえなくなる」

「誰が冗談を言つている？」

「まあまあ、だから一人とも」

埒が明かないなアと困惑顔で続けたスザクは、ふいに何かを思い付いた表情でルルーシュの前に立ちはだかると、ニコッとした気持ちの良い笑顔で微笑んだ C . C . に向かつて。

「今後は一切、僕の背後靈が何を言つても気にしなくていいからね

？」

「誰が誰の背後靈だツ！」

「背後霊みたいなものじゃないか。今の僕達が、毎日忙しくしているのは何のため？」

「……そ、それは……」

婉曲にゼロ・レクイエムの一件を匂わされ、思わず一の句を失つてしまふルルーシュの様子を眺めながら、C.C.は一言冷静に「シユールだな」と呟いた。

「安心しろ？ おまえが大事を果たした後の面倒は、私が仕方なく引き受けやる。何しろ私は、ルルーシュの『盾』だからな」
「そうだよ、C.C.、きみはルルーシュの共犯者。僕は彼の剣だ。彼の敵も弱さも、僕が排除する。だからC.C.、守るのはきみの役目だ」

「共犯者……か」

「不満かい？」

「私とルルーシュは……いや、少し不安だな」

「どういう意味だ？」

そのときルルーシュが、とっさにスザクの背後から顔を覗かせようとしたのだが、スザクは素早く自分の身体でそれを遮ってしまう。「幻聴だよ、気にしないで」

その間にも、ムキになつて顔を覗かせようとしているルルーシュの動きを、俊敏な動きでスザクが難なく阻止していた。

C.C.は、憂いを含んだ表情でフツと物悲しげに微笑んだ。
「どうせなら、私に全ての悪を押し付けて、本物の魔女に仕上げてくれれば良いものを…。そうすれば私も」

「そんな真似が出来るかッ！」

「そうだよ、C.C.。きみが、ルルーシュの共犯者なんだ。僕は、彼の剣以外の何者にもなれない。きみが、ルルーシュを守るんだ」

「フツ……共犯者、か……フフツ、……フフフツ」

「いつたい何なんだ？ その微妙に嫌そうなニュアンスは？」

「ああ、いけない。また幻聴が」

「疲れているんだよ、C.C.。もっと気を楽にして掛からなきゃ、

なにしろ先は長いんだから」「

「フフッ……おまえはゼロの仮面で、この先一生世界の平和を引き受ける。その代わりに私は、この先一生ルルーシュと……くッ！」「大丈夫だよ！ 愚痴ならいつだって聞いて上げられるから！ そのためのゼロの仮面なんだし！」

「 何の話だッ！！」

ようやく一人して、ゼロ・レクイエム後のルルーシュの面倒を押し付けあつてゐる事実に気付いたルルーシュが声を荒げるど、C.C.・とスザクは、まるきり申し合わせたように声を揃えてハアと深く吐息した。

「これが、私たちの選んだ……」

「ゼロ・レクイエム」

「私とおまえは……」

「似てなんかないよ。たとえ愚かだと言われても、立ち止まることは出来ない」

「そうだな、スザク」

「……おまえたち……いい加減にしろ」

今にも怒髪天をつきそうになる雰囲気で、一気に加速している怒りのオーラを背中越しに感じたスザクは、ニッコリ気持ちの良い笑顔で微笑みながら訊ねた。

「で、何？ 僕に折り入つての用件って」

「ああ、実はコレなんだがな」

「 シな……ッ！…」

思わずルルーシュが絶句してしまうのも道理で、C.C.・がおもむろにポケットから取り出したのは、瓶詰めのピクルスだった。「どうやら蓋が噛んでる様子でな、私の力では埒が明かないんだ」「安い御用だ。貸してみて？」

「 ちょっと、待て」

今にも二人の間で授受されようとしていたピクルスの瓶を、ルルーシュが強引に奪い取るようにして掴んでいた。

「なんだ？」

「どうしたんだい、ルルーシュ？」

ルルーシュを間に置く形で、左右から同時に怪訝そうに問いを投げかけられ、ある意味ではおまえたち、充分すぎるほどに似ているだろう？ ヒルルーシュは眉間に皺を刻みながら、怒りに肩を震わせた。

「……こんなモノのために、おまえは本氣でも時間以上も俺を煩わせ続けていたのか？」

「こんなモノとは何だ！」

「そうだよ、ルルーシュ！ あのセシルさんが、唯一まともなレシピで漬けてくれたピクルスだよッ！！」

「そうだとモ！ それでも、なぜだか『らうきょつ』の味がするけどな！」

「でも、それもイイ！」

「……おまえらつ……いいから、少し黙つていらッ！」

ルルーシュは、小刻みに肩を上下させながら、おもむろにピクルスの瓶と格闘を始めた。

「ふん…ツ！」

が、そのまま一分経過したところで、小脇に汗のシミを浮かべながら、極めて冷静に微笑んだ。

「焦るな。こいつの場合には、瓶」と少々熱湯に漬け込んで、膨張する中身の空気圧の変化を利用して「ガスの無駄だよ。いいから貸して？」

「おい、スザクッ！」

「はい、どうぞ」

「おお、さすがだな！ 6時間待つた甲斐があつたぞ

「…………」

「お安いご用や。じゃア、僕は急いでいるんで、これで

「邪魔したな」

「気しないで、僕はルルーシュの剣だから」

涼しげに去つてゆくスザクの背中を見送りながら、ややあってルルーシュは、さつそく隣りでポリポリとピクルスを齧り始めている共犯者に訊ねた。

「…………恨んでいるのか?」

「うん?」

「だから、その……おまえを引き止めてしまった件だ」「その間にも隣りからは、ピクルス独特の甘酸っぱい匂いが漂ってきて、ルルーシュは、色々な意味で眉間に濃い皺を寄せていた。C.C.は、三つほどピクルスを完食するまで沈黙を守り続けていたのだが。

「おい、ルルーシュ」

「ん?…………んんうツ?！」

おもむろに唇の間にピクルスを4、5本差し込まれ、ルルーシュは皿を白黒させながら、C.C.の顔を凝視した。

C.C.は、わずかにフツと表情を緩めながら苦笑して、「私の今の気持ちさ」

そう言いながら、寛容な態度で踵を返すと、ゆきへつその場から歩み去る。

満足そうに、ポリポリとピクルスを齧る音を響かせながら。

「…………『私の今の気持ち』…………？」

ルルーシュは、眉間に更なる皺を刻み込みながら、深まる疑問に首を傾げた。

仕方なく、口の中のピクルスを咀嚼しながら。

やがて嚥下してから氣付いたが、それは本当に『ひつときゅう』の味がしていた。

TURN 24・125 「魔女 の 願い」（後書き）

ルルタニア時代が好きです。
どこまでいったも「共犯者」のクセして、こ・こ・こには独占欲を感じてしまうルルーシュ。
そういうお話が大好きです。
ありがとうございました！

「……ギアスという名の王の力は、人を孤独にする。……ふふつ、少しだけ違っていたか。 なア、ルルーシュ？」

空は快晴。平和な田園風景に、藁を積んだ荷馬車がカタコトと穏やかな振動を響かせながら進んでいる。

整備もされていない農道で、車輪が時折小さな石を踏み潰しては、荷台に仰向きで横たわるC.C.の身体を不規則に揺らしている。すがしい空気を肺の中一杯に吸い込むと、なにやら数ヶ月前までの激動を遠い夢物語のように誤解してしまいそうだ。

C.C.は胸元をフリルで飾った白いブラウスに落ちた藁を指の先で摘んだり、珍しく束にして編んでいる髪の先を弄んだりしながら時間を潰していたのだが、しばらくして「口りと腹這いに寝返りを打つと、さらなる独り言を続けた。

「なんだ、まだ怒っているのか？ 執念深い男だな」

言いながら、出立の際にアヴァロンから持ち出したチーズくんの人形の腹の上に顎の先を押し付けた。

ついでに膝を曲げて、子供のするように両の足先をブラブラとリズミカルに揺らし始める。

ずいぶんと久方ぶりに少女趣味的なスカートを穿いているものだから、そんなことをすれば背後からスカートの中身が丸見えだったが、空を行く小鳥ぐらいしか見ている者はいなかつた。

C.C.は、鼻歌さえ内心では交えながら、不思議な独白をさらにつづけた。

「契約は守るものだと言つたろ？ ましてや、約束ともなれば尚更だ。おまえがそれを使はしようとしたから、私のほうから履行

を見届ける努力をしたまでだ。そもそも、こんなことは言いたくないのだがな、おまえは私と交わした契約のこと！」とくを反故にしたじゃないか。最初に私の願いをひとつ叶えると言つて契約を交わしたはずなのに、いざとなつたら私が殺せと言つても躊躇つた。おまえが魔女なら俺が魔王になる、だからひとりじゃないと言つたくせに、言つた直後に記憶を失つて丸一年も私を放逐した。今度は約束まで持ち出してきたくせに……私が責められる謂れはないと思うんだがな？」

ゆるやかに前方から吹き付けてくる風が、やさしくじ・じ・の睫毛の先を揺らしている。

ほのかに微笑みながらゆつくりと過ぎてゆく景色を眺めていたのだが、にわかに小首を傾げると怪訝そうに問いかけた。

「はア？ だからと言つて、それを『騙していた』範疇に入れるのか？ おまえが正しく理解していなかつただけじゃないか。私はひとつも騙してなんかない。責任を私に押し付けるな」

最後は突き放すように言い切つて、チーズくんを抱えたまま寝返りを打つと、また仰向きに空を眺めた。

田に優しい深さの青空に、絵画に描かれるのに良いアクセントになるような淡い雲が浮かんでいる。

中天に差し掛かっている太陽が、すこし眩しくじ・じ・の顔を照らしている。

それが心地好いわけでもないだろ？ 今度はいささか唐突にクスクスと笑い始めた。

「相変わらずだなア、おまえは……いい加減あきらめる。言つておくがな、私だつて完全に最初から結果を見通していたわけではないんだからな

「 そなのか？」

それまで思考で会話をしていたクセに、思わず声に出して訊いてしまったルルーシュは、それに気付いて露骨にチッと舌を鳴らした。それで本格的に笑い出してしまったじ・じ・は、身体を起こすと

動いている馬車の荷台から飛び降りた。

とは言つても、地上にではない。馭者席に腰を下ろしたルルーシュの隣りにだ。

いくらC・C・の体重が軽いとは言え、突然の振動に先導する一頭立ての馬が驚いたようにヒヒンと嘶いた。

ルルーシュは完全に黙殺の態度を変えることなく、目線を馬の背から少しも動かさない。

C・C・は、それでもふふっと軽く微笑んで、ほどよく距離を離した位置に腰を下ろすと、ブラブラ足を揺らしながら話を続けた。

「ああ。だから大変だつたんだからな」

『ゼロレクイエム』と称して、枢木スザク扮するゼロに自分を殺させるお膳立てをしていたルルーシュは、計画通りに一度は完全に死んでしまったのだ。

その死と引き換えに、世界を震撼させていた悪逆王の圧制は終わりを迎えた。

本来ならば国を挙げて丁重に祭られる立場にあるはずだったが、皇帝の死を悼む者など存在しなかつた。

それどころか、もう手を挙げてその死を喜ぶ者が大半だったから、迂闊に目立つた場所に埋葬してしまえば、これ幸いとばかりに、彼に恨みを持つ国民たちに遺体を損壊されてしまう可能性も考えられた。

だから今はゼロである枢木スザクと、その側近のシユナイゼルとの取り決めで、ブリタニア本土のある教会の地下靈廟に目印になる墓標は立てないで安置された。

それでも、どこかから情報が漏れてしまったのだろう。やがてC・C・がその場所を訪れたときには、もう既に石造りの質素な棺には、かなりの暴行を加えられていた。

所狭しと書き殴られている罵詈雑言。石櫃の至る所に削り取られ

たような後が残されているのは、その遺体がブリタニア人であることを示すために彫られた国章をこそぎ落とされてしまっているせいで、石櫃の至るところが原型を留めないほどに崩されてしまつていて、明らかに誰かがそれをこじ開けようとした痕跡を留めていた。

ただ死んだだけでは氣の済まなかつた連中が、腹いせに死者に鞭打つ暴挙に及んだものだろう。

それを予測していたC・C・だつたから、せめて自分の手で静かな場所に埋葬し直してやるつもりで、夜陰に乘じてその地下靈廟を訪れたのだ。

やり方はたしかに不味かつたかも知れない。けれども、ルルーシュの真意を知る数少ない理解者の一人としては、やはりその光景には胸が潰れるような痛みを覚えた。

中途半端な抑圧ではそれを苦痛に感じない人間もいるはずだから、ルルーシュはあえて思い切つた断行に踏み切ることで、人に戦うことの愚かさを思いさせたのだ。

最初から恨まれることを前提に行動していたわけだから、ルルーシュは、こうなることすら予測していたのかも知れないと思いながら、陵辱の限りをしつぶくされている石櫃を悲しい思いで眺めていた。

おまえは本当に、こんな最後で本望だったのか？

そう問いかけていたときだつた。

「私だつて自分の耳を疑つたさ。Ｖ・Ｖ・やマリアンヌが逝つて以来、久しづりのことだつたからな」

石櫃の中からいくわざかな思考の波長を感じて、慌てて頑丈に固定されていた石蓋を破壊した。

最初からそのつもりで訪れていたわけだから、工具なら充分に揃つていた。

思つていたよりも棺を囲つた石はぶ厚く、その内部にはナイトメ

アの装甲にも使われる特殊な合金が箱状に遺体を包み隠していた。

「どうりで監視も付けずに放置していられたわけだ。底の部分も床に埋め込む形でがつちり厳重に固定してあつた。これを外に持ち出そうと思つたら、それこそ教会」と破壊しなければ迂闊に手は出せないだろう。

おかげで C . C . はさんざん苦心して、それでもどうにかこじ開けた棺の内部に、血の気は失せているものの、息を吹き返しかけているルルーシュと対面したのだ。

構造上気密性は完璧だったから、おそらく最初に残っていた酸素も数時間で消費してしまったに違いない。

それでも不死の身体の特徴で、死んだら嫌でも身体が勝手に甦り始めてしまうから、ひょっとするともう何度もルルーシュは生と死を循環していたのかもしれない。

なにしろ C . C . が訪れた時には、遺体が安置されてから 1 週間以上が経過していたのだ。

監視の日が緩む機会を待つ必要があつたから、どうしてもそれだけの期間を要した。

その期間も死んだはずのルルーシュが地獄を味わわされ続けていたのかと思えば一瞬で手足が冷たくなるほどにゾッとしてしまったが、悠長にショックを受けている場合ではなかつた。

軽く仮死状態に陥つていたルルーシュの身体を抱えて、C . C . は用意していた手段で無事に連れ出すことが叶つた。

「あの後おまえは烈火のごとく怒つたが、私だって、まさかシャルルのコードに細工がされているとは夢にも思わなかつたのだから仕方がないだろ？ おまえがギアスを失わなかつた時点で、てつ生きりコードの継承は行われなかつたのだと予測していたんだ。おまえのほうこそ何の自覚もなかつたのか？」

問うてはみるが、ルルーシュが答えないことは知つていたので、

C . C . は構わず先を続けた。

「少なくとも私は、おまえにまた会えてうれしいと思つているぞ。

ルルーシュ

それでもルルーシュは視線も向けずに憤然と憤り続けている。
どうやら生き返った本人は心底それがうれしくないらしい。

おまえには、生きるための理由があるらしい。

それをルルーシュに訊ねた時の、燃えるような生に対する希求をC.C.はまだ如実に覚えている。

だから、こいつなら生爪を剥がして筋に齧り付いてでも絶対に寿命が尽きるまで生きることをあきらめはしないと思っていた。

そのルルーシュが、自らの意思で命を絶とうと決意を固めたのがC.C.には意外だったのだ。

いくらでも死を回避する方法は考えられたはずなのに、ルルーシュは最初からその選択肢を捨てていた。

自分の行動の起点となつた憎しみが、結局何の結果すらもたらしていないことに気付いて、だつたらまずそれを世界から駆逐しようと行動を起こした。

憎しみの対象にシユナイゼルやダモクレスを利用しなかつたのは、本来自己完結型のルルーシュらしいといえばその通りだが。

いざにせよ、ルルーシュが生きるために必要だつた反逆の終結は、ルルーシュが死ぬことを前提に計画された『ゼロレクイエム』で結実したのだ。

それなのに。

「おまえのことだ。こうなることがわかつていたなら、スザクにゼロとして生きる人生を押し付ける必要はなかつたと悔いでいるのだろうが、止めておけ。もうおまえが世話を焼かないでも、人類は好きなように生きていくだけさ。それよりせっかく生きる機会を与えたんだ。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアができなかつた生き方

を、今のおまえが満喫すればいいじゃないか」

意識的に軽い調子で言つてはいるが、そのかたわらでは最悪だと考えている。

ルルーシュの感知しないところで、呪いをかけたシャルルのやり方を。

『神を殺して、嘘のない世界を作る』という大願成就を邪魔されてしまったものだから、ルルーシュには気付かせずにこつそりコードを継承させていた。

ルルーシュが死んだときに初めてその効力が発露するよつに細工を施して。

何をどうやつたのかC·C·にも察することは出来ないが、自分の能力の開発には元のコード保持者であったV·V·も熱心に時間を費やしていたから、シャルルもそれと同じことをしたのだろう。人の記憶や意識を操ることはギアス能力者であつた時代からシャルルの得意技ではあつた。

シャルルに呪いを受けられたその直後に死んでしまつたから、18の少年の身体のまま時を止めてしまつたが、万が一ルルーシュが天寿を全うする道を選んでいたとしたら、老いさらばえた身体で永遠の時を長らえなければいけなかつたわけだ。

おかげで、一度は幕を引いたはずの人生からまんまと呼び戻されてしまつたルルーシュは、いまさらどうにもならぬ怒りを抱えて黙然と黙り込んでしまつてゐる。

かれこれ生き返つてから3日ほどが経過してゐるのだが、その間ずつとこの調子だ。

だが、C·C·にその怒りをぶつけているのはただのハつ当たりだつた。

生前の習慣からそれを継続させてゐるだけだ。

だからC·C·も口では文句を言いながらも、ルルーシュの気持ちが落ち着くまで付き合つつもりでいたのだが、ただ黙つて眺めているような真似はしなかつた。

「 そういうえば、つい先日ゼロが暴漢に襲われたぞ」

「 極力なにげないふうを装つて話題を変えると、さすがにルルーシュはそれには機敏な反応を示した。」

とは言つても、手綱を引く手に若干力が籠もつただけだったが、C.C.は横目にそれを確認しながら続けた。

「もちろん、あいつのことだ、無事だったがな。しかし、ゼロに家族を殺された連中にとっては、あくまで仇はゼロだったというわけさ。それでも、さすがに人類は戦うことによんぎりしているからな、しばらくの間はおとなしくしているだろうが……さて、持つてどのくらいかな？　10年？　いや、直接的な被害の少なかつた地域なら、3年もすればおまえのことなんかすっかり忘れてしまう。当たり前のようになると、平和に慣れて、そのうち退屈し始める。世界の活性化と称して、また戦争のひとつも始めてしまうかも知れないな。そのへんはシユナイゼルの得意分野のはずだから、あるいは上手く切り回すのかもしれないが。それでも、完全に世界から憎しみや紛争が無くなるわけでは決してない。欲の心が消えない限り、いつまでだつて愚かな行動を繰り返す。人間とはそういう生き物だ」

淡々と語るC.C.に追従するようにして、ポクポクと歩みを進める馬のひづめの音が温容な雰囲気をかもし出している。

だが、もちろんルルーシュは呑気に構えていられる場合ではなかった。

しばらくして隣りからルルーシュが奥歯を噛み締めている音が聞こえたが、ギアスの関係の断ち切られてしまつたC.C.には以前のようにルルーシュの怒りの波長を間近に感じることは出来なかつた。

それを『ヤビしい』と思つてしまつのは、さすがにわがまま過ぎるかなと思いながら苦笑を洟らした。

「 さすがは魔女だな。今の俺にそれを言つのか？」

ルルーシュは、ようやく気持ちを押さえつけるのに成功したのだろう。彼独特の高飛車に突き放している声音で、そんなふうに切り

替えた。

Ｃ・Ｃ・は空中に投げ出している足先を、ブラブラ呑気に揺らしながら他人事の調子で続ける。

「ああ、いくらだつて言ってやる。おまえにはこれから色々と学んでもらわなければならないことがあるからな。ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアとして生きてきた18年で導き出したおまえの答えには、私も心から敬意を表している。だが、今後はもっと別な方法で解決することも可能なはずだ」

「スザクたちの犠牲の上に成り立つてゐる現在を侮辱するつもりか？」

「そうではなくて、いすれあいつたちが死んだ後はどうする？　おまえのことだ、目の前でまた似たような愚行に走ろうとしている連中を見つけたら、黙つて見過ごすことができるのか？　私にはとてもそつは思えない」

自分の間は、人も痛みを覚えているからおとなしくしていられるのだろう。

それでも、その痛みを知らない人間はすぐにまた生まれてくるのだ。

そしてまた成長した暁には

ルルーシュはギリギリと奥歯の間で怒りの塊をすり潰しながら、獰猛に唸るように呴いた。

「……だから、それを今の俺に求めるのかッ？」

「おまえが起こした行動の結果だろう？　せつかく生き返ったんだ、ついでに見守ればいいじゃないか。私は賛成しないがな、止めたつて素直に聞くよくなおまえじやないだろ？？」

「勝手に、決めるなッ！」

「私が決めたわけじやない、ただの経験だ。私を誰だと思ってる？　ギアスの力を行使して数多の人間を殺してしまつた良心の呵責に苛まれていたから、ルルーシュは結果的に自分を生かさず殺す道を選んだ。

結果など知らないで済ませられたなら、ルルーシュは本当に幸くな最後を迎えたと言えるだろつ。

完全に自分の思い通りに行動して、完全に思い通りの結果を手にしたわけだから。

だからなおさらシャルルの残していく呪いはタチが悪いのだ。まさかルルーシュの行動を予測していたとも思えないのだが、完全に否定できるほどの自信はない。

なにしろアレは、このルルーシュの実父なのだから。

「だから、それが嫌なら、新しく得られた人生をせめて満喫しようと言っているんだ。一度死んで義理は果たしたのだろう？　だったら別にいいじゃないか」

そう言つて簡単に割り切れるような男なら苦労しないかと内心では独り言を言いつつC・C・Cが反論すると、言葉に窮したルルーシュは正攻法に打って出た。

ハッ当たりではなく、攻撃の対象をC・C・Cに変更したのだ。

「ふんッ、俺が約束を反故にしたから嫌がらせのつもりか？　本当にタチの悪い魔女だよ、おまえは」

C・C・Cは思わず笑つてしまいながら、ルルーシュの横顔を流し見た。

死んだはずの人間の正体がバレるのを恐れて、全身を野暮つたい農民服で覆い尽くしているものだから、なんだかルルーシュを相手にしているようには見えなかつたが、顔覆いと帽子の下にわずかに覗いている目元はやっぱリルルーシュのものだつた。

今は純粹な紫水晶色に輝いているその瞳。

「馬鹿だなア、本気にしてるのか？　おまえは私の願いを全部叶えてくれたクセに」

「はア？」

その瞳が鋭く動いて、怪訝そうに問うて横目で睨んでくるルルーシュを見ながら、C・C・Cはクスクスと愉快そうに笑つた。

Ｃ・Ｃ・俺はギアスに負けたりなんかしない。この力を支配して、使いこなしてみせる。この世界を変えてみせる。俺の願いも、おまえの願いもまとめて叶えてみせる。奴に果たせなかつた契約を俺は実現してやる。だから

それはルルーシュのほうから契約を持ちかけてくれた時に言つた言葉。

本当にうれしい言葉だつたから、Ｃ・Ｃ・は一度も忘れたことはなかつた。
たしかにＣ・Ｃ・の願つていていたように愛してくれなかつたかもしない。『死にたい』という願いすら叶えてくれなかつたかもしない。

それでもひとりの人間としてルルーシュはＣ・Ｃ・を愛した。

今までＣ・Ｃ・が契約を交わしてきた誰ひとりが実現できなかつた方法で、その短い人生を通して本当にギアスの力を使いこなし、世界を変えてしまつた。ギアスに関係した者すべてが不幸になるわけではないのだと、言葉通りの生き様で証明してしまつたのだ。そうして結果的にＣ・Ｃ・の『死にたい』という願望すら變えてしまつたわけだから。

ルルーシュがその生涯の結末に人類に教えたかつたのは戦うことの空しゃ。

おかげで今しばらくの間は、人は戦うことを忘れている。

間接的にＣ・Ｃ・から笑顔を奪うことになる原因すらすっかり取り除いてしまつたわけだから、本当はおまえは私の願いを願つていた以上に全部叶えてしまつたんだよ。

言葉ではなく思考でそれをルルーシュに伝えると、ルルーシュは露骨に顔を顰めて視線を外してしまつた。

コード保持者だけに許される精神感応に、まだかなり戸惑つてい

るらしい。

「こ・こ・のまつにとつても、時折頭の中に直接ルルーシュの声が聞こえるのは慣れないのと同時に、どこかしら照れ臭さを感じてしまう経験だった。

それでも、とこ・こ・は思つ。

「これから先は私のエピソード。ひとりの人間として、私はおまえに愛してもらつた。だから今度はひとりの女として、私がおまえを愛してみようと思つてな」

本当に言いたいことは、これまでと同じで口に出して伝えたいと思つた。

そのほうが記憶に残るような気がしていた。

シチュエーションと、その場に漂う雰囲気、実際の声で聞く言葉の重さ。

ルルーシュに言われた言葉はすべて、そんなふうにしてこ・こ・の記憶に焼き付けられている。

だから意識的に感じている喜びを声に含んで伝えると、いかにもルルーシュらしく鼻の先で笑つた。

「ふん、愛だと？ そんなもの……」

「そう言つな。けつこう捨てたモンじゃないと思うがな」

なにしろ、その想いひとつで、願い続けて何百年の『死にたい』欲求すらたつたの一年ちょっとで変えてしまつたわけだから。

「もちろん、どうしても嫌だというのなら言つてくれ。私がおまえのコードを引き取つてやるから。そしたら多分おまえは、身体の寿命が尽きたところで天寿を全うするはずだ」

「一二一二微笑んでいる聲音でそう言つと、ルルーシュが露骨に怪訝そうな横目でこ・こ・の様子を窺つた。

「……悪趣味な奴だ。そしておまえはまた地獄の人生に逆戻りか？」

「戻りはしないよ。おまえが私の人生から地獄を全部引き取つてくれたおかげでな」

「死なない人生を、生きているとは言わなかつたんじゃなかつたのか？」

そんなことまで良く覚えているなと思いながら、C.C.は苦笑を洩らした。

「それは以前の私だ。今私は、おまえに愛された自信があるからな。その自信が私の中から消えない限り、これまでのようになに生きていることを無為に感じる必要はなくなつたんだ。だから、本当はおまえと別れた瞬間から新しく人生をやり直すつもりでいたんだが、せつかくおまえが生き返つてくれたことだしな。だったら私も素直に欲しいものを求めたい。人生に意義を求めるなら、待つていいだけじゃなく全力で掴み取れ　おまえが、そう教えてくれたんだ」

言葉ではなく、その生き様で。

C.C.が欲していた生きる希望を示してくれたから。
「だから、おまえは好きにしてくれていいんだぞ？」

「言われなくともそうする」

路肩の草を揺らして届いたぬるい風に、青々とした生命の息吹を感じる。

眼前に遙か遠く連なる山の景色も、稜線が空の青さを映したようにキラキラ輝いていて、まるきり地上に落ちた楽園のようだった。何も起こらず平穀で、だからこそなおやら生きることを純粹に愉しませてくれもする貴重な時間の連なり。

「で、どうするんだ？」

しばらく行つたところで、どうでも良さそうな感じに訊ねると、ルルーシュは少しイラついている聲音でいつにいつに言つた。

「だから、好きにしているんだ」

「そうか」

ポクポクと歩みを止める事のない馬のひづめの音が続いている。

こ・こ・は、ふふっと息を洩らして幸福そうに微笑んだ。

〔 end 〕

その短い生涯に数多の変遷を辿つてきたつもりでいた。

なにしろ九つの誕生日を迎えた頃には母を失つて、同時に父の存在も失つたのだ。

拳句の果てに、人身御供として敵対国のだ真ん中に送られて。それに反旗を翻す目的でさんざん抵抗を試みた拳句に、実際は身内の情念が引き起こしたファルスの登場人物の一人として利用されていたに過ぎなくて。

我ながら、その人生には、スタンディングオーベイションで皮肉の喝采を送つてやりたいような心境だ。

それでもルルーシュは、ただの一度も、赤貧を洗うが如しの経験だけはないのだった。

すべてにおいて丸抱えになつてゐるのが癪だつたから、自主的に料理を覚えて、生活費の切り詰め方を覚えて、後には賭けチエスにまで手を出して、せいぜい小遣い稼ぎに精を出したものだが、生活の基盤となる住居だけは、榎木家なり、アッシュフオード家なりが必ず用意してくれたのだ。

その後ろ盾が、今の自分には一切存在してないわけだから、数多に山積している問題を一体どのように解決する氣でいるのかと、ルルーシュのほうでは非常に懐疑的だつたわけだが。

いざ蓋を開けてみれば、人生経験が人並み外れて豊かだったC.C.が独自のルートで裏から手を回して、生きるのに必要になる最低限の書類を、一二三冊のうちに簡単には簡単に偽造してしまつたのだから驚いた。

「一体どうやつたんだ？」と問い合わせても、飄々とした態度を崩さない魔女は、「企業秘密だ」と言って惚けるばかりで、さっぱり要

領を得ない。

たしかに、これまで数百年もその細腕一本で天涯孤獨な人生を過ごしているわけだから、嫌でも必要に迫られて身についてしまった特技なのだろうが。

そうとも知らずに、その相手を今まで下にも置かない持て成しぶりで厚く庇護してきた立場にあるルルーシュにしてみれば、少々くらいは複雑な感慨を覚えないではいられないわけだった。

いずれにせよ、今現在のルルーシュは、以前とは完全に立場の逆転してしまった状態でC·C·の用意してくれた家に住み、C·C·の用意してくれた仕事で口銭を稼いでいるような毎日だ。

フランスのノルマンディ地方然り。

海に面した大陸の果てには断崖絶壁が付き物である。

大西洋の荒波と、そこに吹きつける強風の相乗効果によつて、遮るもののが何もない大陸は容赦なく波に削り取られてゆく。

まさしく古いにしえの欧洲人たちが「ここが世界の西の果て」と信じて当然の景観である。

海面から高さ200メートルの崖が8キロに渡り大西洋に突き出すモハーの断崖。

モハーはゲール語で「廢墟になつた崖」を意味する。

しかし晴れた日には、そこから遠くにぼんやりとある島の存在を確認することができる。

ゴーラウェイ湾の沖、大西洋に浮かぶアラン諸島。

『ケルト文化の聖地』とも言われるその諸島は、大中小の三つの島からなり、ケルトの伝統・民話・言語などを昔ながらの形で残している。

そのうちのいちばん小さな島がイニシシア島だ。

とにかく石と草だけが存在する、寂寥とした原風景。

総人口が300人足らずの寂しい島だ。

ルルーシュがそこで生活をはじめてから、今日で二週間になる。

案内された家は、周囲一帯を十重二十重に腰丈くらいの防風柵が蛇行する牧草地の真ん中にぽつんと立っていた。

唚然とするほど見渡す限りに何もない。

それよりルルーシュを驚嘆させたのは、家の前に立つ一本の木のみの木だ。

今もそれなりに風は吹いているのだが、特に風圧を意識するほどでもない。

耳元では休みなく風の音が鳴っているのだが、ほどよく風が肌をなぶりゆく感触はいつそ心地良いほどだった。

しかし、その家の前に立つもみの木は、まるきりハリケーンレベルの突風に今にもなぎ倒されんばかりに一方向へ激しく枝葉をしならせて、死に物狂いで大地にしがみ付いているようになしか見えないのだ。

「気になるのか？」

茫然と視線を奪われて立ち竦んでいるのに気付いたC・C・Cが、通りすがりにクスリと笑みを含んだ声音で面白そうに揶揄してくる。正直力チンと来てしまったルルーシュは、一瞬黙殺することも考えたが、今は興味を満たしてくれることが先決だった。

説明しようと目線で促すと、C・C・Cは尚も陽気に微笑み、何が愉しいのかわからない口調で歌うように語った。

「ここの立地条件に、この地形だろう? 年中潮風が止まないものだから、どうしても風の吹くまま曲がって成長してしまったのさ」

まるきり、「ヒマワリは口の当たる方角に向かって、花を咲かせるのが当然だらう?」と言わんばかりの口調で。

そんな馬鹿な話があつてたまるかと、ルルーシュが一の句を失つてゐる最中にも、構わずこゝはさつさと家中に姿を消してしまっていた。

いつまでも茫然としていても仕方がないので、ややあつてルルーシュもその後に続いたが、踏み込んだ室内は薄暗く、一見して質素な生活ぶりがうかがえた。

しかし必要最低限の調度類が壁際に機能的に配されているので、小さな家ゆえの息苦しさは感じない。住んでいる人間の機知の表われだ。

「おまえの知人の家のなか?」

暗に、「ここで誰かと同居を始めるのか?」と訊ねると、こゝは隣の部屋から声だけで返してきた。

「いや、私の家さ」

「はア?」

「いいから、先に掃除を手伝ってくれ。話なら、手を動かしながらだつて出来るだらう?」

すっかりこゝの主導で進められる話に、ただでさえ苛立ちの沸点が低いルルーシュは、思い切りムツとしてしまったが、もつともな判断だと理解する理性だけは残つていたので、ひどく不承不承ながらに従つた。

室内は定期的に人の手が入つている様子で一見した感じでは綺麗に保たれているのだが、至るところに埃が堆積していた。

おそらく無人になつてから、一、二年といった辺りだらうか。

部屋を移動する際に目に付いた蛇口をなんなく捻ると、手応えのないままにカラカラと数回空回りした後で、赤茶けた鉄臭い水がドツと一気に溢れ出た。

「そのまま水が澄むまで出しておいてくれ。私は今からバケツを探してくる」

言つより先に移動を始めていたらしく、また別の部屋から声だけが聞こえた。

なんだか本当に魔女みたいだと不貞腐れた気分で思いながら、ルルーシュはただ漠然と流れる水を眺めていた。

その水が、完全に澄み切る前にC.C.は戻ってきた。

さつそく手にしたバケツに水を溜めながら、ルルーシュの目の前には赤サビの浮いている真鍮製の鍵を一本差し出す。

「こつちは先に始めておくから、裏の蔵を見て来てくれないか？ 備蓄してある食糧が、いくらか残っているはずだから」

言つだけ言つて、鍵を差し出している片方の腕だけ残して、自分はもう別の作業の段取りを始めている。

以前に比べれば、人が変わったような積極性を発揮して、きびきび動き回るC.C.に違和感を覚えたせいもあるのだが、なんだか肝心の話から上手いように遠ざけられているような感じもした。

露骨にイラついている表情で返事もしないルルーシュに、さすがにC.C.も少し困つている表情でクスリと温容に苦笑して、自分のほうからルルーシュの片手を手にとつて、その手のひらの上に鍵を乗せさせた。

「妙な勘織りをしないでも、誤魔化しているわけじゃない。話ならいくらでも後でしてやるから、とにかく今はゆっくり出来る場所を用意するのが先決だろう?」

「だったら、ここ掃除は俺がしてやるから、おまえが蔵にでもどこへでも行つてくるがいい」

言つなり、手の上の鍵を突つ返したが、今度はC.C.が受け取らうとしなかつた。

とつさにルルーシュは、奥歯を噛み締める必要があるくらい怒りが高じてしまつたが、それにすらC.C.は困つた風な顔をしてただ微笑む。

「適材適所という言葉を知っているか?」

「……だからどうだと言うんだ?」

「自慢じゃないが、私は料理が得意でない。せいぜい出来るのは、

野菜の皮むきくらいだ」

肩をすくめながら言つたセリフに、ルルーシュも思わずハッとする。

記憶を失くしていたC·C·が、似たようなことを言つていたのを思い出したせいだつた。

しかし、今現在のC·C·は、才女と言つても過分でないほどに数多の知識の持ち主だ。

その女が、どうして料理の腕だけ上達していないかと大いに不満を感じたが、だからと言つてC·C·の手料理を喜んで食したいと思つほどルルーシュは冒険家ではなかつた。

結局、ムツとした表情を隠しもしないで踵を返した。

「出ですぐを右手にぐるりと回つたほつが近道だからな」

もちろん、それには返事もしないで、唯一把握している玄関口から足早に外に抜け出した。

まだそれほど室内では過ぎしていないはずだったが、それでも外に出た瞬間にルルーシュは、腹の底から溜息を吐き出さずにはいられなかつた。

子供か、俺は。

今にも神経が焼き切れそうな気分でそう思つた。

今の自分がC·C·に向けている感情は、ただのハつ当たりだ。それが嫌というほどわかっているはずなのに、どうしたわけか、あの魔女の平然と取り澄ました顔つきや、時折ホツとしている内心を隠しもせずに向けてくる安堵の眼差しが、どうしても我慢ならないのだ。

なぜなら、自分は死んだはずだつた。

これまで自分が起こしてきた行動の責任をすべて背負つて。

これまで自分が奪つてきた数多の生命が、たつた自分ひとりの命で贖えるほど高尚であると傲慢に思い上がっているわけではない。

ただ、自分には『明日が欲しい』という気持ちがあつたから。生きたいと、思ったから。

だから、自分以外の人々を生かすための手段に及んだはずだった。

それなのに。

どうして、俺はまだ生きている？

死ねない身体だと？

何様だ？

どうして、俺一人ばかりが、そんな特権を手に入れて、厚顔を晒してのうのうと生きている？

本当は、生き続けたいと思っていたからこそ、自分自身に与えた罰だった。

自分が、これまでに奪つてきた命の持ち主たちも、すべからくそれを望んでいたはずだったから。

だから、それを奪つた自分自身も当然そうするのが道理だと思った。

だから、完璧なシナリオを用意して、スザクには『生きる』といふ罰すら与えて、ナナリー や シュナイゼルに後の面倒を一切任せ、自分は完全に人生から身を引いたはずなのに。

そう思うだに、あまりに色濃く内心に荒れ狂つている怒りの塊に、ルルーシュはしばらく視力を失つているような状態だったが、視線の先は無意識のうちに、やはり例の木に吸い寄せられてしまっていた。

忌々しい存在だからこそ、気になつてしまつのだ。

朽ちて倒れてしまったほうが簡単だろうに、重力にすら必死で逆らつて大地に縋り付いているような姿が、なんだか今の自分の姿と

重なつてどうしても氣鬱に塞ぎ込んでしまうのだ。

一度は死んで、精神的な懊惱からすべて解き放たれたはずだったのに、何の因果でこんな僻地で、コソコソ隠れて生き続けなければならないのか。

こゝに言われたとおり右手の砂利道をぐるりと回つて歩いてゆくと、家の裏手には伸び放題の大麦が茂つていて、家屋にさえぎられた風にそよそよと揺れていた。

それを横手に眺めながらしばらく歩くと、やがて簡素な小屋のようなところに到着した。

とはいへ、こゝした気候の土地に建つ家だ。壁面はレンガ造りの立派なものだ。

こゝから遠く離れた景色の果てにも、家が一軒建つているのが見えていた。

だが、無人であるのは屋根を見れば一目瞭然だつた。

壁面は石造りなので、物理的に崩されない限り永遠にもそこに残るが、長年の風雨に木の屋根のほうは手入れを怠れば朽ちてなくなる。こゝに来るまでに見かけた廃墟の村も、ことごとく屋根を失いつ切妻だけが昔年の名残をみせていた。

こんな場所でしか、今の自分は生き長らえることができないわけなのだつた。

まったく、とんだ生き地獄だとルルーシュは、憎々しげに内心で父親の姿に思いを致す。

これが実の息子に与える報復か？

物心がつく以前から顔を合わせる機会が少なくて、口クに話した覚えもない相手だつた。

だが、母親が殺される以前までは、それでもまだ幾許かの信頼を寄せていた自分の本音を知つてゐる。

だからこそ、尚更。

どうして母を守らなかつたのかと、最後まで問い合わせてきたわけなのだった。

自分の記憶にある父親だつたら、たとえどんな犠牲を払つても母を守らうとするのが当然だと思っていたから。

そして、何よりも忌々しいことに、裏を返せば、自分にはそれを父に訊ねる権利があると、少なくともその程度には愛されていると信じて疑いもしなかつたからこそ、何度も挫けず正面から立ち向かっていくことの出来た無意識による真実。

あれほど憎んでいたはずだつたのに、それでもまだ心の奥底では、『父親』に対する情の部分が残つていたのかと思ったら、その真実が何よりもルルーシュを打ちのめしてしまつくらいに屈辱的だつた。

蔵の中に備蓄してあつた食糧は意外なほどの種類を備えていた。豆類と根菜類がほとんどだが、明らかに長期間保存するのが目的で念入りに手間をかけてあつたから、少なくとも当分の間は食うに困りはしないだろう。

虫が寄り付かないように敷き詰められている乾燥ハーブ。

燃料に用いるのだろう泥炭も蔵の片隅にはたつぷり備蓄してあつた。

けれども、なにしろ憤然と怒り狂つてゐる状態を続けてゐるわけだから、食欲など微塵も沸いてくるはずもない。

それよりじ・じ・の言いなりに行動させられる自分自身にいまさら押し殺し切れない怒りが湧いてきて、ルルーシュは何ひとつ手につかない状態で薄暗い蔵の中にしばらくたたずんでいたのだが、

結局カララ手のまま踵を返すと、憤然とした足取りで家のほうに引き返した。

癪症に唇の内側の肉を噛み締めながら、部屋の中にC.C.の姿を探した。

C.C.は、どうやら寝室と思しき薄暗い部屋の片隅で、棒の先にタオルを数本くくり付けたハタキを使って、上から順に埃を落としている最中だった。

明かり取りの小窓から射し込む陽光に、部屋中にもうもうと舞っている細かい塵がキラキラ輝く。

「そっちの用は済んだのか？　こっちは私がするから、ルルーシュは、」

自分自身が耳元でバタバタと騒音を生み出しているものだから、しばらくはルルーシュの来訪にも気付いてない様子だったが、そのうち気配で察したのだろう。C.C.が目線も向けずに、やはり淡々と次の作業を指示してくれる。

ルルーシュは、何も言わずにC.C.の一の腕を鷲掴むと、乱暴に引いた腕を反動に任せてベッドの上に突き飛ばした。

「……ツ……！」

抵抗する暇もなくそれに従うしかなかつたC.C.の瘦身が、埃よけに被せてあつたシーツの上に無造作に投げ出され、結っていた緑の髪が空中に四散するのと同時に、ドツと白い埃が舞い上がる。ルルーシュは、何も考えないようにしながら、柔らかい女の身体の上に压し掛かると、口元を覆つっていたマスク代わりのタオルを乱暴に剥ぎ取つて、その下に潜んでいた唇に噛み付いた。

「……ツ……！」

ガツンといきおい良く互いの歯が正面から打ち合つて、那一瞬だけC.C.は苦痛に大きく顔を歪めた。

だが、じきにルルーシュが、慌ただしくスカートをたくし上げながらC.C.の膝を大きく割り広げ、問答無用でブラウスのボタンを外し始めてしまつても、焦りの色ひとつ浮かべはしなかつた。

焦るどころか、冷静にその一部始終を見守りながら、クスリと艶然に微笑み言つてくれたものである。

「最後の一ヶ月間のおまえは紳士的だつたのになア」

べつたり塗り付けられたルルーシュの唾液に、その口元を妖しく光らせながら、これ見よがしに残念そうに微笑まれ、ルルーシュはさらにひときわ激昂した。

「……俺を愛すると言つたのはおまえだ」

腹の上までスカートをたくし上げられているものだから、小さな下着の先からしなやかな両脚がルルーシュの身体のサイドにすっかり露わにさらけ出されている。

元々ブラウスは胸ぐりが大きく開いたデザインだつたから、ボタンを三つも外せば胸元もすっかり覗いでいる状態だ。

ものの数秒で半裸に近い状態にされながらも、それでもC・C・Cは女王然とした風格を失わずに微笑んだ。

「おまえを愛したいと言つたのは私の意志だ。だからといって、この身体をおまえの弱気の慰みに提供する謂ではない。私は、おまえとの間に愛を育みたいと望んでいるのであって、おまえの愛人になりたいわけではないからな」

「……ッ！」

屈辱と羞恥の余り、声も出せなくなつてゐるルルーシュに、一瞬で腹の底まで冷え切るような物言いで、高飛車にC・C・Cは命令を下した。

「どうせ、今は考えようにもマトモに頭の働かないことを知つていいから、おまえの代わりに私が考えてやると言つていいんだ。いいからおまえは、黙つて私に従つてろ。それとも、何か？　ひとりになるのが淋しくて単独行動もできないのか？　あんまり私を、笑わせるな」

最後は露骨に蔑むように鼻の先で嘲笑され、一瞬で頭に血が上つたルルーシュは、バネが弾けるように身を起こすと、脱兎のごとくに部屋から飛び出した。

「考えたんだがな、C・C・。やつぱりおまえとも、ここで別れた
ほうが懸命だと思うんだが」

ダモクレスの掌握後、ナイトオブゼロ枢木スザクの死亡を公式に
発表したところで、ルルーシュは臨時の皇宮で自分のほうからそん
なふうに切り出した。

それに最後まで、首を縦に振らなかつたのがC・C・である。

「私に契約不履行の汚名を着せるつもりか？ 一緒にいると約束し
ただろう」「うう

「しかし

「自分の身くらい、自分で守れるわ。今まで何百年もそうしてきた
んだ。だからおまえは、余計なことを気にするな」

そこまできつぱり言われてしまつと、ルルーシュにも何も言いつこ
とが出来なかつた。

ルルーシュは当初の計画通り世界の憎しみを一身に引き受けたた
めの行動を起こして、C・C・はその傍らで最後まで寡黙にそれを
見守つた。

日々の折々に交わす言葉は無数にあつたが、それでも唯一過去を
振り返るような話は一切しなかつた。

アッシュフォードで暮らしていた時代と同じに、ルルーシュの部
屋で寝起きを共にしていたが、ただそれだけだつた。

C・C・の存在は、ルルーシュにとって影のような存在。

そばにいるのが当然で、当然だからこそ何の変化も起こりはしな

ただそばにいてくれるだけで満足だったのだ。

今まで過ごしてきた時間を一瞬で水泡に帰すが如く、自分の信じてきた者たちが実にあっけなく自分の存在を見限つても、最後まで自分の行動に迷いが生じなかつたのも、常に傍らにC.C.が存在したから。

ナナリーを含めた皇族と、黒の騎士団の公開処刑を行つその日の朝、ルルーシュは出かける用意を済ませると、いつもと同じになにげなくC.C.に伝えた。

「じゃア、そろそろ行つてくる」

C.C.も、いつもと同じようにそれに答えた。

「ああ、行つてこい」

それきりあつさり踵を返してしまひので、あまりのらしさにルルーシュも思わず笑つてしまつた。

だから、うつかり余計なひとことを口にしてしまつたのかもしれない。

「C.C.、どこか行く宛てがあるのか？」

C.C.は少し驚いている表情で振り向いて。

だが、ルルーシュを見つめる眼差しは、少しも潤むことなく至つて普通のままだつた。

「まあ、それなりに何とかなるだらうわ。人生経験だけは豊富にあるからな」

ルルーシュは、なんとなく肩をすくめながら、C.C.の強がりに水を差しておぐのも忘れない。

「あんまり無茶はするな」

C.C.は、ルルーシュに視線を据えたまま、なぜだか呆れたふうに肩を揺らして笑つた。

「私を誰だと思ってる?」

「フン、そうだつたな」

そして、互いに笑顔のまま見つめあい、やがて申し合わせたよう

に同時に踵を返した。

結局C・C・は、ルルーシュの前では一度も涙を見せはしなかつた。

泣いている気配すら覗かせはしなかったから、だから余計にルルーシュも最後まで落ち着いて過ごしていられたのだと思う。

その安心感を『与えてくれた相手に、たった今自分が仕掛けた行為を冷静に思い起こしたルルーシュは、ひとりになるや自分自身を絞め殺したい激しい苛立ちに身悶えた。

C・C・が、黙つて傍にいてくれるから調子に乗つて、苛立ちをぶつけるのすら当然のように思つていた。

C・C・が、どんな気持ちでそばにいるのか考えもしないで。憤りに任せてルルーシュは、家の外壁に拳を振り下ろした。

切りっぱなしの花崗岩の表面は岩場のように乱雑で、一度、二度と殴り続けているうちに切れた皮膚の下から鮮血が吹き出した。けれども、口クに痛みを感じる暇もなく傷口はあつという間に塞がつて、血痕だけが後には残された。

これが呪いの正体だ。

傷ひとつ満足には負うことの出来ない不老不死の身体。

こんな身体になつているのを知つていたなら、もつといぐらでも方法は考えられたはずだった。

それなのに、完璧を信じて一度は死んだ俺を嘲笑うようにして、まんまと甦つてしまつた。

自分には、もうどこにも戻る場所は残されていないのに。

人の心に平和を望む気持ちを刻み付けておくためにも、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの存在は未来永劫悪の象徴であらねばならない。だから、万が一にも残された者たちの判断がルルーシュの望む世界と乖離してしまつても、もう今のルルーシュには黙つて見守るしか方法がないのだ。

スザクや、ナナリーが、苦しんでいるのを知つていながら、もう

自分にはどうしてやることも出来ない。

実にあまりに的確に、ルルーシュのために用意された拷問だった。

およそ三時間で集中的に寝室を磨き上げたC . C . は、少し離れた場所から部屋を見渡すと、満面に笑みを浮かべた。

その気になれば、ここまで『出来る子』であることを結局最後までカレンに知らしめることが出来なかつたと思えば少々腹の虫が收まらないような氣もしたが。それくらい今のルルーシュの心中と比べれば、あまりに些細な問題だつた。

掃除に夢中になつてゐる最中にも、部屋の向こう側で何度も人の足音を聞いたので、ルルーシュが家に戻つてゐることは姿を見ないでも知つていた。

C . C . 自身が不老不死のコードを継承させられた当時のことは、正直言つて、あんまり昔の出来事すぎて記憶に残つていない。

それでも、漠然と今のルルーシュが抱えている不安の正体だけなら知つっていた。

少なくとも、知つてゐるつもりだ。

自分の身体でありながら、死ぬことすら満足に叶わない。

その絶望に加えて、ルルーシュには、実の父親に呪いを掛けられてしまつた恨みもある。

それを乗り越えるためには、一体どれくらいの時間要するのか

C . C . にもわからない。

なにしろ自分は何百年也要して、ようやくルルーシュのおかげで、生きる気力を与えてもらつてゐるわけだから。

「」の先ルルーシュは、生きている限り自分の起^こした行動の結果を、正視し続けなければならない。

おそらく「」が今まで味わつてきたよりも凄惨な人生の始まりだらうと容易に想像できたから、本当は先ほどルルーシュに押し倒された瞬間に「」は迷つてしまつたのだ。

本音を言えば、このまま抱かれてやつても構わないかと一瞬だけ思った。

だが、それではルルーシュをむしろ傷付けてしまいそうな気がして、とつさにああして突き放してしまつたわけだが。

今でもその判断に間違いはなかつたと自信はあるのだが、いかんせん可愛げのない反応である自覚は持つてゐるわけだから、少々迷いを引きずつてしまふわけだ。

思つてゐる背中に、答えのほうから自主的にやつて來た。

「　ああ、こつちもすいぶん綺麗に片付いたな」

突然声を掛けられて、「」はビクリと飛び上がるくらいに驚愕した。

「お…、おどかすなっ！」

完全に虚を衝かれてしまつたものだから、叫んだ声音が上ずつた。が、ルルーシュはあつさりそれを黙殺してしまつと、さつさと踵を返した。

それきり歩みを進めてしまつものだから、呆氣にとられた「」は怪訝そうな小声で呟いた。

「……ルルーシュ？」

ルルーシュは、コツコツと快足を進めながらそれに応じる。

「」ちも大方完成だ

「はア？」

「だから、作業を分担してたんじゃなかつたのか？」

なにしろ狭い家のことだから、そこまで言つたところで、ルルー

シユの背中は別の部屋の中に移動した。

「 . . . は眉間に皺を刻みながら、その場に立ち尽くしてしまつたが。」

「 . . . ? 」

ややあつて、少しイラついているような大声で呼ばれて、埃よけに結つた後ろ頭をガリガリ搔きながらヤケのように叫んだ。

「わかつてゐる、すぐに行くから！」

いつたい、何なんだアイツは。

いつの間にやら、すっかり自分のペースを取り戻してしまつている。

ブツブツ文句を呴きながら掃除の際に使つたバケツや雑巾を片付けて、ルルーシュが向かつたと思しきキッチンへ足を運んだ。

「 …… 」

瞬間的に . . . は、激しい屈辱感に打ち負かされた。

当座の優先順位は低い廊下、玄関先などは相変わらず雑然としたままだつたが、リビング・ダイニングとキッチン周りを中心に見違えるほどの輝きを放つていた。

. . . が寝室ひとつを磨き上げている時間で、ルルーシュはその何倍もの範囲を自分がしたよりも完璧に磨き上げてしまつてゐるのである。

しかも、. . . に言われたとおり、料理をするかたわらで、だ。ルルーシュは得意がるでもなく、キッチンで残りの作業を進めていた。

C . C . は、氣の抜けたようにハア…と肩から息を吐き出すと、素直に敗北宣言を口にした。

「 …… 完敗だ。おまえの得意分野で対抗しようつていうのが、間違いだつたな」

ルルーシュは「バカか」と謂わんばかりの表情で視線を向けてきた。

「それより、埃を被つたろう? 飯の前に風呂に浸かつてこい」「そうしたいのは山々だが、今はまだ水しか使えないはずだろ?」「だから、キッチンで湯を沸かしてバスタブに溜めてある。早くしないと冷めるじゃないか」

どこまで手際が良いんだ、おまえは と呆れたように思つたが、ありがたいことには違ひなかつたので、この際、素直に従うこととした。

交代で湯を使って、簡単な部屋着に着替えると、小さな食卓を間に挟んで向き合つた。

ガスや電気が通されてなかつたから、キッチンで使用できる火力はすべて薪の力によるものだ。

かまどなどおそらく初めて使つたはずなのに、ルルーシュはそれでパンを焼き、根菜と豆類を中心とした料理を数品作り上げていた。もはや対抗意識など、埃と一緒に風呂場で洗い流してしまつたC・C・Cは、やつぱりこの役割分担で正解だつたなど、素直に自分の手柄を喜んだ。

「ん~、出来る嫁をもらつて私は幸せだぞ? ルルーシュ」「ふざけるな」

そつけなく言いながら、ルルーシュがオーブンスープを供してくれるのを待ち、ようやく腰を落ち着けたところでC・C・Cはスプーンを取り上げた。

「いただきます」

言つて、なぜだかニコニコと微笑んでしまいながら、C・C・Cは料理を口に運んだ。

ルルーシュの前でピザ以外食べるのがあまりに少ない経験だったので、それが面映かつたせいもあるのかもしない。

ルルーシュは寡黙にスプーンを口に運んでいたのだが、ややあって、気の進まぬ様子で、溜息混じりに呟いた。

「……C.C.」

「ん、なんだ？」

答える間にも、焼きたてのパンに噛り付く。

さすがにドライイーストまでは備えがなかつたのだらう。パンの食感よりも、ピザ生地のもつちり感に近かつたが、外側をしつかり香ばしく焼き上げてあつたので、咀嚼するたびにパリパリと口の中に崩れてゆく感覚がなおさら美味を誘つた。

だから依然として、C.C.はニシコリ微笑みながらついでのように訊ね返したが、ルルーシュは横目で一瞬だけ恨めしそうにそれを睨んで、やがて不明瞭な声音でボソボソ呟いた。

「だから、その……さつきは、わるかつたな」

言つなり、不味そうな顔をしてスプーンを口の中に運んで、苦いものでも食つたような表情で眉間に皺を刻んだ。

溶け崩れるほどには煮込んでいる時間がなかつたせいだらう、半透明のオニオンが白濁したスープの中に漂つている状態ではあつたが、味のほうは何の遜色もなかつた。

C.C.は、何度かその美味を味わつた後で、おもむろにクスリと微笑んだ。

「ルルーシュ、どうして私がおまえを愛したいかわかるか？」

ルルーシュは、それには答えず困惑した様子で食事を続けた。

C.C.は、喉の奥でクツクツと笑いを弾ませながら先を続けた。「おまえが、私の前では素直でいてくれるからさ。怒りも、悲しみも、憎しみも、忌憚なく全てをさらけ出してくれるから、おまえと一緒に居るだけで安心するんだ。なにしろ私は魔女だからな」

ルルーシュは、スープを執拗にかき回しながら、ぶつきらぼづこ喰いた。

「フン、魔女にもいろいろ種類があると思つたが、おまえは人の悪意を糧にしているわけか」

「そつとも。だからおまえは、何より最高の『馳走なのを』

だから、変な遠慮などしないで、これから先も、みつともなく悩んで苦しめ。

言外にそう呟わすと、ルルーシュは無言でキリキリと眉間に皺を刻んで見せるだけで、何も言い返そうとしなかつた。

少し風が強くなつてきているようで、部屋のどこかでは薄いガラスが絶えずカタカタ鳴つてゐる。

とつぱり田も暮れてしまつていたから、唯一の光源は、かまどの火と食卓の上の蠅燭だけだつた。

ゆらゆらと頼りない明かりに照らされているルルーシュの顔を眺めるのは、本当に見てゐる者にとっては田の「」馳走だなと思ひながら、こ・こ・はクスクスと愉しそうに笑つた。

「だいいち、だ。私のことを抱きたいなら、おまえも私を愛する」とせ。こんなに可愛い女が相手なら、簡単なことだらう?」

だから、好きになつたらいつでも言つていい。喜んで抱かせてやるぞ?

そつけない調子で付け加えると、ルルーシュは音を立てそうな勢いで激赤して、湯が沸いたのを口實に、ガタンッといふせんべく音を鳴らして席を立つ。

「……誰がツ」

吐き捨てるようにそう言つたが、明らかに思い出した羞恥に、身の置き所を失くしているのが明白だつたので、こ・こ・は、やっぱり女王然とした余裕の態度でふふふと愉しげに笑みを零した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1984m/>

コードギアス 本編派生短編集

2010年10月8日13時15分発行